

第1章 E区の調査

E区は、C区とD区の西側と東西に解析された「かにあらの沢」と呼ばれる小浸食谷の東側に位置している。E区内の北西には浪ノ上1号墳が所在している。浪ノ上1号墳を除いたE区の範囲は、東西約100m、南北約30m、面積約3,000㎡であるが、実際の調査面積は工事による削平部分と墓地改葬の部分の面積を除くと約2,300㎡である。

区画整理区域内には正円寺の墓地が所在していたが、区画整理事業の進捗に伴って、E区を断ち切るように東西約13m、南北約28mの範囲で墓地改葬が行われた。墓地改葬が行われた場所へ任意に南北に直線を引き、この墓地改葬の東側32mの範囲を東地区とした。墓地改葬の西側は、東地区の南北に引いた直線から32mのところ南北に平行に直線を引き、その直線の西側を西地区、東側を中央地区とした。

昭和57（1982）年5月22日特別養護老人ホーム「さわらび荘」の東側の沢に南北に幅1m、長さ2mのトレンチを6カ所設け、試掘調査を行った。トレンチは南から北に1～6トレンチとした。発掘調査は区画整理事業の進捗状況にあわせて調査する必要に迫られた。そのため、東地区の北半分をE-1区、南半分をE-2区、中央地区の北半分をE-3区、中央地区の南半分と西地区をE-4区とした。

第1節 竪穴住居址

E区内から検出された竪穴住居址は19軒である。

東地区では、E-SB1からE-SB10までの10軒が検出された。遺構の切り合い状態は竪穴住居址E-SB2の北西壁を掘り込んでE-SB3が構築されている。さらに、E-SB3の北西部にE-SB4が構築されている。E-SB6とE-SB7では、E-SB6の北西壁と南西壁を掘り込んでE-SB7が構築されている。E-SB6は、方形周溝墓E-SZ1の北側の周溝を掘り込んで構築されている。E-SB8は、方形周溝墓E-SZ1の西側周溝と接している。E-SB9はE-SB5の南西壁、南東壁を掘り込んで構築されている。E-SB1、E-SB8、E-SB10は土壇や近世土壇墓との切り合いはあるものの竪穴住居址として独立して存在している。

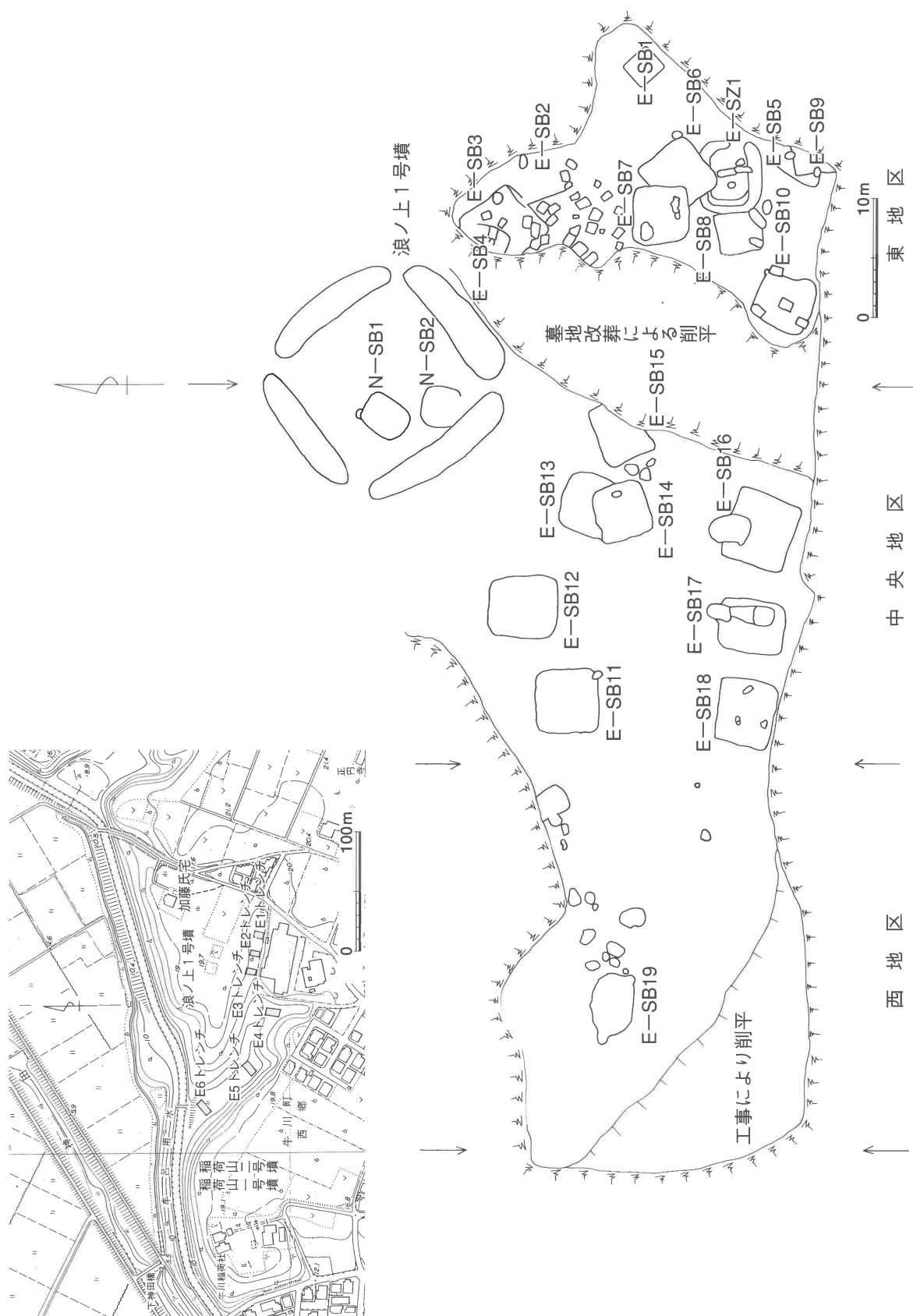
中央地区では、E-SB11からE-SB18の8軒が検出された。E-SB14は、E-SB13の北西壁と南西壁、さらに南東壁の一部を掘り込んで構築されている。E-SB11・E-SB12・E-SB15～E-SB18はそれぞれ独立して存在している。

西地区では、E-SB19の1軒のみ検出されている。

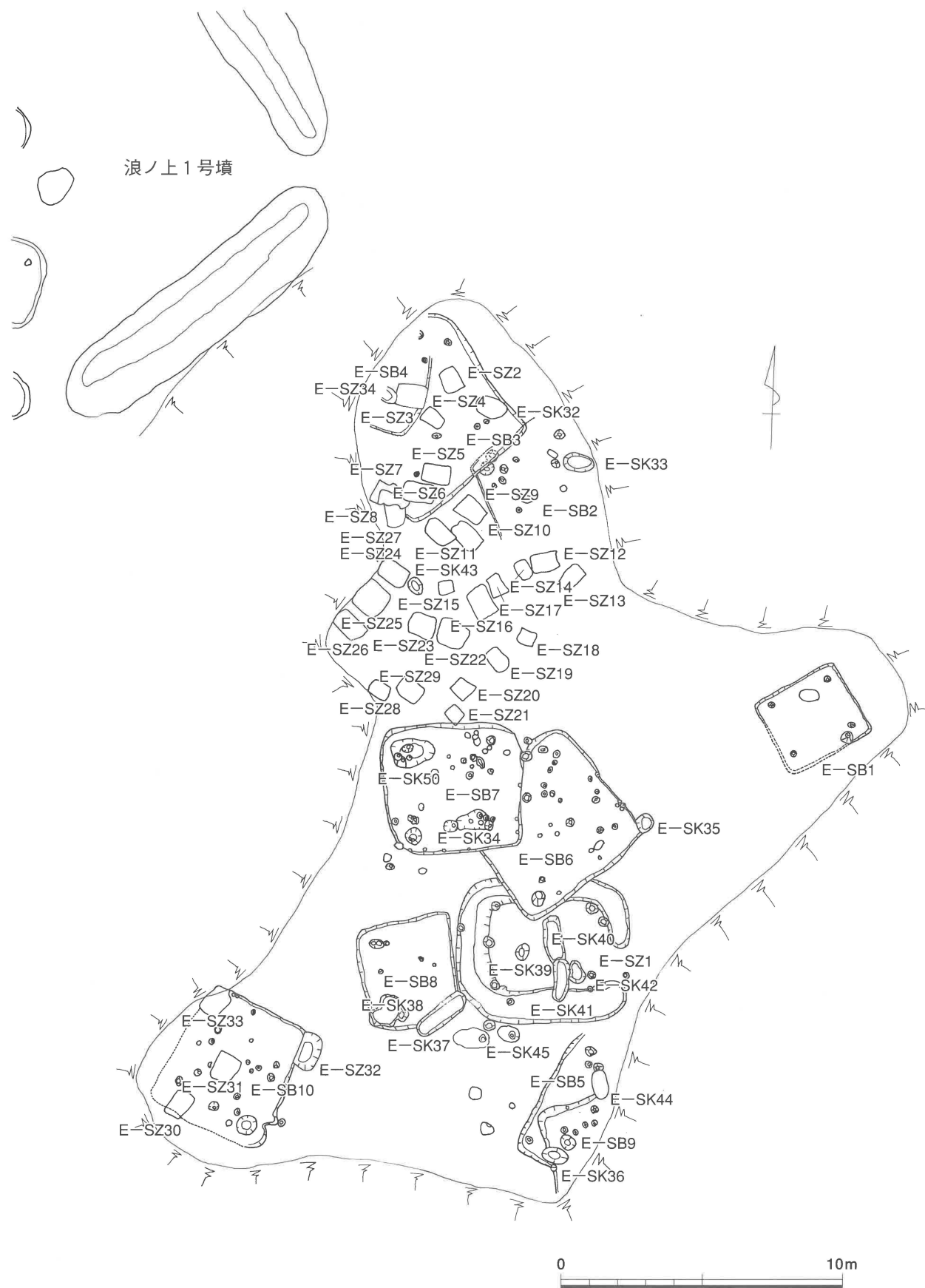
1、竪穴住居址E-SB1

（1）遺構（挿図第1・第2・第5、図版第3の1）

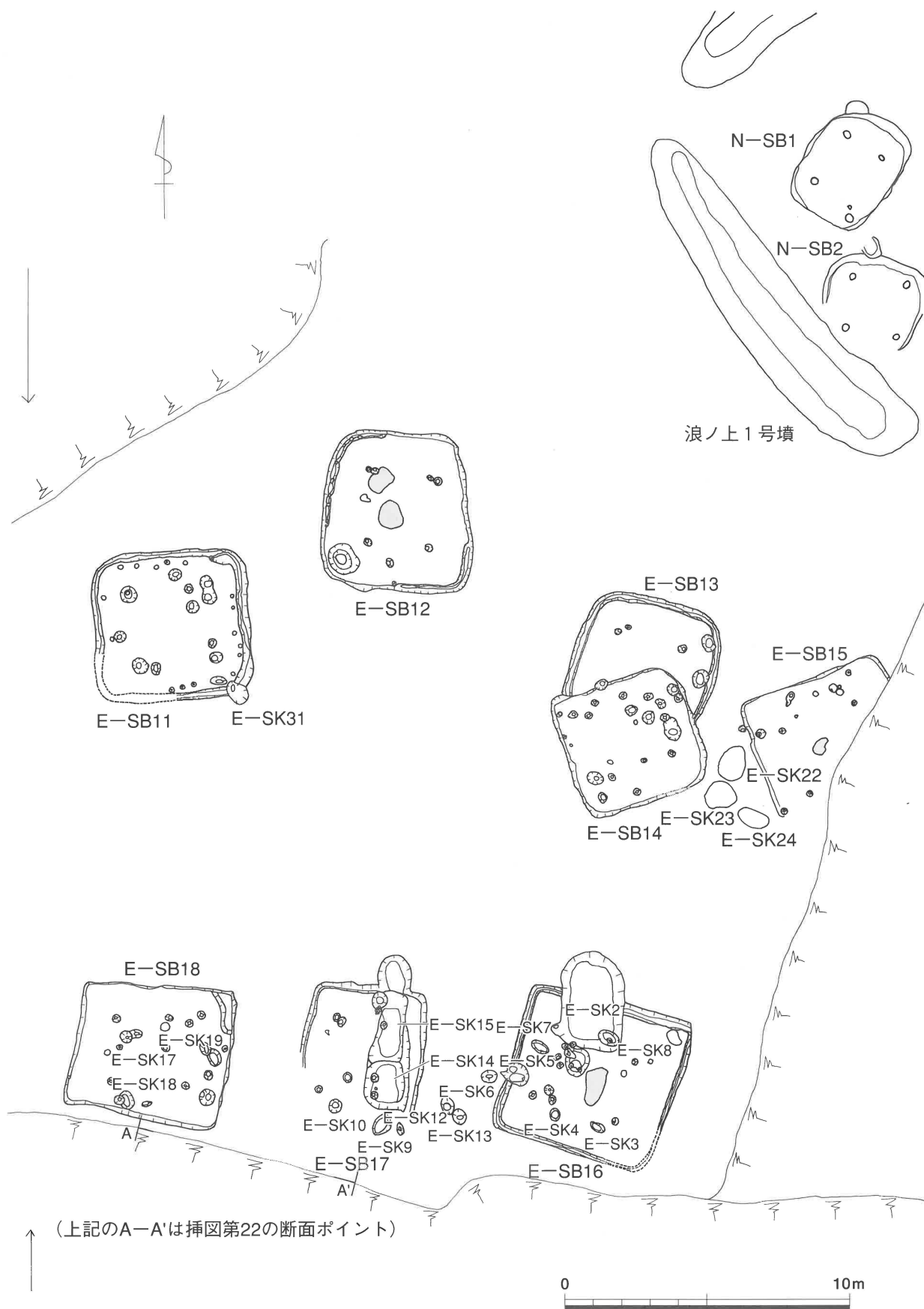
竪穴住居址E-SB1は、E区の東地区中央東寄りに位置する。削平面から床面までの深さは約12



挿図第1 E区全体における遺構の分布



挿図第2 E区東地区における遺構の分布

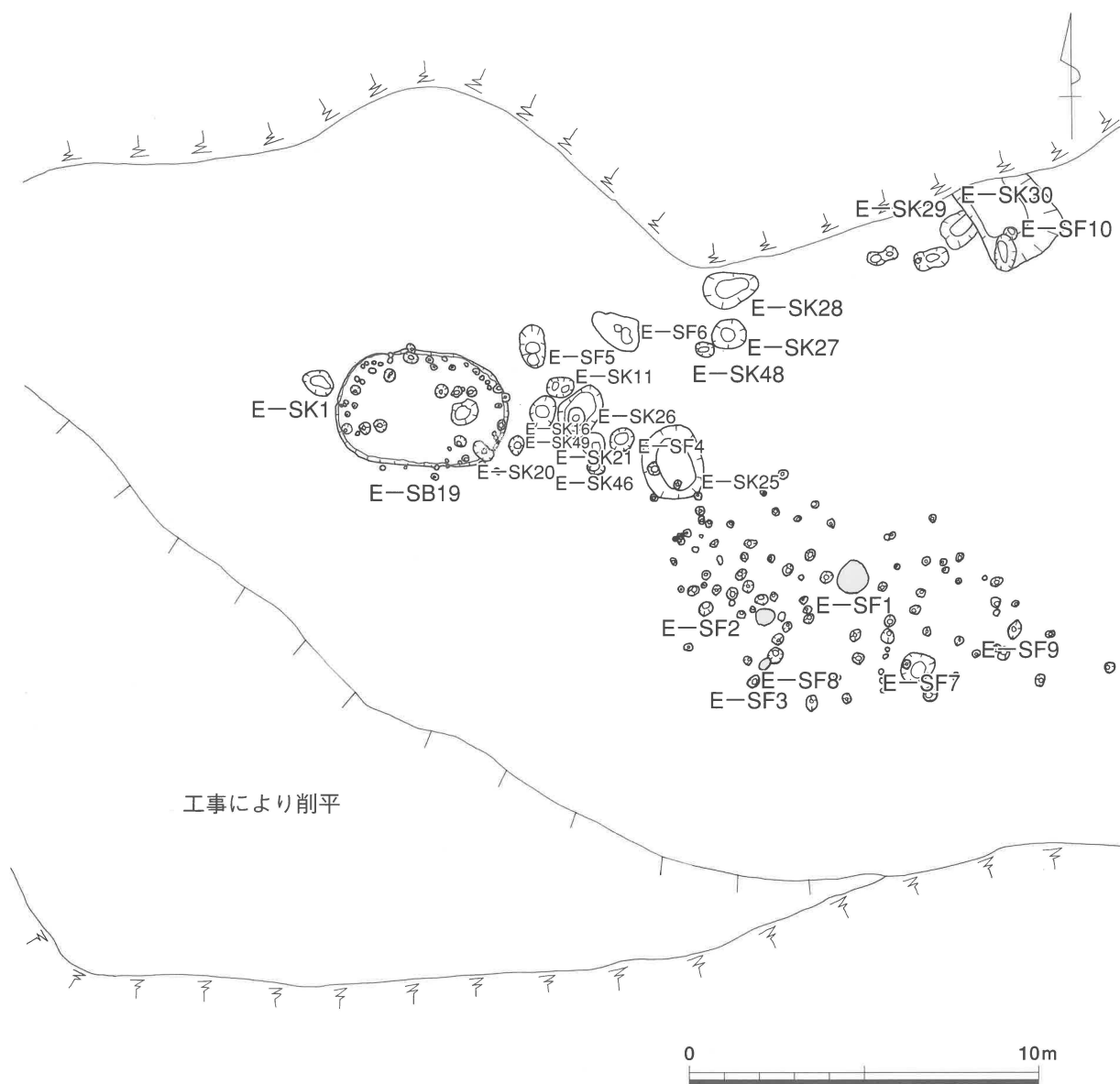


挿図第3 E区中央地区における遺構の分布

cm～16cmである。壁溝は認められない。床面の長さは東西が北西壁で3.00m、南北が南西壁で2.72m、面積は約8㎡である。北西隅と南西隅はやや隅円、北東隅と南東隅はやや角ばっている。そのことから、平面形は隅円長方形に近い。P1とP2、P3とP4の柱穴の間の中心を結んだ直線を主軸線とすると、主軸線の方位は、N-27°-Wである。

柱穴は竪穴住居址の各コーナー近くに、P1(23×20×21)、P2(23×21×20)、P3(23×21×21)、P4(22×22×36)の4個、南東壁沿いにP5(20×18×50)の1個が認められた。柱穴間の長さはP1～P2が2.20m、P2～P3が1.86m、P3～P4が2.30m、P4～P1が1.94mである。

貯蔵穴は南東壁沿いにあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形を呈している。その規模は長径48cm、短径40cm、深さ22cmである。炉址は柱穴P1とP2の間に1カ所認められた。長軸72cm、短軸44



挿図第4 E区西地区における遺構の分布

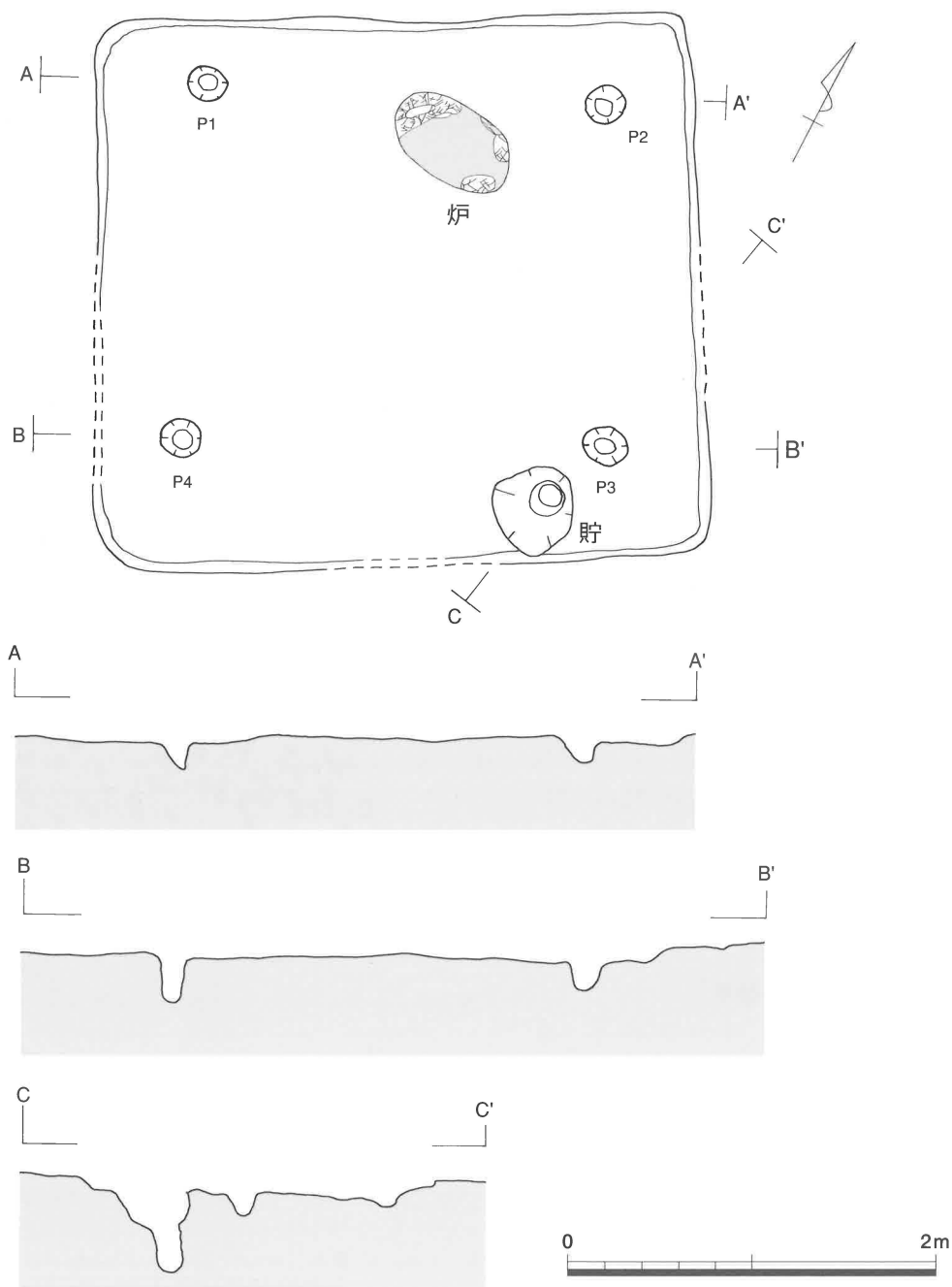
cmの楕円形をした範囲に焼土や灰が認められた。炭化物が床面に堆積しており、厚さは6 cmを測る。

(2) 遺物（挿図第36の1～4）

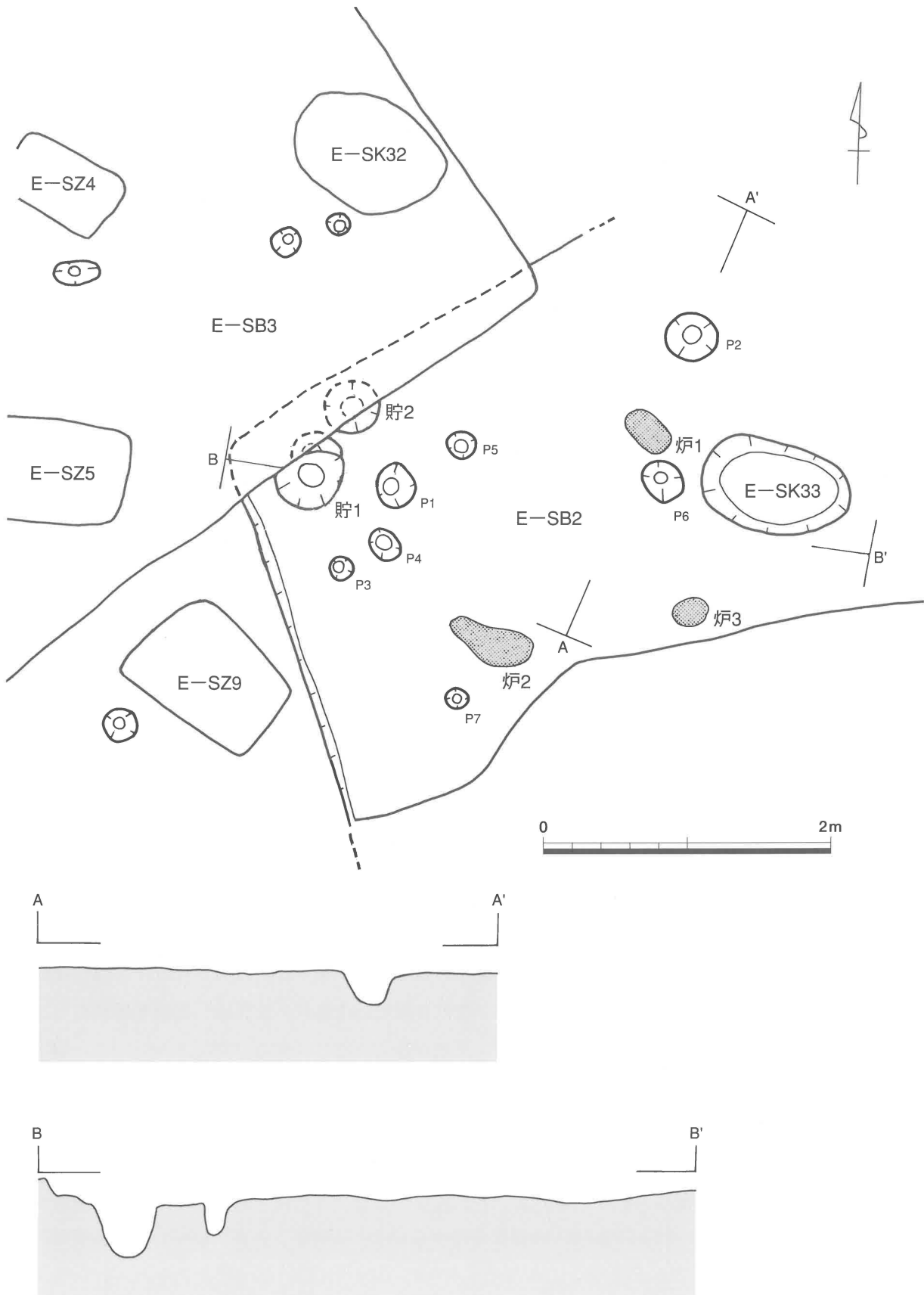
1～4はE－S B 1の床面から検出された遺物である。

1は甕の口辺部である。2は壺の口縁部で、口端部を欠くが、いずれも口縁部は直線的に開く。内外面にハケメ調整痕を残す。3は高坏の坏部と考えられるもので、内彎しながら開く。口端部は丸く仕上げられている。4は高坏の坏部と筒状脚部の接合部分である。

E－S B 1の床面から検出した遺物は、青山式土器（註1）と考えられる。



挿図第5 竪穴住居址E－S B 1 実測図



挿図第6 竪穴住居址E-SB2・E-SB3、土壙E-SK32・E-SK33、
近世土壙墓E-SZ4・E-SZ5・E-SZ9実測図

2、竪穴住居址E—S B 2

(1) 遺構(挿図第1・第2・第6)

竪穴住居址E—S B 2は、E区の東地区北東部に位置する。北壁はE—S B 3に掘り込まれ、西壁の南側部分は近世土壌墓E—S Z 14に掘り込まれる。竪穴住居址内は土壌E—S K 33と近世土壌墓E—S Z 12によって攪乱されている。精査したが、北壁の一部、西壁の一部が確認できたのみで、東壁や南壁は検出できなかった。削平面から床面までの深さは約20cmである。壁溝は認められない。

確認できた壁との関係から、主柱穴はP 1 (28×26×25)とP 2 (34×32×28)と考えられるが、床面の南側ではそれに対応する主柱穴は削平され滅失したものと思われる。柱穴P 5 (21×21×30)はP 1とP 2を結んだ線上にあり、深さもあることから補強用の支え柱と考えたい。P 3 (14×13×24)、P 4 (21×16×14)、P 7 (20×14×-)はE—S B 2の間仕切りに関連した柱穴と考えられる。貯蔵穴は北西角に2カ所ある。貯蔵穴1は、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形をしている。その規模は長径44cm、短径40cm、深さ44cmである。貯蔵穴2は、平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形をしている。その規模は長径40cm、短径39cm、深さ34cmである。炉址は3カ所検出された。炉址1は床面の中心から北東寄りにあり、長軸36cm、短軸18cmである。炉址2は床面の中心から南西寄りにあり、長軸62cm、短軸26cmである。炉址3は床面の中心から南東寄りにあり、長軸26cm、短軸18cmである。

(2) 遺物(挿図第36の5・6)

5・6はE—S B 2の床面から検出されたものである。

5は台付甕の脚台部の破片である。脚台端部は平らで外角に丸みをもち、内角にはバリが残る。外面はナデ調整により仕上げられ、内面にはハケメ調整痕が認められる。6は高坏の脚部破片で、円形の透かし孔が認められ、外面に縦位の薄いヘラミガキ痕が残る。

E—S B 2の床面から検出された遺物は欠山式土器(註2)と考えられる。

3、竪穴住居址E—S B 3

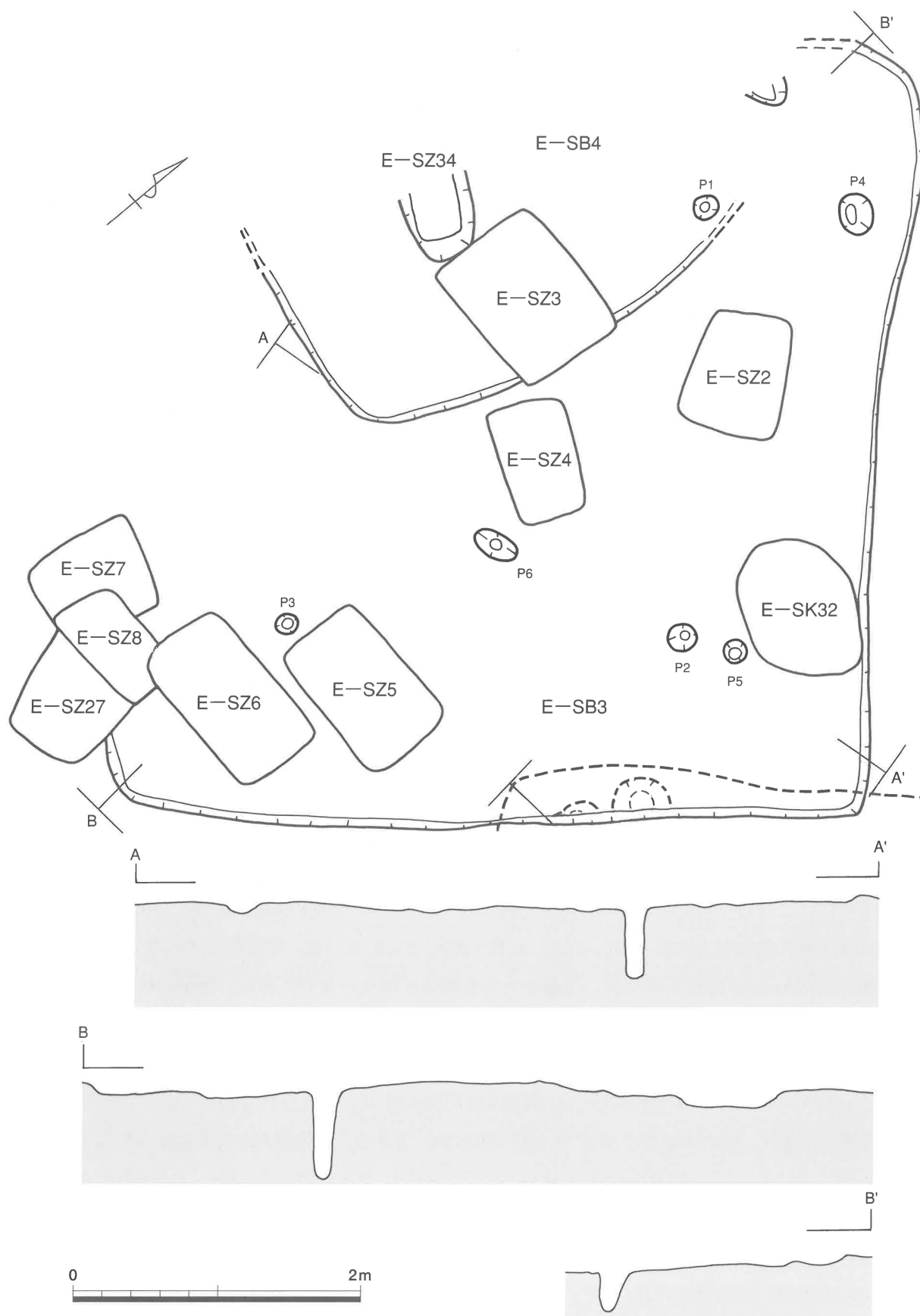
(1) 遺構(挿図第1・第2・第7)

竪穴住居址E—S B 3はE区の東地区北側に位置する。北東壁及び南西壁の一部が残存している。しかしながら、北西壁は仮設道路の新設により削平されている。竪穴住居址E—S B 4との切り合いについては明確に確認することができなかった。竪穴住居址は土壌E—S K 32、近世土壌墓E—S Z 2～E—S Z 8・E—S Z 27・E—S Z 34によって壁が掘られたり、床面が攪乱されている。削平面から床面までの深さは6cm～10cmである。壁溝は認められない。床面の長さは東西が南東壁で5.20m、南北は北西壁で5.30mである。面積は北西壁と南西壁が工事により削平されてはいたが約27㎡であろう。平面形はほぼ方形か長方形であろう。直線状の南東壁から南北の主軸方位はN—46°—Wである。

竪穴住居址の北西側が削平されているため、その部分の主柱穴は検出されなかった。他の主柱穴はP 1 (19×17×37)、P 2 (18×18×55)、P 3 (18×16×60)と考えられる。P 5 (16×16×15)は支柱の柱穴と考えられる。

貯蔵穴や炉址は検出されなかった。

(2) 遺物(挿図第36の7～13)



挿図第7 竪穴住居址E-SB3・E-SB4、土壇E-SK32、
近世土壇墓E-SZ2～E-SZ8・E-SZ27・E-SZ34実測図

7～13はE—S B 3の床面から検出された遺物である。

7は甕の口縁部の破片である。くの字状に開き、角張った口端の外側には棒状器具による左下がりのキザミを巡らしている。8は甕の口縁部から上胴部にかけての破片で、口縁部はくの字状にかかるく内彎し、丸みをもつ口端部に至る。頸部外面に斜位、上胴部には横位のハケメ調整痕が認められる。また内面には頸部・上胴部ともに横位のハケメ痕が見られる。9・10は台付甕の脚台部である。10の脚台端部は角張っている。11は壺の上胴部破片で、上方からクシ描横線文、ヘラ描鋸歯文、横線文の順に文様を施し、その下にヘラ描刺突文列を巡らしている。12・13は高坏の破片である。12は丸みのある丈の高い坏部で、口端面を内側に面取している。13は坏部と脚部の接合部破片で、外面に縦位のヘラミガキ痕が認められる。

E—S B 3の床面から検出された遺物は、瓜郷上層第3様式土器（註3）である。

4、竪穴住居址E—S B 4

（1） 遺構（挿図第1・第2・第7）

竪穴住居址E—S B 4はE区の東地区北側に位置する。竪穴住居址の3/4ほどが仮設道路の新設により削平されている。南東壁は西側角から1mの所で近世土壌墓E—S Z 3によって掘り込まれている。床面は近世土壌墓E—S Z 34に攪乱されている。削平面から床面までの深さは約12cmである。

柱穴、貯蔵穴、炉址は検出されなかった。

（2） 遺物

土師器の小片が検出されたが、図示できる遺物は認められない。

5、竪穴住居址E—S B 5

（1） 遺構（挿図第1・第2・第8、図版第1の2・第2の1）

竪穴住居址E—S B 5はE区の東地区南東に位置する。竪穴住居址E—S B 5とE—S B 9は切り合っており、どちらの竪穴住居址の柱穴か明確でないため、柱穴番号は通し番号とした。

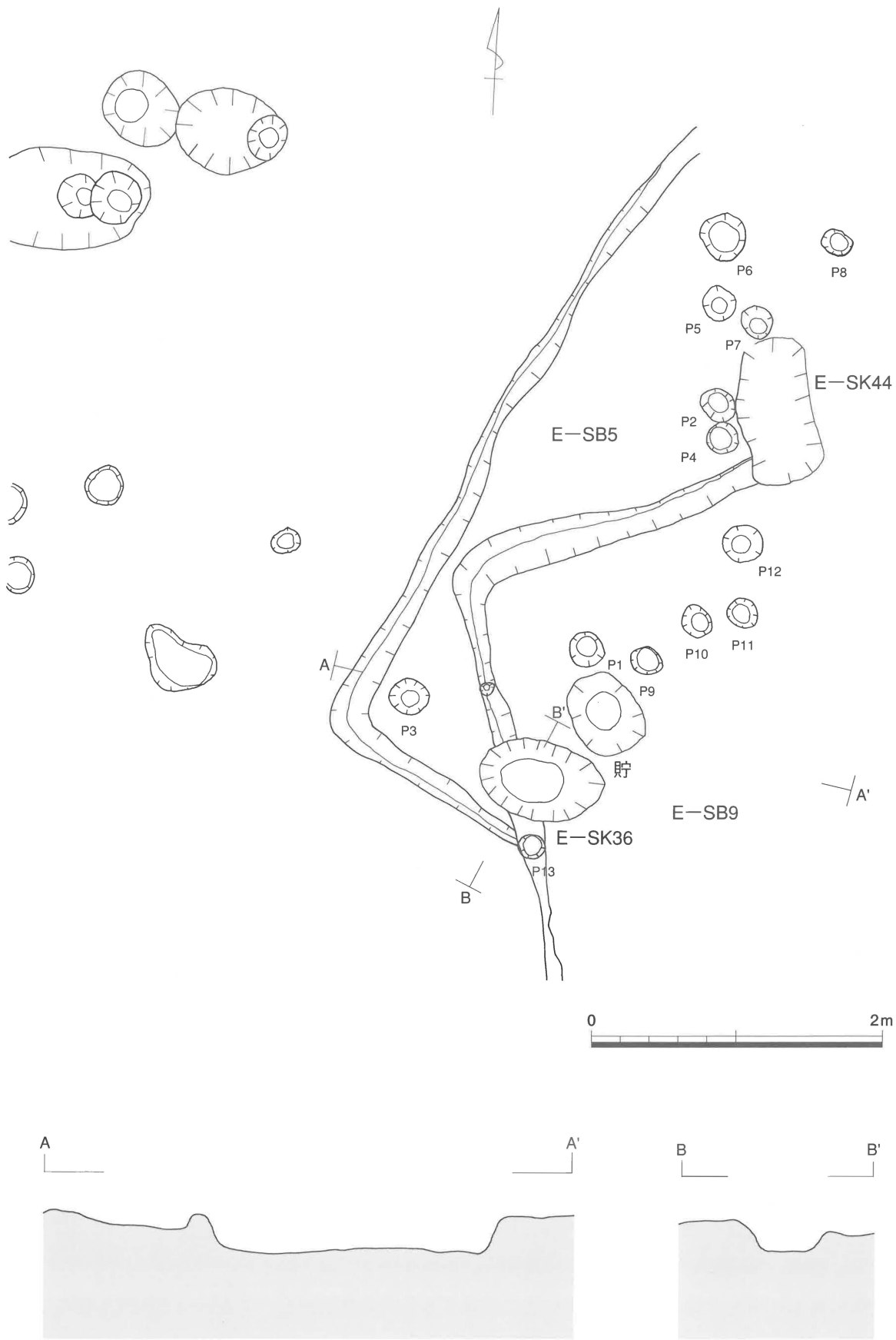
南東側を竪穴住居址E—S B 9によって大きく掘り込まれている。北西壁のすべて、南東壁の2.0m、南西壁の1.5mが残存している。残存している壁はほぼまっすぐである。削平面から床面までの深さは14cmである。床面の東西の長さは、欠損のない北西壁の床面で4.5mを測るが南北の長さは不明である。平面形は方形または長方形であろう。

床面から検出された柱穴は13個である。本竪穴住居址の柱穴と考えられるのは、柱穴の位置や大きさ・深さからP 1（22×19×37）とP 2（22×20×40）であろう。南東側の柱穴は工事による削平のため欠損している。P 3（20×20×9）、P 4（20×20×10）、P 5（20×20×46）、P 6（28×26×16）、P 7（20×20×19）は間仕切り用として使用された可能性がある。

貯蔵穴や炉址は検出されなかった。

（2） 遺物（挿図第36の14）

14はE—S B 5の柱穴P 6から検出された高坏の坏部である。坏部の下方に稜をもつ。口縁部は直線的に開き、口端は丸みをもたせて仕上げている。内外面ともにナデ調整痕が認められる。



挿図第8 竪穴住居址E-SB5・E-SB9、土坑E-SK36・E-SK44実測図

E—S B 5の主柱穴であるピットP 6から検出した遺物は、青山式土器と考えられる。

6、竪穴住居址E—S B 6

(1) 遺構（挿図第1・第2・第9、図版第1の2・第2の1・第3の2）

竪穴住居址E—S B 6はE区の東地区中央に位置する。方形周溝墓E—S Z 1の北側周溝を掘り込み、南西壁の約1/3と北西壁の2/3は、竪穴住居址E—S B 7に掘り込まれている。削平面から床面までの深さは8 cm～12cmである。壁溝は認められない。床面の長さは東西が5.00m、南北が4.90mで、面積は約24㎡である。平面形はほぼ方形である。

主柱穴は位置や大きさ・深さからP 1（16×14×35）、P 2（27×18×16）、P 3（27×26×18）、P 4（22×19×25）の4個である。柱穴間の長さは、P 1～P 2が2.64m、P 2～P 3が2.84m、P 3～P 4が2.68m、P 4～P 1が2.84mである。北東壁のP 15（16×15×9）とP 24（21×19×9）は柱穴間の長さが140cmである。北東向きの入口ではないかと思われる。床面には径が20cm以下のピットが15個認められる。そのうち壁から約30cmの所に認められるP 6・P 14・P 18・P 22・P 23・P 25・P 28の7個は物を置く板でも設けた可能性が同われる。床面上のピットも意図的なものととらえたい。

貯蔵穴はやや小型だが2カ所に認められる。貯蔵穴1は北西壁沿いにあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形をしている。その規模は長径36cm、短径30cm、深さ18cmである。貯蔵穴2は南西隅にあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形をしている。その規模は長径38cm、短径27cm、深さ30cmである。炉址は主柱穴であるP 3とP 4の間にあり、長軸44cm、短軸24cmである。

(2) 遺物（挿図第36の15・16、第37の17～19）

15～19はE—S B 6の床面から検出された遺物である。

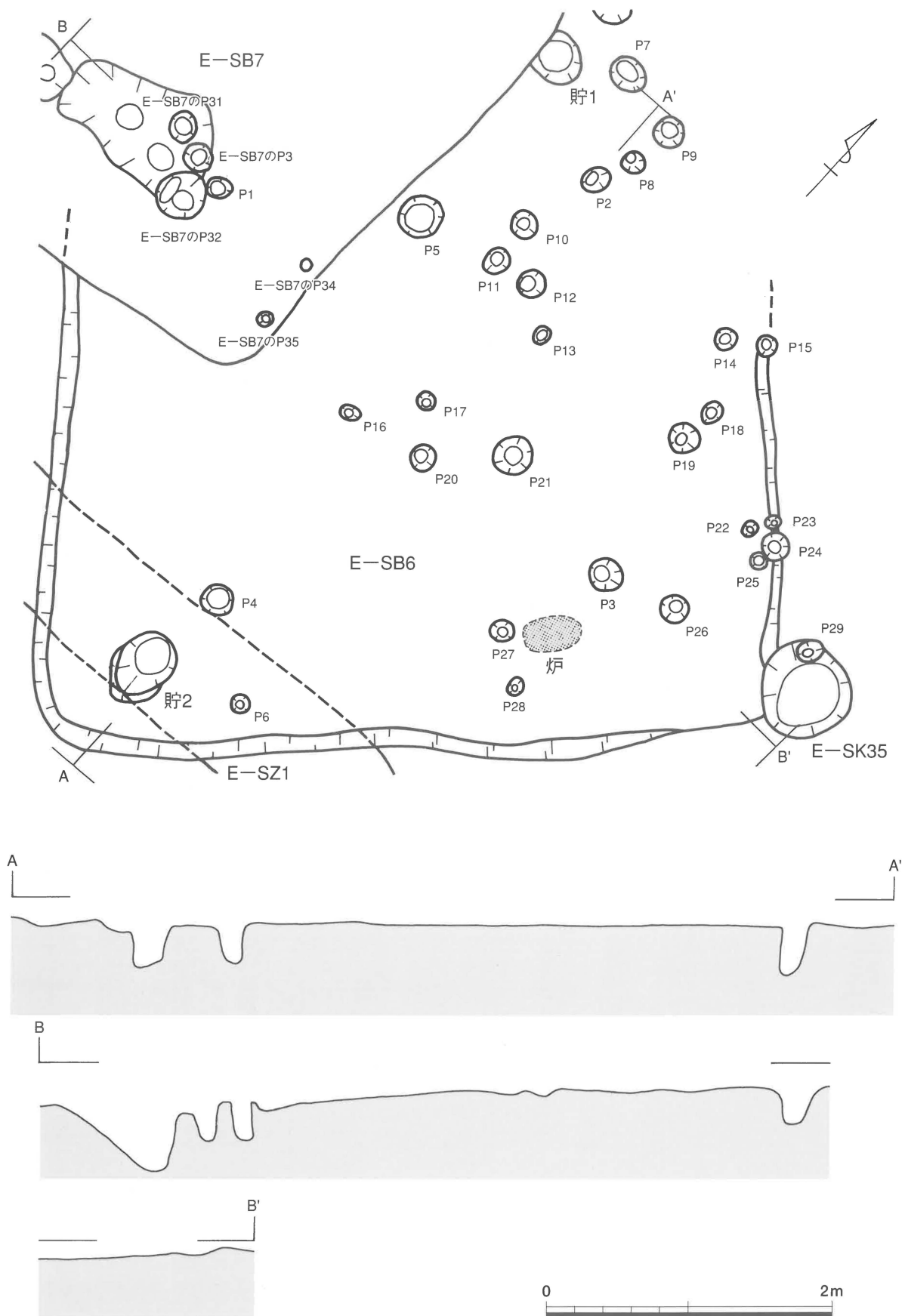
15・16は甕の口縁部から上胴部の破片である。2点ともに表裏面が磨滅している。口縁部はくの字状に開き短い。口端はやや角張る。15の上胴部外面にハケメ調整痕が残る。17は壺の口縁部破片で、口端は角張る。口縁部の内外面にはヨコナデ調整痕が認められる。18・19は高坏の脚部と坏部である。18は脚上部が太く、脚高の低い脚部である。脚はハの字状に開き、脚端部は丸みをもって反りかえっている。脚の約2/3下方には、円形の透かし孔が3カ所認められる。これはC—S B 8の床面から検出された高坏のミニチュア製品のC—45と相似形である。19は坏部である。坏部は深く、坏底部に甘い稜をもち、ここからハの字に直線的に開き口端に至る。口端は丸く仕上げられている。内外面には斜位のハケメ調整後、ヘラナデが施されている。

検出された遺物は王江式土器（註4）と考えられる。

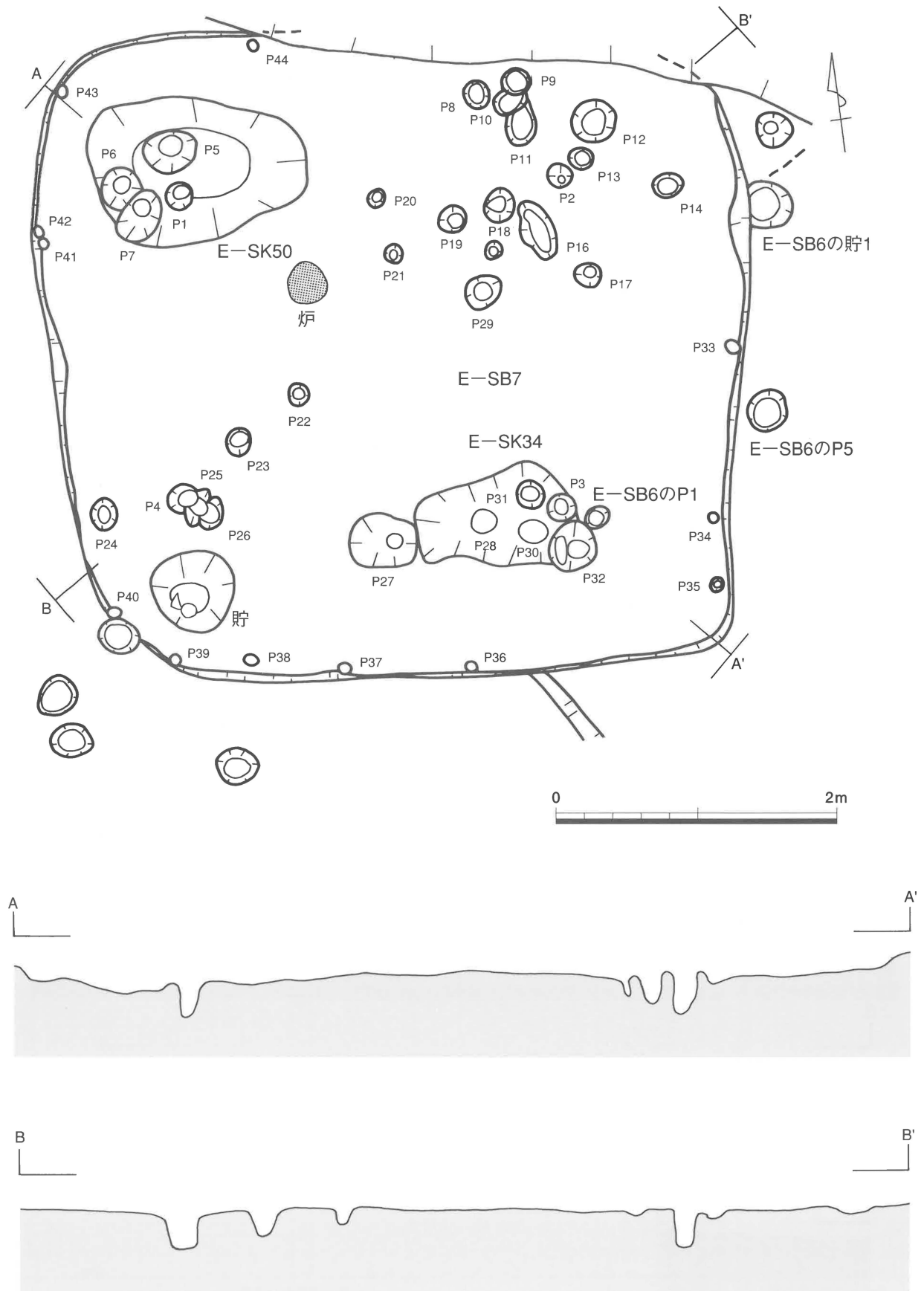
7、竪穴住居址E—S B 7

(1) 遺構（挿図第1・第2・第9・第10、図版第1の2・第2の1）

竪穴住居址E—S B 7はE区の東地区中央に位置する。竪穴住居址E—S B 6の北西壁を掘り込んで構築されている。削平面から床面までの深さは10cm～18cmである。壁溝は認められない。床面の長さは中央部下端で東西が4.80m、南北が西壁寄り1 mの所で4.54mである。面積は約21㎡である。北



挿図第9 竪穴住居址E-SB6・E-SB7、土壇E-SK35実測図



挿図第10 竪穴住居址E-SB7実測図

西隅と南西隅は隅円であるが、南東隅は円みが少ない。北東隅は欠損しているが、東壁と北壁から隅円であることが予想される。壁の胴張りは少ないことから、平面形はほぼ隅円方形であろう。

この竪穴住居址に関連する柱穴ならびにピットは床面から44個検出されている。そのうち支柱穴はP 1 (18×18×28)、P 2 (17×15×19)、P 3 (20×19×24)、P 4 (20×20×20) の4個であろう。穴の径が10cm内外で、深さが4 cm～10cmのピットP 33～P 44が壁に沿って12個検出されている。そのうち南壁のP 36 (8×6×4) とP 37 (10×10×6) があり、ピット間の長さが90cmを測る。入口に関係したピットと考えられる。床面の柱穴は補強用または間仕切り用として利用されたものであろう。

貯蔵穴は1カ所に認められる。貯蔵は南西隅にあり、平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径60cm、短径56cm、深さ35cmである。炉址は床面の中央よりやや北西に認められる。炉址の範囲は楕円形で長軸28cm、短軸26cmである。

(2) 遺物 (挿図第37の20・21)

20・21はE—S B 7の床面から検出されている。

20は壺の底部の破片である。外面は磨滅が著しい。内面の底にはハケメ痕が認められる。21は碗の口縁部片と考えられる。胴部の器壁は薄く、口辺部は直線的に立ち上がる厚い口縁部をもつ。口端の外面は角張り、内面は丸みをもたせている。

E—S B 7はE—S B 6を掘り込んでいる事から、本竪穴住居址は王江式土器の時期かこれより新しい時期と言える。

8、竪穴住居址E—S B 8

(1) 遺構 (挿図第1・第2・第11、図版第1の2・第2の1・第3の2)

竪穴住居址E—S B 8はE区の東地区南に位置する。東壁は方形周溝墓E—S Z 1の西側周溝と接しており、E—S B 8の南壁と方形周溝墓E—S Z 1の西側周溝は土壇E—S K 37に掘り込まれている。この土壇から須恵器の無蓋高坏が検出されている。南西隅は竪穴住居址の壁面に接するように土壇E—S K 38が構築されている。削平面から床面までの深さは5 cm～10cmである。壁溝は認められない。床面の長さは東西が北壁寄りで3.20m、南北が西壁寄りで3.20mである。面積は約10㎡である。北西隅は隅円であるが、北東隅はやや角張りが見られる。土壇E—S K 38により掘り込まれている南西隅と土壇E—S K 37により攪乱を受けている南東隅は不明である。

床面から5個の柱穴が検出されている。P 1 (16×14×12) とP 2 (11×10×14) の2個を活かした2本柱の竪穴住居址であろうか。P 4 (14×13×36) は他の柱穴に比べて深い。

貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

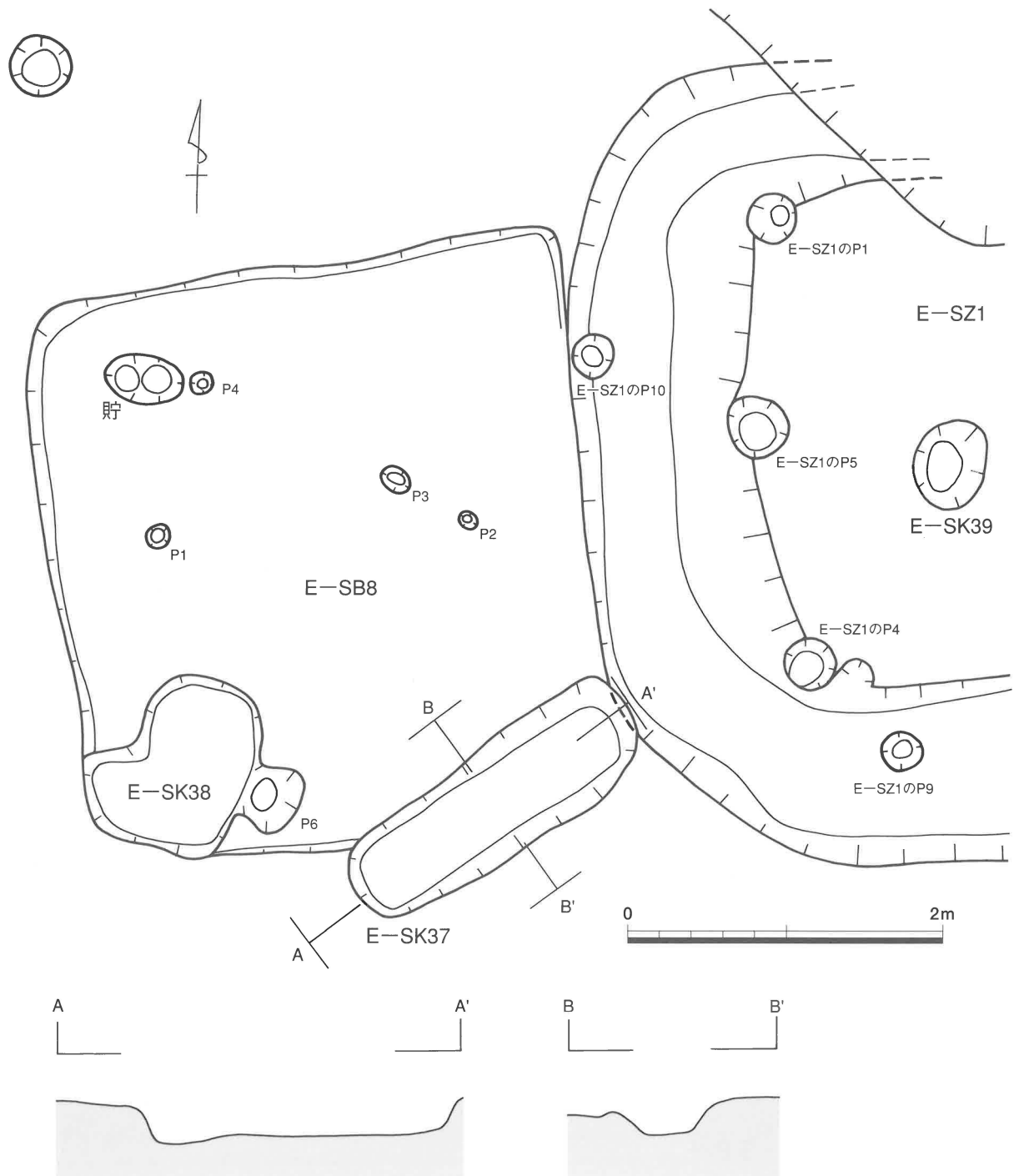
(2) 遺物

土師器の小片が検出されたが、図示できる遺物は認められない。

9、竪穴住居址E—S B 9

(1) 遺構 (挿図第1・第2・第8、図版第1の2・第2の1)

竪穴住居址E—S B 5とE—S B 9は切り合っており、どちらの竪穴住居址の柱穴が明確でない



挿図第11 竪穴住居址E-SB8、土壇E-SK37・E-SK38、方形周溝墓E-SZ1実測図

め、柱穴番号は通し番号とした。

竪穴住居址E—S B 9はE区の東地区南東に位置する。竪穴住居址E—S B 5の南西壁約3/4と北東壁約3/4を掘り込んで構築されている。南東側は当初土置き場になっていたが、そこに仮設道路が新設され未調査のまま削平された。そのため北西壁と南西壁、床面の1/4ほどが残ったのみである。削平面から床面までの深さは28cmである。壁溝は北壁と西壁に認められる。壁溝の幅10cm～18cm、深さは3cm～8cmである。床面の長さは現存している北壁で3.20m、西壁で2.70mである。平面形は北西隅から推しはかると方形または長方形である。

床面から検出された柱穴は6個であるが、主柱穴はP 9（21×18×18）で他の主柱穴は欠損している。

貯蔵穴は1カ所で西壁沿いに認められた。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形をしている。その規模は長径56cm、短径48cm、深さ26cmである。炉址は検出されなかった。

（2） 遺物（挿図37の22）

22はE—S B 9の床面から検出された甕の口縁部から上胴部の破片である。口縁部はくの字状を呈し、外反している。外面は磨滅しており、内面にはナデ調整痕が認められる。

E—S B 9はE—S B 5を掘り込んでいる。よって本竪穴住居址は青山式土器の時期かこれより新しい時期と考えられる。

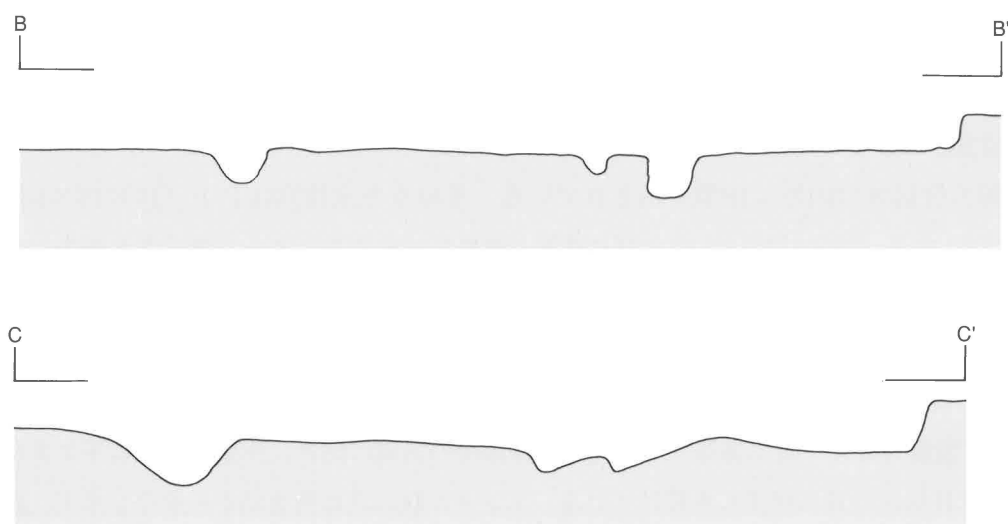
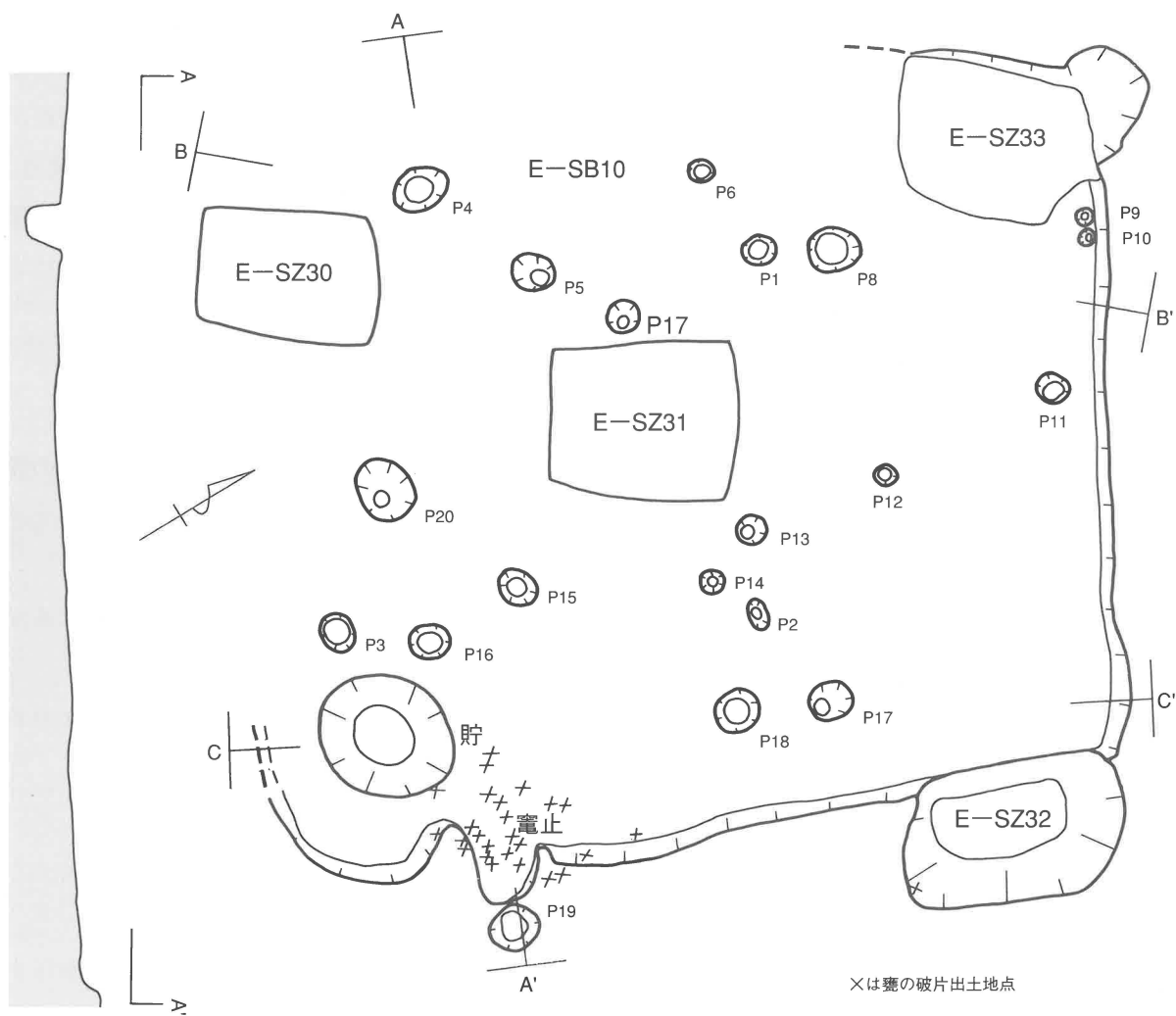
10、竪穴住居址E—S B 10

（1） 遺構（挿図第1・第2・第12、図版第1の1・第2の2・第3の2）

竪穴住居址E—S B 10はE区の東地区南西に位置する。南西壁のすべてと北西壁の3/4は工事により削平されている。さらに、南西壁は近世土壌墓E—S Z 30に掘り込まれ、北西壁と北コーナーは近世土壌墓E—S Z 33に削られている。南東壁は近世土壌墓E—S Z 32に削られ、床面中央は近世土壌墓E—S Z 31により攪乱を受けている。削平面から床面までの深さは20cm～30cmである。現存する壁沿いでは壁溝は認められない。床面の長さは東西が北東壁で3.70m、南北が南東壁で4.40mである。南東壁の壁面を削り込んで竈が設けられている。竪穴住居址の南東壁は緩やかな膨らみを描き、南隅は少し円みをもっている。東隅と北隅は円みが少なく、西隅は削平されているため不明である。平面形はほぼ長方形であろう。

柱穴は竪穴住居址の内外に18個検出されている。そのうち主柱穴はP 1（17×16×16）、P 2（16×14×7）、P 3（22×17×18）の3個と近世土壌墓E—S Z 30によって攪乱され滅失した1個と考えられる。

貯蔵穴は1カ所で竈から1m離れた南隅沿いに認められた。平面形は円形で、断面形は鍋底形をしている。その規模は長径68cm、短径63cm、深さ25cmである。竈址は南東壁に設けられており、北東角より3.20m、南西角より1mにある。竈の焚き口は部屋の内側に開き、床面から壁にトンネル状の穴を開け、竪穴住居址の外に煙出しを設けている。トンネル状の穴は焚き口から煙出しまで、緩やかに上がっている。焚き口と煙出しを結んだ線はN—65°—Wで西北西に開口している。竈址は壁面を外側に挟り込んでいる。



挿図第12 竪穴住居址E-SB10、近世土壙墓E-SZ30～E-SZ33実測図

内壁は緩やかな膨張を見せているが、竈址の認められる80cmの範囲のみ乱れている。竈の周辺に甕や土製支脚の破片が散乱していた。煙出しは長径25cm、短径21cm、深さ10cmである

(2) 遺物 (挿図第37の23～26)

23～26はE-B B10の床面から検出された遺物である。

23は甕の口縁部と考えられる。直線的に立ち上がり、口端は丸くおさめている。外面にはハケメ調整痕を残し、内面には指痕を残す。残存する上胴部に左右一对の把手が付くものと考えられる。

24は須恵器の坏蓋の破片である。肩に三角形の隆帯が認められ、口端は角張る。25は須恵器の坏身である。やや扁平な身をもち、丈の高い受け部をもつ。身の約1/2まで回転ヘラ削り痕が認められる。口端は内面に向かい面取りされている。26は竈の前面から出土した土製支脚である。検出時は数個に割れた焼土塊であった。接合の結果、円頭の柱状を呈し、図示していないが断面形は円形であることが判明した。

E-B10の床面から検出された須恵器は、古墳時代後期の古墳出土須恵器第3型式(註5)にあたり、およそ6世紀代に営まれたものであろう。

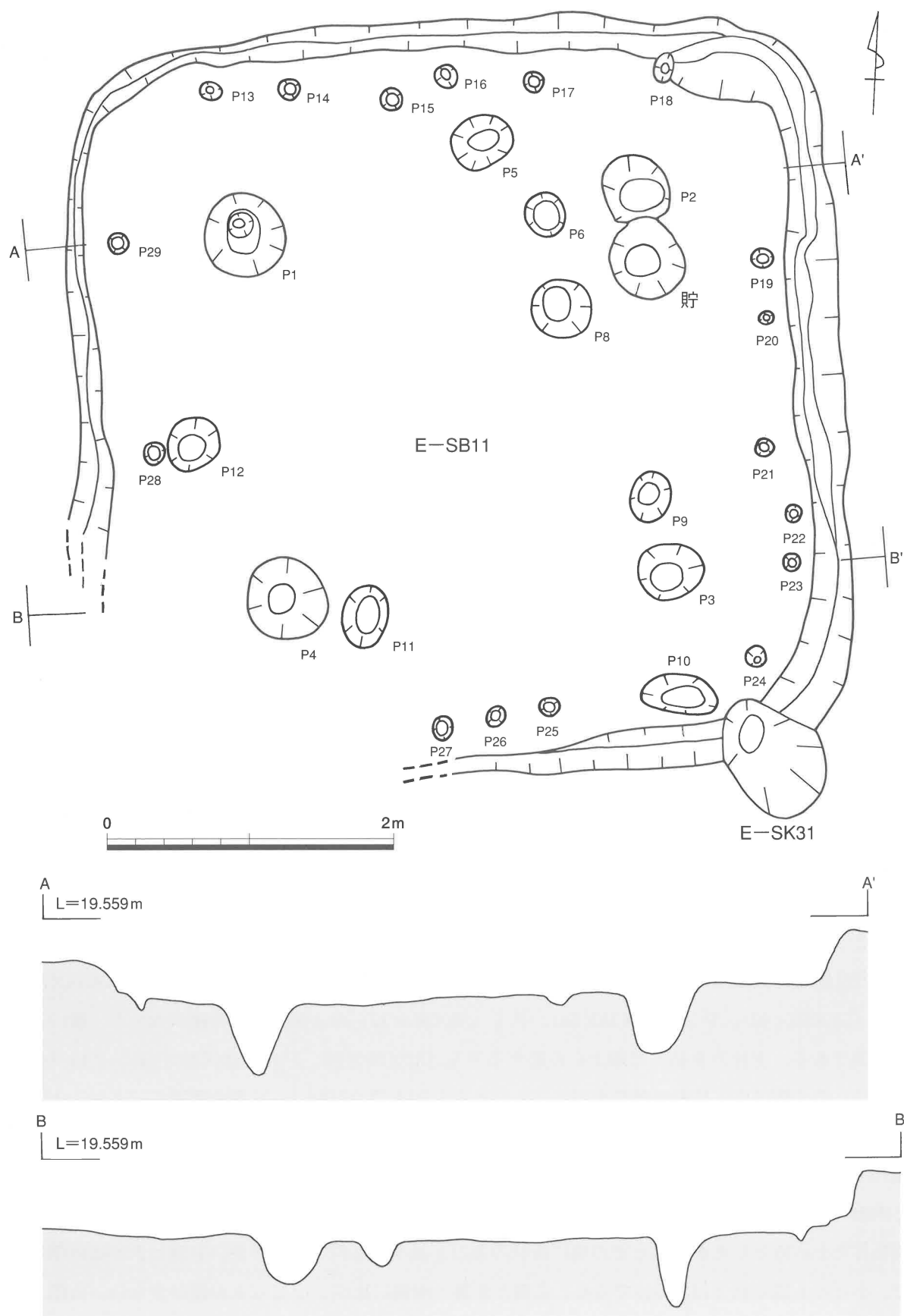
11、竪穴住居址E-S B11

(1) 遺構 (挿図第1・第3・第13)

竪穴住居址E-S B11はE区の中央地区北西に位置する。南西のコーナーは工事により南壁の西側1/2と西壁の南側1/3が工事により削平されている。南東隅は土壌E-S K31を設ける際に攪乱されている。削平面から床面までの深さは36cm～50cmと深く、工事による削平を除けば遺構の遺存状態はよい。壁溝は削平されている南西隅を除き他の壁では認められる。壁溝の幅は北壁・西壁・南壁では10cm～20cmであるのに対し、東壁では20cm～40cmと広がっている。床面の長さは、床面上端が乱れているため壁溝の下端で測定すると、東西が北壁寄りで4.90m、南北が東壁寄りで4.70m、支柱穴の対角線を結んだ交点を通る東西の幅を壁の下端で計測すると東西の長さは5.06m、南北の長さは5.04mである。面積は約23㎡である。平面形は削平されている南西隅を除き、北東隅・北西隅・南東隅の3つのコーナーは円みをもっていることから、ほぼ隅円方形に近い。

竪穴住居址の床面からは柱穴や小ピットが29個検出された。そのうち支柱穴はP1(60×55×50)、P2(51×50×46)、P3(48×38×54)、P4(58×55×37)の4個で柱穴の径が大きく、深いことが特徴である。支柱穴を結んだ線上に位置するP6(32×30×9)、P9(40×29×13)、P11(43×30×15)の3個は支え柱の可能性が高い。P13からP29までの17個は、床面の端近くにあり、大きさも深さもよく似ている小ピットである。この小ピットは他の竪穴住居址と異なり、壁から10cm～20cm離れている。また壁と小ピットの間に壁溝が認められる。壁溝は北東隅から東壁の3.30mにかけて壁と床面の下端の間が10cm～20cmと広がっており、壁面の崩れが認められる。板状のものでも立てかけ杭を打ち土止めとしたか、杭と壁の間に板状のものを並べたものであろうか。P28とP29は西側にあり、小ピット間の長さは1.50mである。北側と東側・南側に比べ、小ピットの数が少ない。西側入口用のピットとも考えられる。

貯蔵穴は1カ所で、支柱穴P2の南側に認められた。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形をしてい



挿図第13 竪穴住居址E-SB11、土壌E-SK31実測図

表第1 竪穴住居址E—SB11 小ピット法量一覧表

(単位 cm)

柱穴番号	長径	短径	床面からの深さ	備考	柱穴番号	長径	短径	床面からの深さ	備考
P13	15	12	7		P22	12	12	11	
P14	15	15	7		P23	12	12	10	
P15	16	16	11		P24	15	13	7	
P16	18	12	7		P25	14	14	8	
P17	14	14	7		P26	14	12	8	
P18	20	12	8		P27	17	14	6	
P19	15	13	10		P28	17	15	6	入口用穴
P20	10	10	9		P29	14	14	9	入口用穴
P21	12	12	6						

る。その規模は長径65cm、短径50cm、深さ29cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物(挿図第37の27～36)

27～34はE—B11の床面、35・36は埋土中から見出された。

27～32は壺の各部位である。27は口縁部で、ハの字状に開く単口縁である。口端に面をつくっている。内面にはクシ状器具による羽状文が施されている。28も口縁部で、ハの字状に開いた口縁部に棒状浮文2条を縦方向に貼り付けている。口端は丸く仕上げられている。29は垂直に近く立ち上がる口縁部をもつ小形の壺で、口端は丸みをもち、外面に細かなハケメ調整痕を残す。30は赤彩を施した口縁部である。外面にクシ状器具で押捺した斜線列を巡らし、口端は丸みをもつ。31・32は底部の破片である。ともに外面にハケメ調整痕を残し、内面にイタナデ調整痕を残す。33は碗の底部と考えられる破片で、底部の上方に稜をつくる。

34・35は高坏の坏部と脚部である。34は坏部に丸みを帯びた稜をもち、口縁部は大きく開く。口端部を尖り気味に薄く仕上げている。35は坏部との接合部から透かし孔までの脚部破片である。外面に縦位のヘラミガキ調整痕が残り、3カ所に円形の透かし孔を配している。

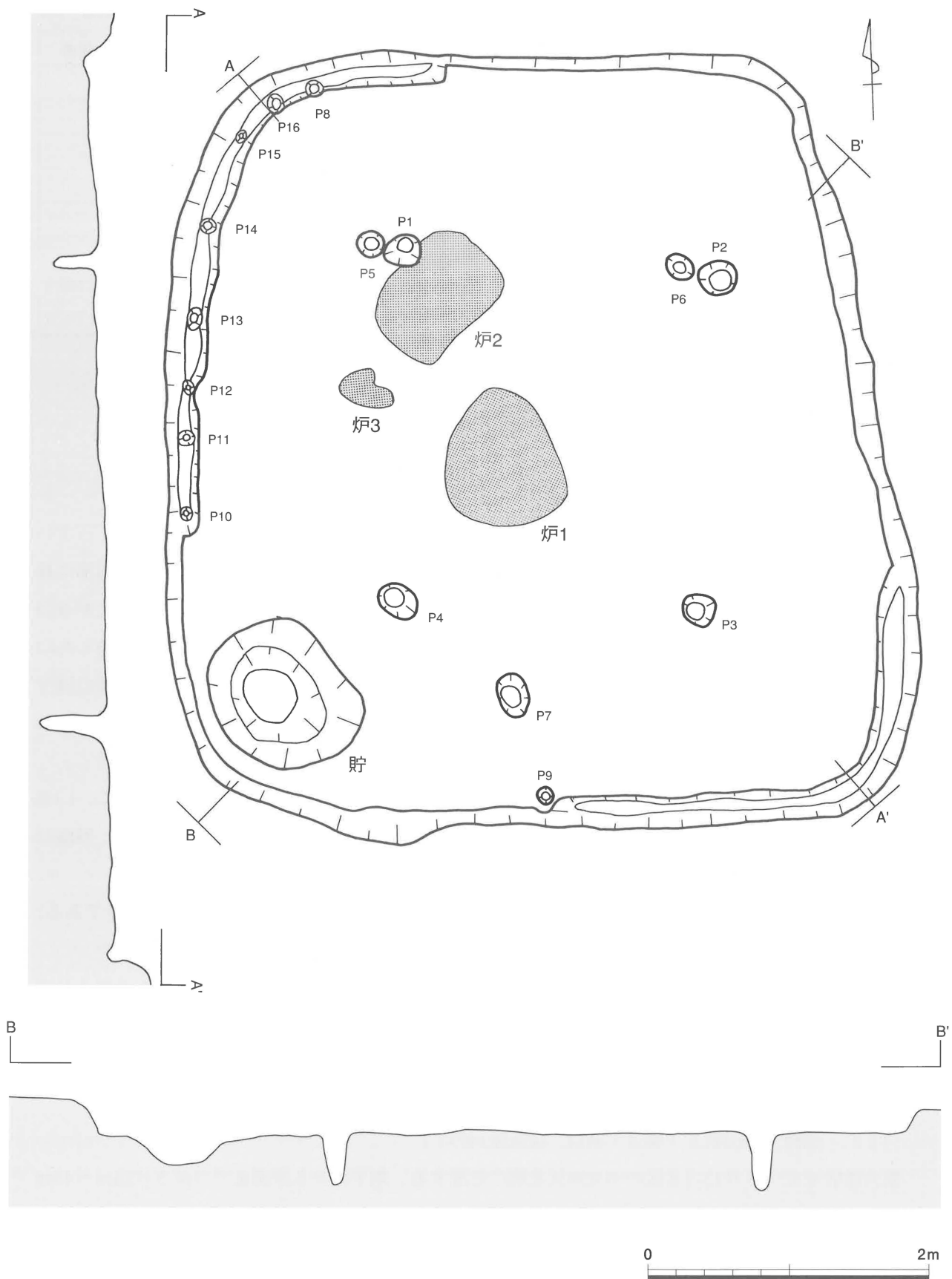
36は塩基性岩製の石斧である。敲打痕を体部全面に残し、刃部のみを研磨した蛤刃の縦斧である。横位の断面形は長円形である。

E—SB11の床面から検出された27・29～35は、王江式土器である。28は駿河地方からの搬入品の大廓式土器(註6)である。36は縄文時代晩期から弥生時代にかけての所産と考えられる。

12、竪穴住居址E—SB12

(1) 遺構(挿図第1・第3・第14、図版第14の1)

竪穴住居址E—SB12はE区の中央地区北側に位置する。削平面から床面までの深さは24cm～46cmと深い。壁溝は北壁の2.50mから北西隅を通り西壁の3mにかけてと、南壁の西2.50mから南東隅を通り東壁の1.50mにかけて認められる。北壁から西壁にかけての壁溝は幅20cm～30cm、深さ5cm～10cmである。この壁溝内に30cm～65cmの間隔で8個の小ピットが認められる。南壁から東壁にかけての壁溝は幅20cm～30cm、深さ6cm～8cmである。この壁溝内には1個の小ピットが認められる。



挿図第14 竪穴住居址E-S B12実測図

表第2 竪穴住居址E-SB12 小ピット法量一覧表

(単位 cm)

柱穴番号	長径	短径	床面からの深さ	備考	柱穴番号	長径	短径	床面からの深さ	備考
P 8	9	8	4		P 13	18	11	5	
P 9	10	10	5		P 14	11	10	5	
P 10	8	8	4		P 15	12	8	4	
P 11	9	9	4		P 16	11	10	5	
P 12	10	10	6						

床面の長さは、東西が南壁沿いで4.40m、北壁沿いで3.50m、南北が西壁沿いで4.50m、東壁沿いで4.70mと歪んでいる。面積は約19㎡である。平面形は台形で、北西隅と南西隅は円みがあり、南東隅と北東隅は円みが少ない。しかし、構築当時はほぼ隅円方形に近いものであったと考えられる。南北の主軸方位はN-5°-Eである。

主柱穴はP 1 (26×21×33)、P 2 (28×22×38)、P 3 (24×20×46)、P 4 (27×23×38) の4個である。主柱穴の横にあるP 5 (16×15×4)、P 6 (20×16×11) は支柱であろう。

貯蔵穴は南西隅に1カ所認められる。平面形は楕円形に近く、断面形は鍋底形である。その規模は長径111cm、短径100cm、深さ31cmである。さらにその面より下に、長径64cm、短径57cm、深さ26cmと二重の掘り込みが認められる。炉址は3カ所にある。炉址1は床面の中央付近にあり、焼土面の範囲は長軸100cm、短軸84cmである。炉址2は柱穴P 1の南東側に認められ、長軸92cm、短軸84cmである。炉址3は柱穴P 4とP 1の間に認められ、長軸38cm、短軸26cmである。

(2) 遺物(挿図第37の37~45)

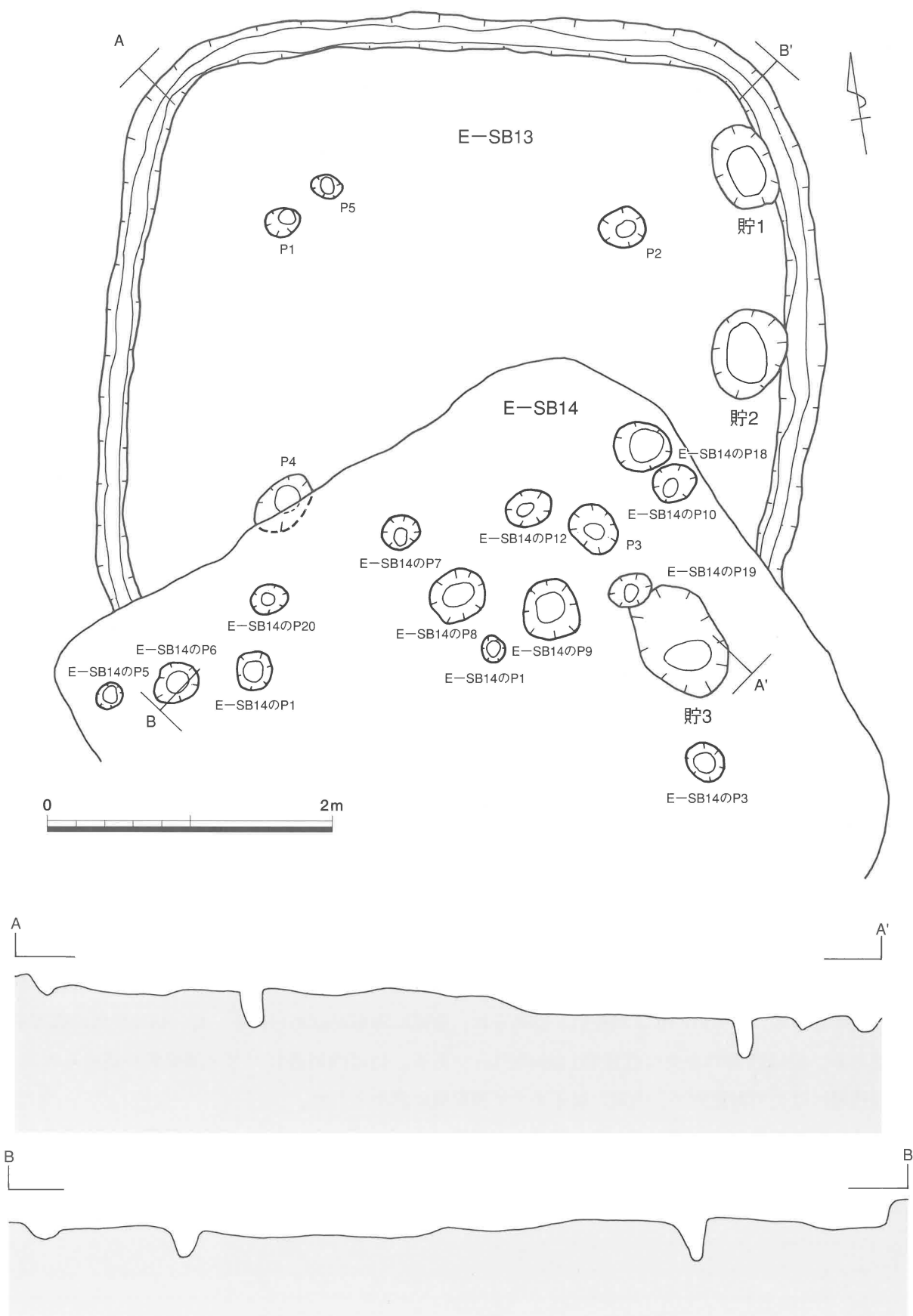
37はE-SB12の貯蔵穴、39~45は床面、38は埋土中から見出された遺物である。

38は深鉢の口縁部である。やや外反する口縁部の外面に横位の粗い条痕が認められ、口端の下方に約7mm幅の無文部をもつ。

37・39~44は壺の各部位である。37は口縁部であり磨滅が激しい。口縁部はわずかに外反し、口端は角張る。39は上胴部で、外面にヘラ状器具による鋸歯文が認められる。40は上胴部で、外面にクシ状器具による横線文と鋸歯文を配している。またこの鋸歯文の沈線内に赤彩が認められる。41は下胴部の破片である。斜位のハケメ調整痕が認められ、全面に赤彩が認められる。42~44は平底の底部破片である。42は底面の中央に直径約1.5cmの凹みがある。43は内外面にハケメ調整痕が認められた。44の外面にはナデ調整痕が、内面にはイタナデ調整痕が認められた。

45は花崗岩製の台石の破片である。扁平な自然礫の上面に、石皿状の浅い窪みをもつ。

E-SB12の床面・貯蔵穴から検出された土師器は王江式土器と考えられる。45の台石もこの時期に伴うものと考えられる。また埋土中から見出した38は水神平式土器(註7)の深鉢である。



挿図第15 竪穴住居址E-SB13・E-SB14実測図

13、竪穴住居址E—S B13

(1) 遺構(挿図第1・第3・第15、図版第4・第5の1)

竪穴住居址E—S B13はE区の中央地区東側に位置する。竪穴住居址の南側約1/3は竪穴住居址E—S B14に掘り込まれているが、北壁と西壁の5/6、東壁の3/4は残存している。削平面から床面までの深さは16cm～22cmである。壁溝はE—S B14に掘り込まれている南壁と東壁の1/4は不明であるが、それ以外の壁では認められる。壁溝は幅20cm～30cm、深さ3cm～6cmである。床面の長さは東西が北壁沿いで3.60m、南北が西壁沿いで3.50mである。北壁と西壁・東壁は胴張りが認められる。北東隅と北西隅は隅円で、南西隅も西壁のカーブから隅円で、平面形は胴張りのあるほぼ隅円方形といえよう。支柱穴間の中心を結んだ線を主軸線とすると、主軸線の方位はN-10°-Eである。

床面から検出された柱穴のうち支柱穴と考えられるのはP 1 (20×19×27)、P 2 (30×28×27)、P 3 (33×29×32)、P 4 (50×33×16)の4個である。

貯蔵穴は2カ所設けられている。貯蔵穴1は北東隅近くにあり、平面形は楕円形で、断面形は平底形をしている。その規模は長径56cm、短径37cm、深さ10cmである。貯蔵穴2は東壁沿いで北東隅から3.5m南にあり、平面形は楕円形で、断面形は平底形をしている。その規模は長径64cm、短径50cm、深さ13cmである。貯蔵穴3は南東コーナーにあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径86cm、短径58cm、深さ34cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物(挿図第38の46～48・55)

46～48は、E—S B13の床面から、55はピットP 3から検出された遺物である。

46は台付甕の脚台部である。脚台はやや膨らみをもち、脚台端部は角張っている。脚台部の内面にはハケメ調整痕が認められる。47は壺の底部破片である。平底の底面をもち、外面にハケメ調整痕を残す。

48は細長い鉄製品の破片である。断面形は図示した左側で方形、右側で長方形を成している。

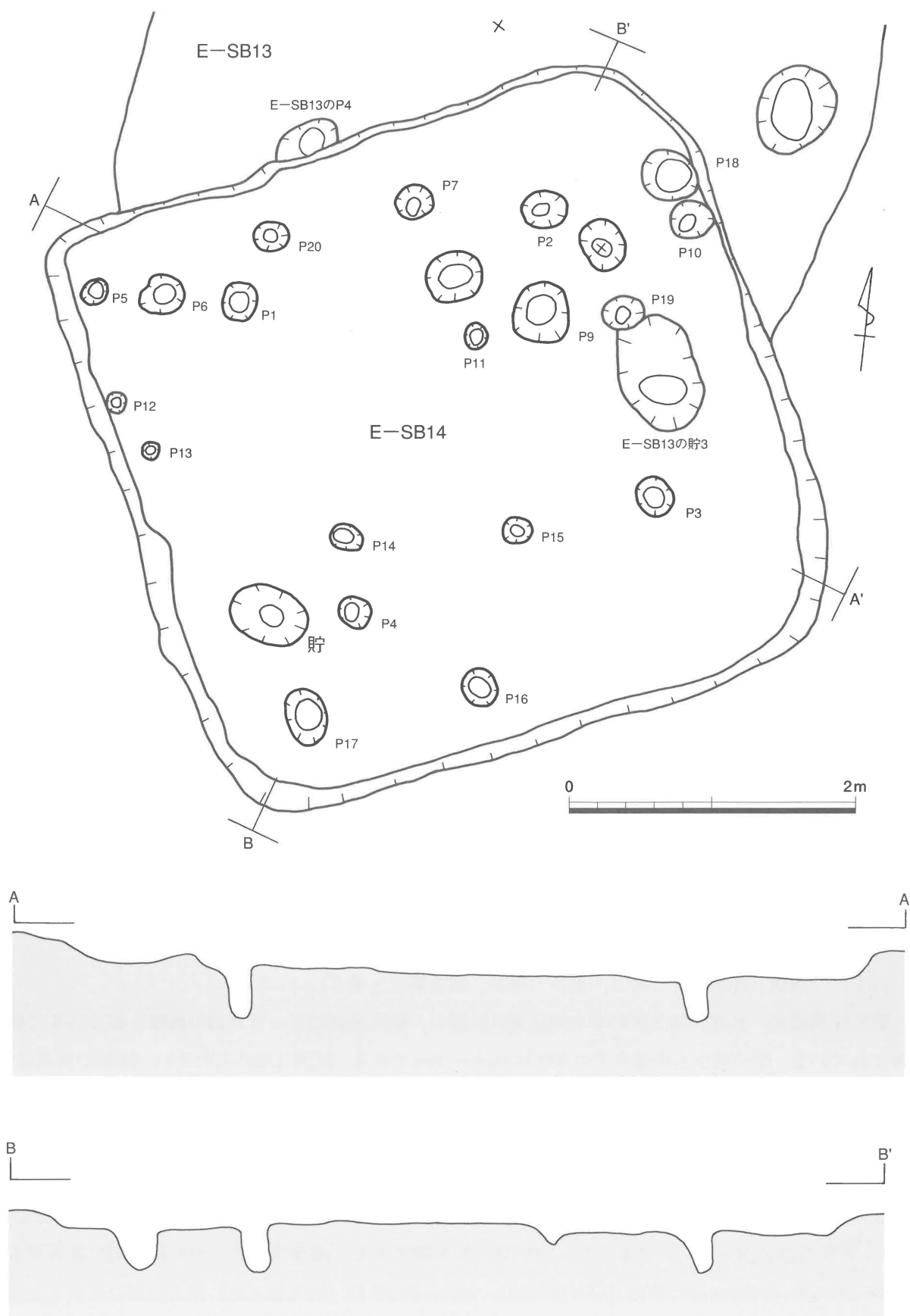
E—S B13の床面およびP 3から検出された土師器は王江式土器と考えられる。

14、竪穴住居址E—S B14

(1) 遺構(挿図第1・第3・第15・第16、図版第4・第5)

竪穴住居址E—S B14はE区の中央地区東に位置し、竪穴住居址E—S B13の南壁を掘り込んで構築されている。削平面から床面までの深さは14cm～26cmである。壁溝は認められない。床面の長さは、東西が北西壁沿いで4.10m、南北が南西壁沿いで4.10mである。面積は約18㎡である。北西隅は角ばっているが北東隅、南東隅、南西隅はともに隅円となっていることから、平面形は隅円方形である。東壁と西壁の中間点を結んだ直線を主軸線とすると南北の主軸方位はN-25°-Wである。

竪穴住居址内にはピットが多いが、支柱穴と考えられるのはP 1 (28×26×36)、P 2 (24×23×28)、P 3 (28×24×33)、P 4 (21×20×33)の4個である。南西コーナーから40cm南にあるP 5 (16×13×22)と120cm南のP 12 (14×14×10)、160cm南のP 13 (10×10×12)は入口用のピットと考えられる。貯蔵穴は2カ所設けられている。貯蔵穴1は北東コーナー近くにあり、平面形は楕円形で、断面形はU字形である。その規模は長径41cm、短径31cm、深さ12cmである。



挿図第16 竪穴住居址E-SB14実測図

貯蔵穴2は南西壁沿いにあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径54cm、短径44cm、深さ21cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第38の49～54・56～59)

49～54・56～59はE-S B 14の床面から検出された遺物である。

49・51は甕の各部位である。49は台付甕の脚台部である。脚台の付け根が細く直線的に開く形状を呈し、脚台端部は丸く仕上げている。外面は細かなハケメ調整を施した後にナデ調整を行っている。51は口縁部から上胴部にかけての破片である。口縁部は緩やかに外反し、口端は丸く仕上げている。内外面ともにナデ調整痕が認められる。

52～54は壺の各部位である。52は頸部で、外面に縦位のハケメ調整痕が残る。53は口頸部で、丈が高く直線的に立ち上がり、口端部は三角形に仕上げている。54は丸底の底部で、内外面ともに磨滅している。

50・55～59は高坏の各部位である。50は小形の脚部で、直線的に下方に開き、脚端は丸く仕上げている。外面は細かなハケメ調整を施した後にナデ調整を行っている。55は高坏の坏部から脚上半部にかけてのものである。坏底部は丸みをおびて立ち上がり、口縁部は内彎している。脚部は大きく外反するものと考えられ、下方に円孔の一部が認められる。坏部と脚部の外面には縦位のヘラミガキ調整痕が残る。56は全形を知る高坏である。坏高の低い坏部は接合部外面に稜をもつ。口縁部はやや反り気味に開き、口端は丸みをもつ。脚部は筒状で、脚部と坏部との接合部から下方約1/4で急激に屈折して開き、やや外反して丸みをおびた脚端に至る。高坏の坏部内外面はナデ調整で仕上げられている。筒状の脚部外面はナデ調整で仕上げられ、内面はヘラケズリ痕が認められる。57は筒状の脚部である。脚部と坏部との接合部から下方約1/4で、大きく屈折して直線的に開き、丸みをおびた脚端に至る。外面にはナデ調整痕、内面にはヘラケズリ痕が認められる。58・59は筒状の脚部破片であり、いずれも脚に膨らみをもつ。58の外面にはヘラミガキ調整痕が残り、59の内面にはヘラケズリ痕が認められる。

E-S B 14の床面から検出された49～53・55は王江式土器、54・56～59は青山式土器である。

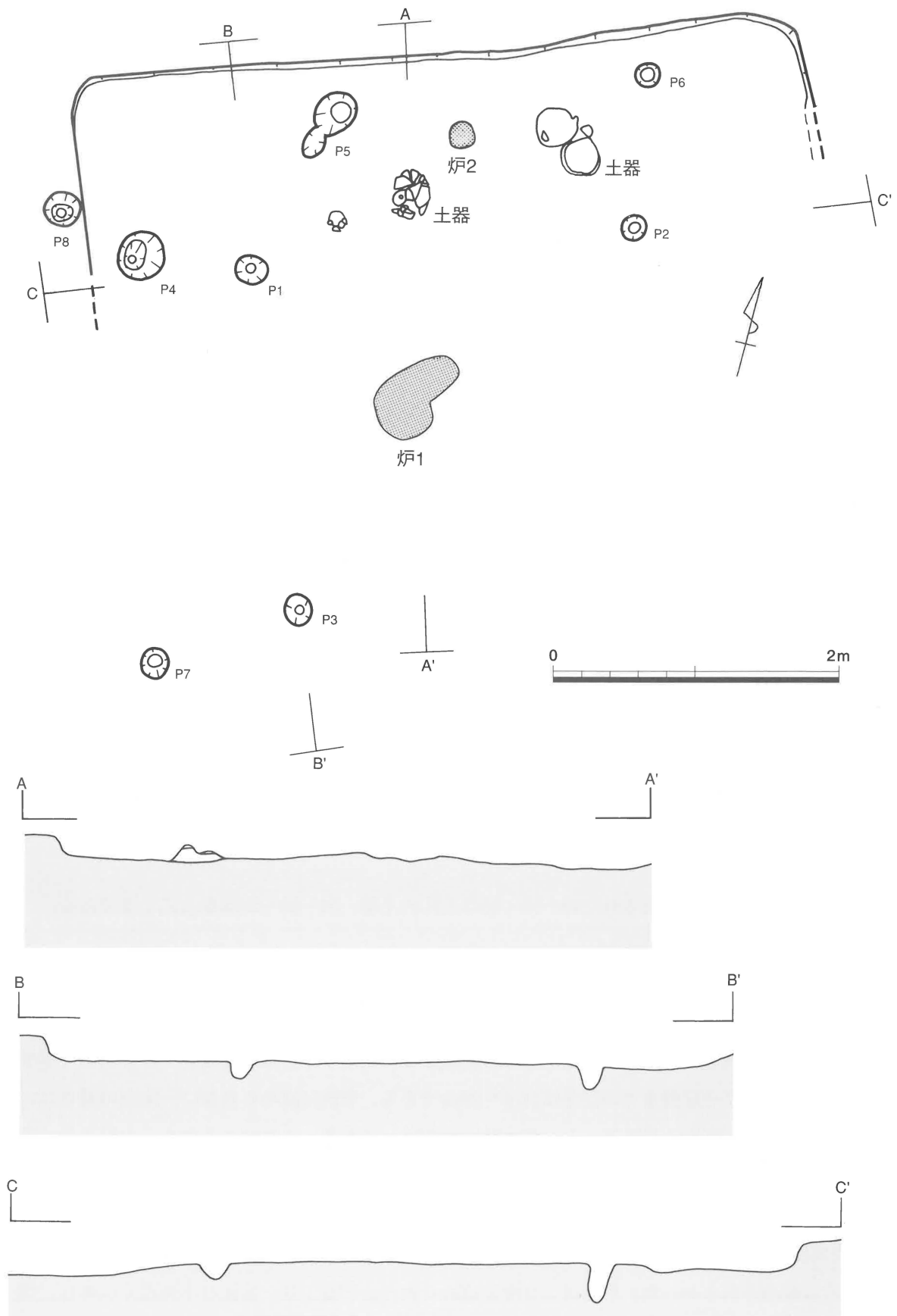
15、竪穴住居址E-S B 15

(1) 遺構 (挿図第1・第3・第17)

竪穴住居址E-S B 15はE区の中央地区東に位置する。南側の半分は墓地改葬による工事で削平されている。削平面から床面までの深さは14cm～24cmである。壁溝は認められない。床面の長さは、東西が5.06mである。南北は不明である。平面形は北東隅と北西隅、直線状の北壁から方形または長方形であろう。直線状を呈する西壁から計測した南北の主軸方位はN-20°-Wである。

竪穴住居址内と周辺から8個の柱穴が検出されている。そのうち主柱穴はP 1 (17×14×7)、P 2 (14×12×17)、P 3 (18×14×10)で南東側の柱穴は工事により滅失している。

貯蔵穴は検出されなかった。炉址は2カ所で認められた。炉址1は、床面の中央近くにあり、焼土や灰が長軸68cm、短軸40cmの範囲で検出された。灰の堆積は厚いところで5cmもあった。炉址2は北壁寄りにあり長軸20cm、短軸18cmである。



挿図第17 竪穴住居址E-S B15実測図

(2) 遺物 (挿図第39の60～68)

61・63・68はE—S B 15の床面、60・62・64～67は埋土中から見出された遺物である。

60～62は甕の各部位である。60は口頸部である。やや外反する口縁部をもち、口端部が下方で再度外反する。内外面にハケメ調整痕を残す。61は口縁部から下胴部にかけてのものである。内彎するくの字状口縁をもち胴部は球形を成している。内外面にハケメ調整痕を残し、器壁は薄い。62は受口状口縁をもつ口縁部から上胴部である。口端部は内方向に面取りされ、口端は丸みをおびている。下胴部内面にはハケメ調整痕が残る。

63～66は高坏の各部位である。63は高坏の全形を知るものである。坏部はハの字に内彎ぎみに開き、脚部はハの字に開き下方でやや膨らみをもち脚端に向かう。脚端は角張っている。また脚の上方約1/2までクシ状器具による5条3段の横線文が薄く施されている。文様の下方には円孔が3カ所に配されている。64・65は坏部である。いずれも皿状の坏底部と口縁部との接合部外面に稜をもつ。口縁部はハの字に開いている。内外面ともにナデ調整を施している。66は脚部である。やや膨らみのある筒状の脚で下方の脚端に向い大きく屈折する。脚端は欠損している。

67は丸底の小形の壺で、口縁部を欠く。胴部の形状は球形を呈している。外面にはナデ調整痕、内面には指痕とナデ調整痕を残す。68は碗である。平底で底面に凹みのある底部をもち、胴部は丸みをおびて立ち上がる。口縁部はやや外反し、口端は丸く仕上げられている。内外面ともにヘラミガキ調整痕が残る。

E—S B 15から検出された60・62は瓜郷上層第3様式の土器で、埋土中から見出された64～67は青山式土器である。

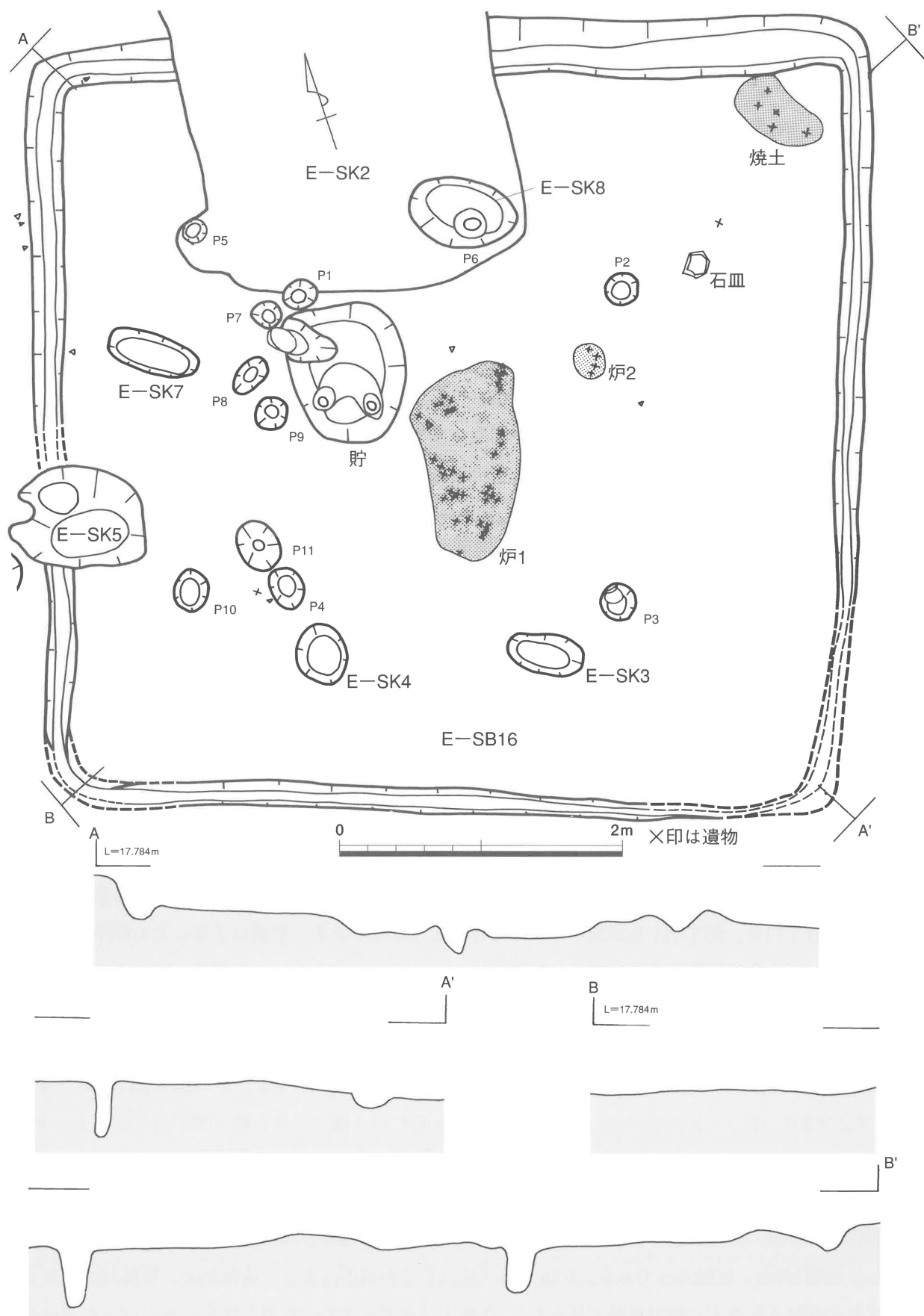
16、竪穴住居址E—S B 16

(1) 遺構 (挿図第1・第3・第18、図版第6の1)

竪穴住居址E—S B 16はE区の中央地区南東に位置する。北壁は土壌E—S K 1に、西壁は土壌E—S K 5に掘り込まれている。床面は土壌E—S K 3・E—S K 4・E—S K 7・E—S K 8によって攪乱されている。削平面から床面までの深さは16cm～38cmである。壁溝は工事による削平や土壌に切られていない壁では巡らされている。壁溝は幅12cm～40cm、深さ約10cmを測る。床面の長さは、東西が北壁沿いで5.50m、南北が西壁沿いで4.90mである。面積は約27㎡である。平面形は長方形である。東壁と西壁の中点を結んだ直線の南北の主軸方位はN—18°—Eである。

竪穴住居址内から13個の柱穴が検出されている。そのうち主柱穴はP 1 (24×21×23)、P 2 (24×22×30)、P 3 (25×25×43)、P 4 (28×18×42)の4個である。柱穴間の長さはP 1～P 2が2.26m、P 2～P 3が2.14m、P 3～P 4が2.36m、P 4～P 1が2.10mである。

貯蔵穴は1カ所認められる。床面中央北にあり、平面形は楕円形で、断面形は平底形である。その規模は長径88cm、短径80cm、深さ20cmである。炉址は2カ所に認められる。炉址1は床面の中央に位置し、長軸140cm、短軸70cmである。炉址2は主柱穴P 2の南西にあり、長軸26cm、短軸24cmである。いずれの炉址も灰や炭化物の堆積が見られた。炉址1は灰や炭化物の堆積が厚さ5cm～12cmもあった。北東隅の壁沿いに長軸66cm、短軸34cmの範囲に認められたが、火災を受けた可能性が考えられる。炉



挿図第18 竪穴住居址E-SB16、土坑E-SK2～E-SK5・E-SK7・E-SK8実測図

址1・炉址2、焼土面から土師器片、貯蔵穴からは台石が検出されている。

(2) 遺物(挿図第39の69～71・第40の72～85・第41の86～89)

69～71・73～75・77～85はE-S B16の床面、72は貯蔵穴、76・86は埋土中から検出された。

69～72は甕の各部位である。69は口縁部から下胴部である。下胴部の下方には脚台が付くものと考えられる。くの字状に直口する口縁部をもち、口端は丸く仕上げられ、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整痕を残す。胴部の形状は腹部上方に最大幅をもつ肩の張った偏球形を呈し、内外面に薄いハケメ調整痕を残す。また下胴部外面には煤の付着が認められる。70・71は口縁部から上胴部にかけてである。いずれもくの字状口縁部をもつ。72は脚台付の甕である。下胴部から脚台部にかけてのものであり、下胴部は内外面ともにナデ調整を行っている。脚台部も内外面にナデ調整で仕上げている。

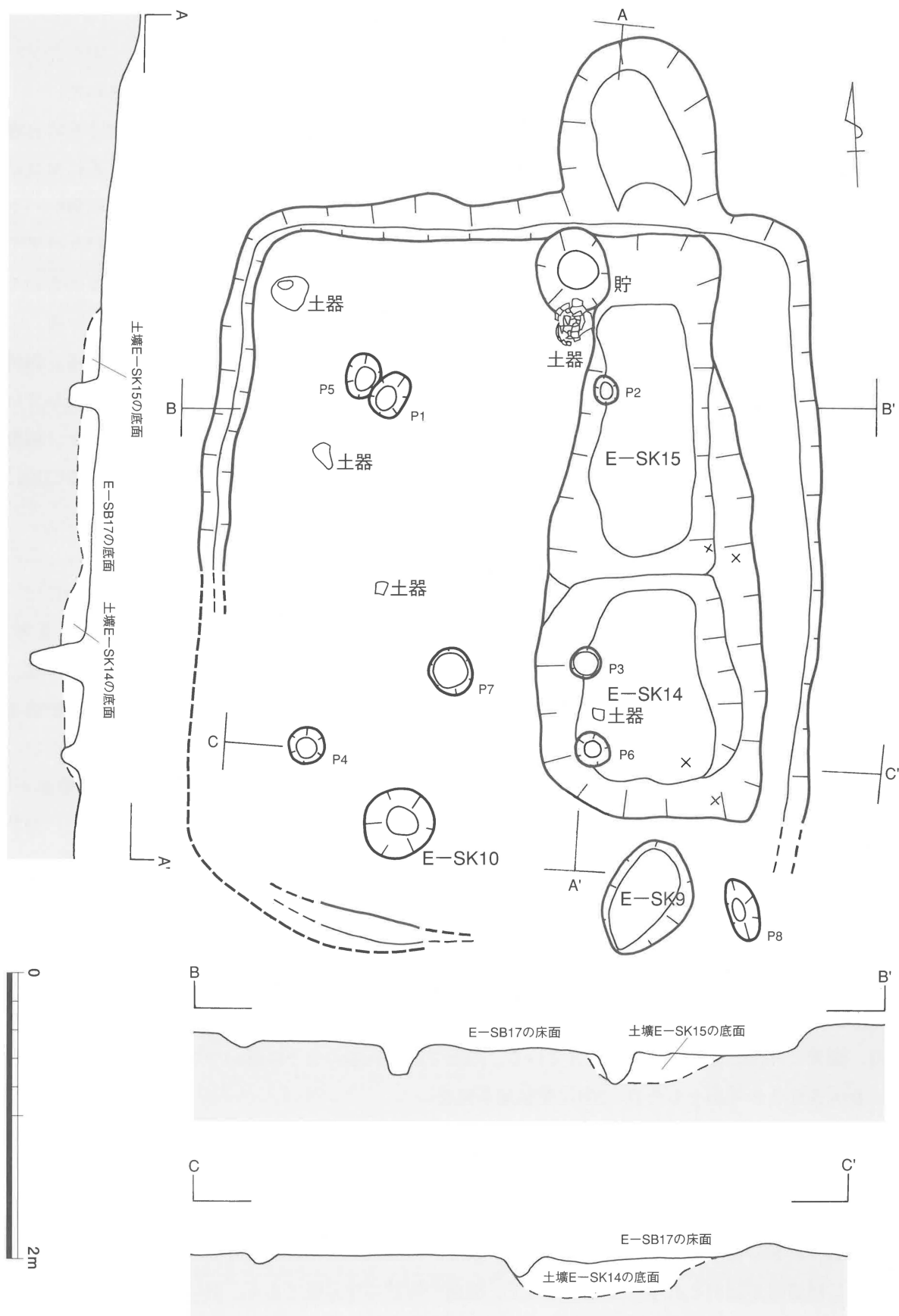
73～75・85は壺である。73は小形丸底であり、短い口縁部をもち、胴部は球形を呈している。内外面ともに磨滅している74は丸底の壺であり、高くやや外反する口縁部をもつ。胴部は球形を呈している。外面はナデ調整で仕上げている。内面の口頸部ではヨコナデ調整痕、胴部では指痕とハケメ調整痕が認められる。75は二重口縁の破片である。稜をもつ口頸部から大きく外反して丸みのある口端に至る。内外面ともにナデ調整で仕上げている。85は丸底に近い平底の壺の破片である。

76～83は高坏の各部位である。76～78・83は坏部である。76は坏高が高く、底部から屈曲し、この部分から直線的に開く口縁部をもつ。口端は角張っている。外面にはナデ調整痕を残し、内面にはハケメ痕を残す。77・78は杯底部から大きく開く杯部をもつ。77は坏底部と口縁部の接合部に稜をもち、口端は丸めてある。内外面ともにナデ調整で仕上げている。79～82は脚部である。79は脚の上半部にわずかに膨らみをもち、下方約4/5の位置で大きく開脚する形状である。外面に薄いハケメ調整痕を残し、内面の脚端部でヨコナデ調整痕が認められる。81には坏部の底部が残存し、やや太めの筒状の脚部で、坏の接合部から下方に約2/3の位置で大きく外反する。外面はミガキに近いナデ調整痕が、内面にはヘラケズリ痕が認められる。脚下方部に5条のヘラ描き線刻が施されている。80・82は筒状の脚部の破片である。いずれも外面はナデ調整痕、内面にはヘラケズリ痕が残る。80の脚上部にメのヘラ記号がある。83は坏底部と口縁部の間に強い稜段を作り外反する口縁部をもち、口端は丸く仕上げている。外面はナデ調整を行い、外面には薄いハケメ調整痕を残す。

84は鼓形を呈した器台である。坏部を欠くもので、括れ部の内面は上下に貫通している。台部はハの字形に開脚している。台端は内面に拡張され、平坦に仕上げられ、外面にはヨコナデ調整痕が認められ、脚部と坏部はナデ調整で仕上げている。内面では括れ部の上下に薄いハケメ調整痕が認められる。D区SK2から出土したD-201に類似品を見る。

86はチャート製の縦長剥片を使用した刃器である。縦に長い剥片の側辺を切断し、片方を刃部としている。背面の切断部中心には打点痕が残り、刃部に使用痕が認められる。形状は台形を呈している。87は風化した花崗岩製の砥石である。自然円礫の上面に1カ所、側面に2カ所の砥面が認められる。88は塩基性岩製の石斧である。体部の下半分が残る。定角式状石斧の形状をもち、風化が進んでいるが全面に研磨痕が認められる。刃部は直刃で、断面の形状は片刃様である。89は凝灰岩製の石皿である。自然の板状礫を使用したもので、全体の約1/4が残存する。上面に薄く窪む機能面もつ。

E-S B16の床面と貯蔵穴から検出された遺物は青山式土器である。埋土中から検出された86の切



挿図第19 竪穴住居址E-SB17、土坑E-SK9・E-SK10・E-SK14・E-SK15実測図

断形刃器（註8）は縄文時代早期の所産であろう。

17、竪穴住居址E—S B 17

（1）遺構（挿図第1・第3・第19、図版第6の2）

竪穴住居址E—S B 17はE区の中央地区南西に位置する。南壁は工事による削平のため滅失している。北壁は土壌E—S K 15を掘り込み、E—S K 14の底面を叩き締めて張り床状になっていた。床面には土壌E—S K 9、E—S K 10が所在していた。削平面から床面までの深さは8cm～16cmである。壁溝は北壁の2.0mと西壁の2.30mの間に認められるが、北東隅から東壁は認められない。床面の長さは、東西が北壁で3.60m、南北は残存している東壁で3.90mである。平面形は南北に長い長方形である。東壁と西壁の中点を結んだ線を主軸線とすると南北の主軸方位はN—7°—Eである。

竪穴住居址内から8個のピットが検出された。そのうち支柱穴はP 1（30×26×22）、P 2（25×22×14）、P 3（23×20×24）と考えられるが、南西の柱穴は工事による削平で滅失したものと思われる。P 5（32×25×12）は支柱であろう。

北壁の東コーナーから1.0mの、竪穴住居址の外側に平面形は楕円形で、断面形は平底形をした掘り込みが認められる。北壁で計測すると掘り込みの上端は110cm、下端は60cm、深さは20cmである。入口としての施設ではなかろうか。

貯蔵穴は1カ所認められる。北壁寄りにあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径58cm、短径50cm、深さ32cmである。炉址は検出されなかった。

（2）遺物（挿図第41の90・92～97）

90・92・94～97はE—S B 17の床面、93は支柱穴P 2から検出された遺物である。

90は深鉢の口縁部である。口縁には粗い斜位の条痕が認められ、口端は丸く仕上げられている。

92は壺の底部破片で平底である。

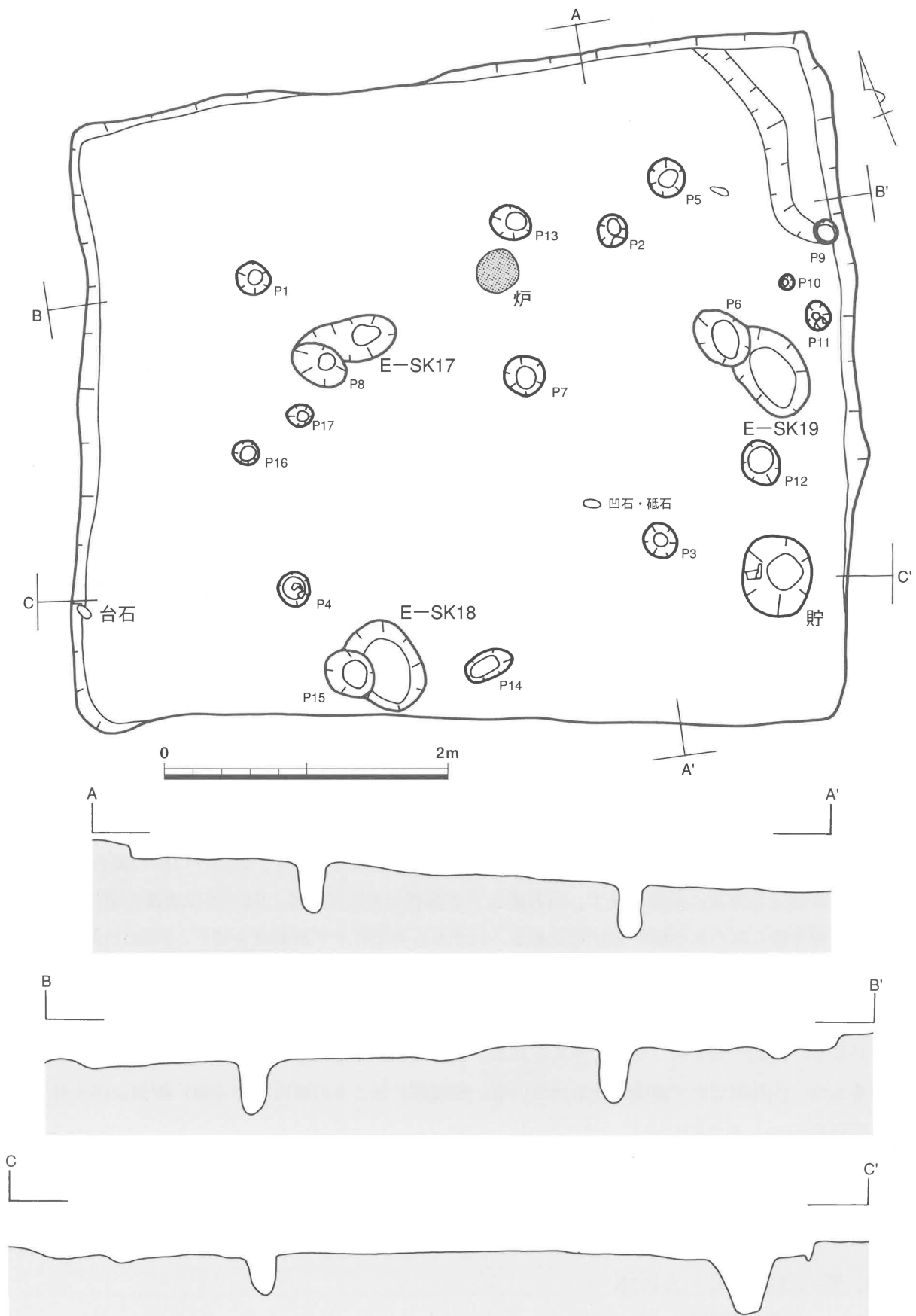
93～97は高坏の各部位である。93は坏部である。口縁部は大きく開き、底部と口縁の接合部に稜をもつ。この部分の外面に指跡を残す。内外面はナデ調整で整えている。94～96は脚部の破片である。94・95はやや膨らみのある脚の筒状部である。いずれも外面にナデ調整痕を残し、内面にはヘラケズリ痕が残る。96は開脚した部分から脚端までの破片である。脚端近くの内外面に脚端を面取りした、ヨコナデ調整痕が認められる。97は同一個体の坏部と脚端部の破片である。脚と坏との接合部は欠損しているが、筒状の脚をもつものと考えられる。坏部は口縁部が大きく開き、底部と口縁部の境に低い稜をもつ。内外面はナデ調整で仕上げている。脚端部には5本の縦位に並ぶ薄い線刻が描かれている（間隔約0.6cm、長さ約2.4cm）。

E—S B 17の床面から見出された90は続水神平式土器、92は王江式土器、94～97は青山式土器である。

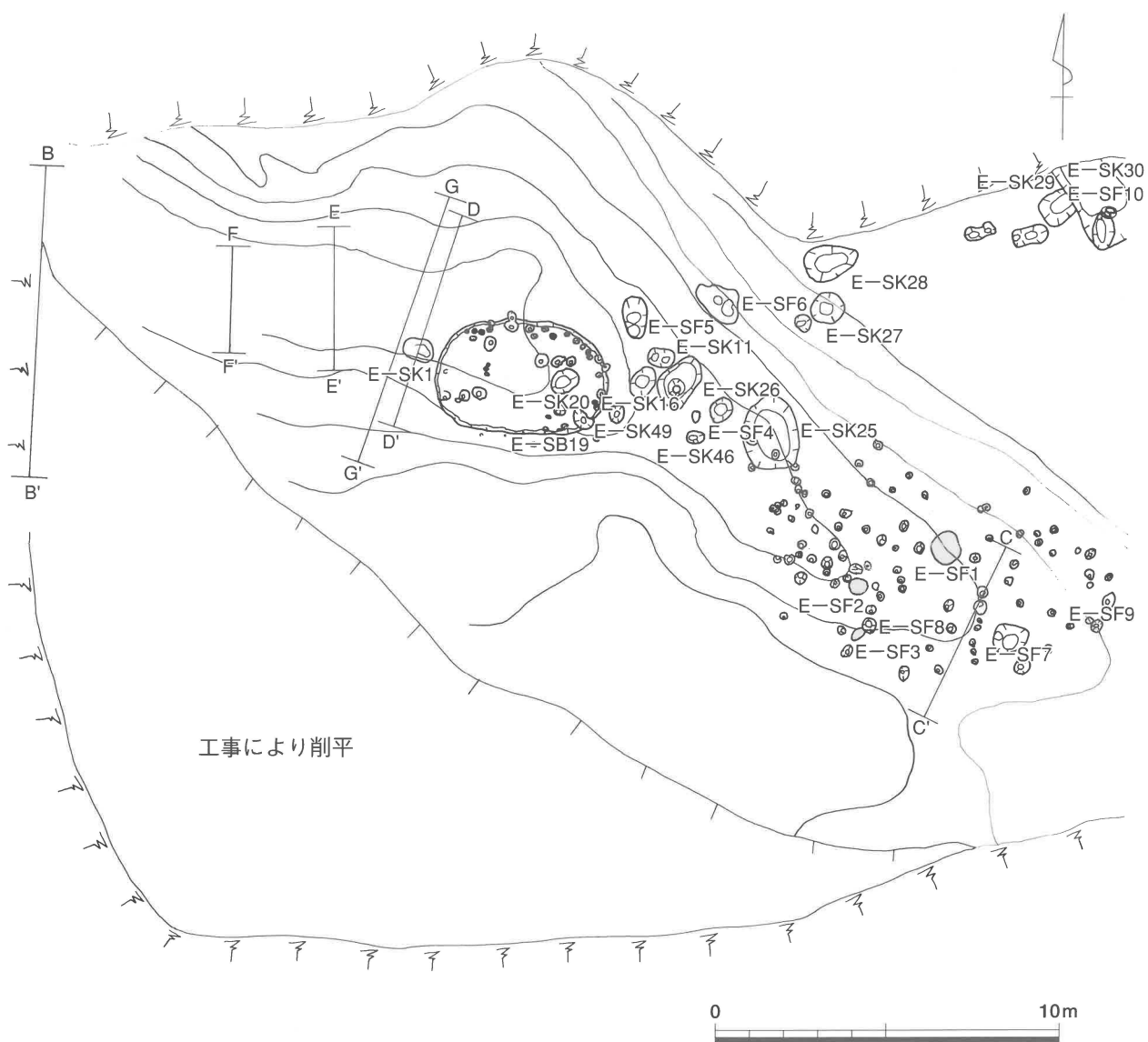
18、竪穴住居址E—S B 18

（1）遺構（挿図第1・第3・第20）

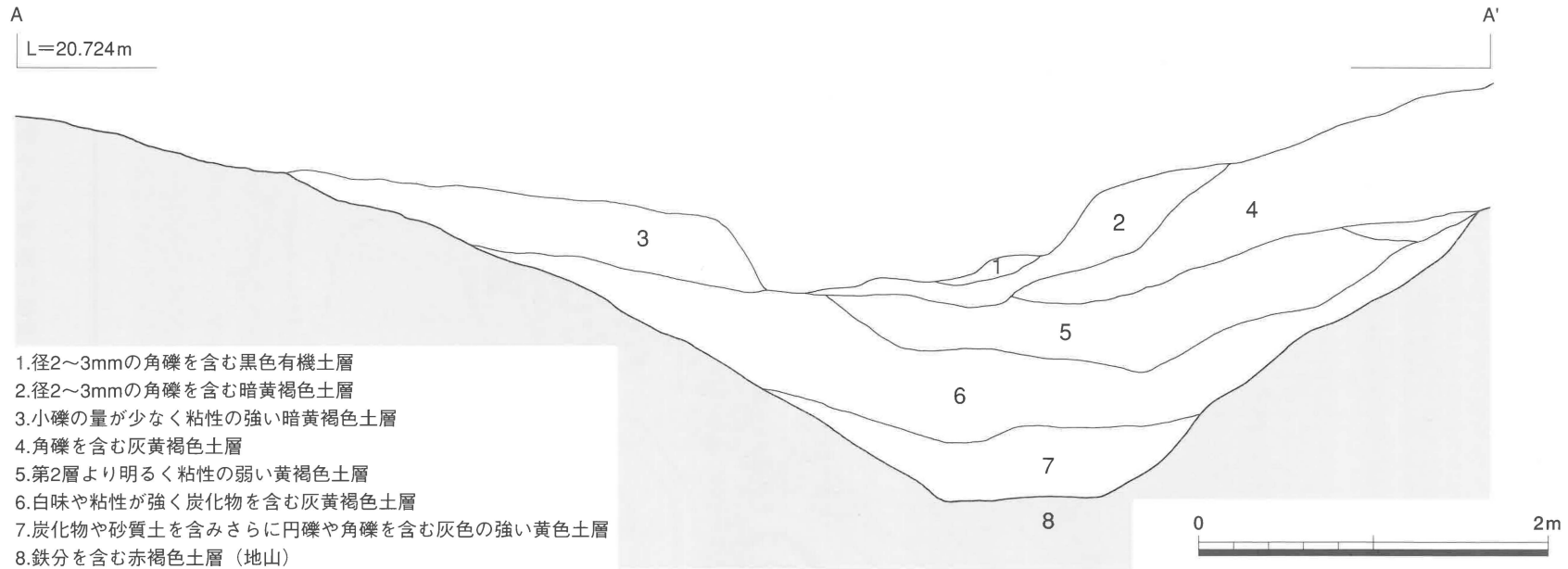
竪穴住居址E—S B 18はE区の中央地区南西に位置する。竪穴住居址内に土壌E—S K 17、E—S



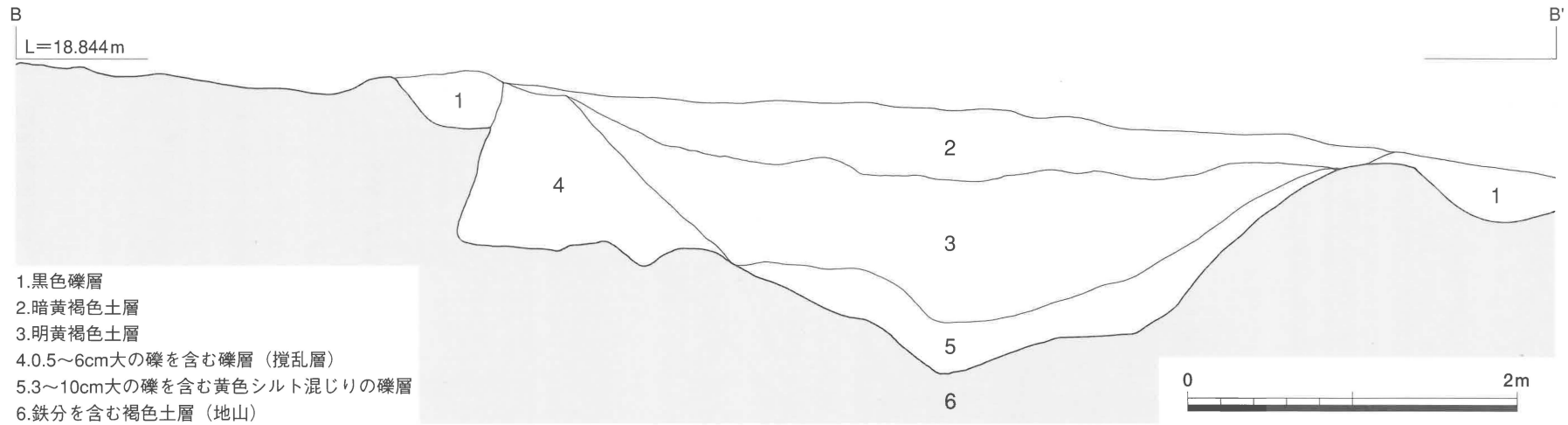
挿図第20 竪穴住居址E-SB18、土壇E-SK17~E-SK19実測図



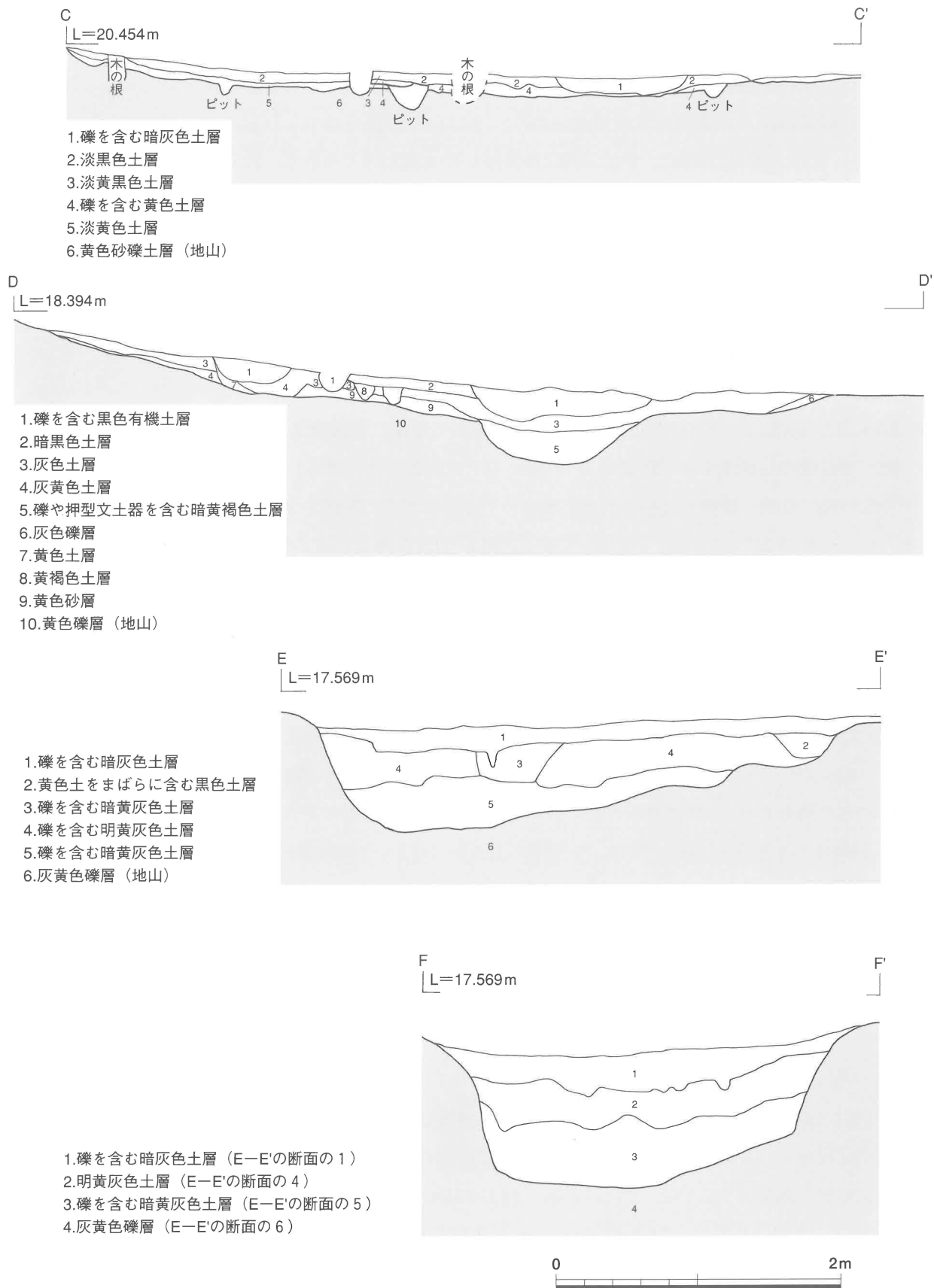
挿図第21 E区西側崖面、トレンチ断面ポイントおよび集石遺構平面ポイント図



挿図第22 竪穴住居址E-S B17・E-S B18南側崖面（A-A'）断面図



挿図第23 竪穴住居址E-S B19西側崖面（B-B'）断面図



挿図第24 E区トレンチC-C'・D-D'・E-E'・F-F'断面図

K18、E—S K19がある。削平面から床面までの深さは12cm～30cmである。壁溝は認められない。床面の長さは、東西が北壁で5.10m、南北は東壁で4.70mである。面積は約23㎡である。平面形は長方形である。東壁と西壁の中点を結んだ直線を主軸線とすると南北の主軸方位はN—12°—Eである。

竪穴住居址内から19個の柱穴が検出された。そのうち主柱穴はP1（24×22×36）、P2（24×20×36）、P3（26×22×39）、P4（23×22×29）の4個と考えられる。柱穴間の長さはP1～P2が2.60m、P2～P3が2.24m、P3～P4が2.60m、P4～P1が2.24mである。北東隅から東壁にかけて幅12cm～20cm、深さ3cm～4cmの溝状の掘り込みが認められ、床面と区別されている。入口の一部であろうか。貯蔵穴は東壁沿いに1カ所認められる。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形で、長径56cm、短径46cm、深さ37cmである。炉址はP1とP2の間にあり、平面形はほぼ円形で径は32cmを測る。

（2） 遺物（挿図第42の98～107）

98～105・107はE—S B18の床面、106は埋土中から見出した遺物である。

98・99は甕の口縁部から下胴部で、内外面ともナデ調整で仕上げている。98はくの字状口縁をもち、平坦な口端には薄い横線が認められる。99はハの字に広がる口縁部をもち、口端は丸みをもたせている。100～102は壺の胴部破片である。100は上胴部でLRの縄文が施されている。101は下胴部の破片で、外面に赤彩が認められる。102は上胴部の破片で、外面に赤彩が認められる。

103・104は高坏の破片である。103は坏部で口縁部の上端を欠く。底部と口縁部との接合部外面に三角状の稜をもつ。104は筒状の脚部破片である。脚端は欠損しているが、下方で開脚する屈曲部が認められる。

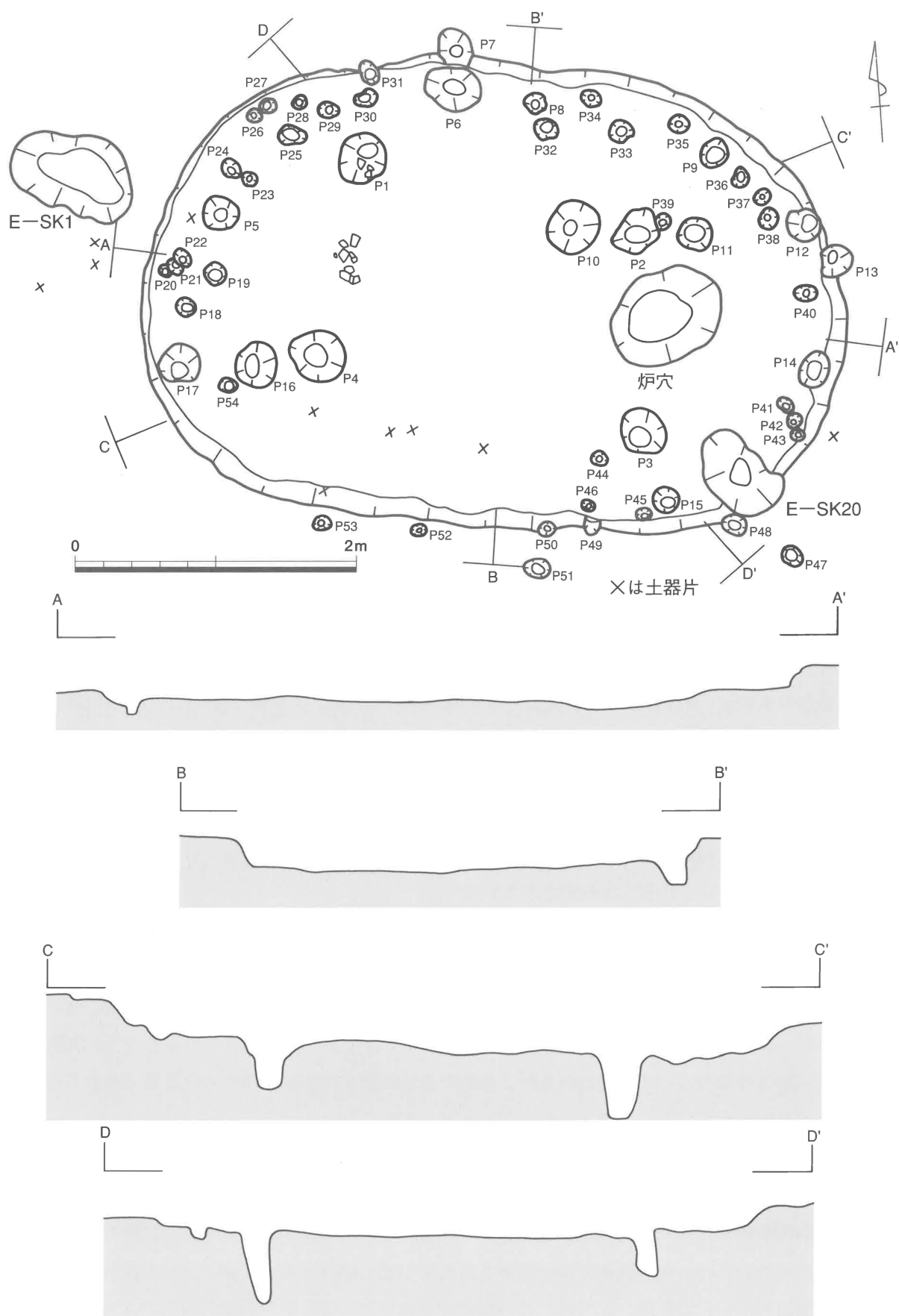
105は凝灰岩製の台石である。扁平な自然礫の上面を機能面としたもので、細かなスリ痕が認められる。106はチャート製の横長剥片の側辺を切断して残った側辺を刃部としたもので、この部分に使用痕がみとめられる。107は凝灰岩製の砥石と凹石との併用石器である。長円形の自然礫全面（確認できる機能面は6面）に砥面が残り、やや窪んだ上面には2カ所の凹部が認められる。

E—S B18の床面から検出された遺物の98・99・101・102は王江式土器、103・104は青山式土器である。また100の縄文を施した壺は弥生式土器か古墳前期の土師器と考えられ、遠江・駿河地方からの搬入品である。石器の105・107はこれらの土器に伴うものであろう。埋土中から見出した106は縄文時代早期の所産と考えられる。

19、竪穴住居址E—S B19

（1） 遺構（挿図第1・第4・第21・第25、図版第7・第8・第9の1）

竪穴住居址E—S B19はE区の西地区中央に位置する。この竪穴住居址は東から西へゆるやかに下る谷状地形に構築されている（註9）。削平面から床面までの深さは6cm～30cmである。壁溝は認められない。床面の長さは、東西が4.80m、南北が3.00mである。平面形は東西に長い楕円形である。この楕円形は、ほぼ東西に引いた長さ4.80mの直線を長軸として、西端から1.5mの地点と東端から1.5mの地点を中点とした半径1.5mの円をもとに描かれたものと考えられる。2つの円の交点を結んだ線を主軸線とするならば南北の主軸方位はN—82°—Wである。



挿図第25 竪穴住居址E-S B19、土壇E-S K1・E-S K20、炉穴E-S F実測図

表第3 竪穴住居址E-SB19 柱穴ならびに小ピット法量一覧表

(単位 cm)

柱穴番号	長径	短径	深さ	備考	柱穴番号	長径	短径	深さ	備考	柱穴番号	長径	短径	深さ	備考
P1	37	31	51	内	P19	12	12	10	内北	P37	13	11	4	内北
P2	35	27	32	内	P20	9	9	6	内北	P38	13	13	8	内北
P3	20	16	26	内	P21	11	11	4	内北	P39	12	12	10	内北
P4	37	37	41	内	P22	8	8	10	内北	P40	12	11	6	内北
P5	26	23	15	内	P23	10	8	8	内北	P41	14	12	13	内南
P6	30	18	23	内	P24	18	10	9	内北	P42	12	12	6	内南
P7	30	24	21	壁上	P25	18	13	11	内北	P43	16	15	5	内南
P8	15	13	18	内	P26	9	9	6	内北	P44	10	10	5	内南
P9	22	19	9	内	P27	11	9	7	内北	P45	13	8	6	内南
P10	34	34	7	内	P28	8	8	7	内北	P46	11	9	6	内南
P11	27	26	6	内	P29	13	10	10	内北	P47	15	12	8	外
P12	25	20	19	内	P30	14	10	10	内北	P48	18	14	6	壁上
P13	21	20	20	壁上	P31	12	11	10	内北	P49	11	10	16	壁上
P14	25	20	12	内	P32	20	20	15	内北	P50	11	11	10	壁上
P15	17	17	14	内	P33	20	16	15	内北	P51	19	14	10	外
P16	31	29	37	内	P34	12	12	19	内北	P52	10	9	5	外
P17	30	27	23	内	P35	13	12	12	内北	P53	15	11	6	外
P18	11	11	11	内北	P36	16	15	7	内北					

竪穴住居址の床面とその周辺から53個の柱穴および小ピットが検出されている。柱穴は直径20cmほどの大きさのものと、直径10cm以下の大きさのものが認められる。大きめの柱穴はP1～P17の17個、小さめのピットはP18～P53までの36個である。P1、P10、P13、P11の4個とP3、P4、P16、P17の4個がほぼ左右対称に配列されており、小ピットがそれらを取り囲むように配列されている。その小ピットは北側にP18からP40までの23個があり、南側にP41からP53までの13個がある。北側の小ピットが竪穴住居址内の壁沿いに検出されているのに比べ、南側の小ピット（P47～P53）は竪穴住居址の外側にあり、内側では検出されていない。




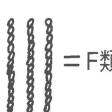

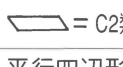



貯蔵穴は検出されなかった。竪穴住居址内東側中央に長径86cm、短径64cm、深さ7cmの掘り込みが認められた、埋土から炭化物が検出された。掘り込みの底面や壁面がわずかに赤く焼けていた。しかしながらE-SB19の床面には熱を受けた様子は見うけられなかった。竪穴住居址の東側2m～5mの範囲内で、赤く焼けた掘り込みが3カ所認められた。いずれも炉穴と考えられるもので、精査の結果竪穴住居址よりやや古いことがわかった。そのため、本竪穴住居址に伴うものと考えられるし、竪穴住居址が構築される以前に使用された炉穴とも考えられる。

(2) 遺物（挿図第43の108～155・第44の156～205・第45の206～214）

108～194はE-SB19の床面、195～198はピット内、199～202は埋土中から見出された土器である。また石器の204～214については床面、203はピット内から検出した。床面から出土した土器の多くは押型文系の深鉢であり、他に撚糸文系の深鉢を含んでいる。押捺された文様の分類を表第4に示す。

A-b類は108～112である。正方形に近い押型文を施している。全て胴部の破片で、文様は横方向に施されている。108は正方形に近い押型文を互い違いに配し市松模様をもつ。

表第4 押型文の平面形および断面形分類表

平 面 形 (長さ8mm×幅3mm以上の押型文を「大」とする)						断 面 形	
 = A類	大  = B1類	大  = C1類	大  = D1類	 = E1類	 = F類	箱状	 = a
	小  = B2類	小  = C2類	小  = D2類	 = E2類		舟底状	 = b
正方形	菱形	平行四辺形	楕円形	山形	燃糸文	半円状	 = c

記号の説明

押型文土器の文様を記号化したものが表第4である。上記は、その説明である。文様の平面形が、①正方形に近い押型文をA類とする。②菱形の押型文で大きなもの（長さ8mm×幅3mm以上）をB1類とし、小さなもの（長さ8mm×幅3mm未満）をB2類とする。③長い平行四辺形の押型文で、大きなものをC1類とし、小さなものをC2類とする。楕円形の押型文で、大きなものをD1類とし、小さなものをD2類とする。⑤山形の押型文で山と谷が繋がったものをE1類とし、山と谷の間に隙間があるものをE2類とする。⑥燃糸文はF類とする。

文様の断面形が、底面から直角に立ち上がるものをaとし、舟底状のものをbとする。また、燃糸文の半円状を示す断面形をcとする。

一例を示すと、大きな菱形の文様で断面が直角のものは、B1-a類である。

B1-a類は113～123である。菱形を成す斜格子目押型文である。116は緩やかに外反する口縁部の破片で、文様を押捺した後に、口端を横方向に撫でて丸く面取りしている。115は口縁部近くの破片である。114は胴径を知ることのできる胴部破片である。器面には3段の輪積痕が認められ、輪積の幅は3.6cmを測る。内面は横位のナデ調整痕が認められる。胴形はやや膨らみをもち直線的に下るものと考えられる。117～120は胴部の破片である。122・123は下胴部から底部近くまでの破片であり、文様は全面に見られる。この類の施文方向は縦方向と考えられる。

B2-a類の121は胴部破片であり、小さい菱形の斜格子目押型文をもつ一群である。

C1-a類は124～155である。長い平行四辺形をもつ斜格子目押型文をもつ一群である。124～130は胴部破片で、幅広で特に長い斜格子目押型文をもつものである。136・137は口縁部の破片である。136は口端が角張り、この平坦面に棒状器具による右下がりの圧痕列を配している。外面には口端近くまで斜格子目押型文を施し、この部分にヨコナデ調整痕が認められる。137は口端が丸く仕上げられている。内外面にヨコナデ調整を行っている。この為、口端から下方約1cmが撫で取られ無文部をもつ。131～135・138～153は平行四辺形の斜格子目押型文が施されている胴部の破片である。154・155は下胴部から底部近くにかけての破片である。いずれも文様が切れ無文になる。

C2-a類は156～173である。この類は巾が狭く、小さい平行四辺形の斜格子目押型文をもつものであり、170のみ底部近くのもので、他は胴部の破片である。文様の並び、方向が明確な斜格子目押型文をもつ156～159・163・164と、横位方向に格子目押型文を施した160～162・167～171があり、施文方向は縦方向と考えられる。また市松模様の押型文をもつ172・173がある。

D1-a類は174・175・177～179である。大きな楕円形の押型文をもつ類である。175は明らかな下胴部の破片であるが、他は全て胴部の破片である。174は特に大きな楕円押型文をもち文様がずれている。

D2-a類は180・181である。この類は小さい楕円形の押型文を施したもので、いずれも胴部破片である。

E1-a類は182である。下胴部の破片で、山の繋がった山形押型文を押捺している。施文方向は

斜位で、山の幅は2.2cm、高さは0.6cmを測る。

F-c類は183～194である。全て胴部の破片で、縦位の撚糸文が施された一群である。183は口縁部に近い破片であり、外面に撚糸文が施されている。内面の口縁部に近い位置に横位の撚糸文が2条残る。上方数cmで口縁部に至るものと思われる。184も口縁部に近いものである。185～188は撚糸文(L)が認められ、188を除き、やや太い撚糸で施文している。189～194は撚糸文(R)が認められた。189・190はやや太い撚糸で施文している。

195～198は竪穴内のピット(P1)から検出した遺物である。195はC2-a類の文様、196はD1-b類の文様、197はC1-a類の文様を持つものである。これらは胴部の破片である。198は底部付近の破片で、磨滅が著しいが菱形または長い平行四辺形の押型文の痕が薄く残る。

199～202は竪穴の埋土中から見出した遺物である。199は底部付近、200は胴部の破片である。いずれもD1-a類に属す。201はD2類の文様をもつが、磨滅が激しく文様の断面形を把握できなかった。202は底部付近の破片であり、外面にナデ痕が残り無文である。

203～214は石器である。204は片麻岩製の石錘で、全面が赤く変色している。長円形の自然石を用いて両側から打ち欠いている。このため剥離は深く進行している。平面形は分銅型を呈した小形の錘である。205はチャート製の刃器で、横長剥片の一边を切断して残った側辺を刃部としたものである。刃部には使用痕が認められる。213は泥岩製と考えられる刃器で、いずれも縦長剥片の側辺に使用痕が認められる。212は流紋岩製の縦長剥片を利用した刃器で、剥片側面に自然面の一部を残しており、剥片の側辺を縦方向に切断し片方の側辺を刃部としている。213は泥岩製と考えられる縦長剥片で、打面に自然面を残し両側辺を刃部としている。207～211・214は大型剥片で、全て横長剥片で、打点下方の辺部に使用痕が認められた。207は砂岩製で、打面に自然面を残し、片側を切断して側辺と下辺を刃部としてものである。208は泥岩製と考えられ、横長剥片の側辺を刃部としたものと考えられる。209は玄武岩製で、側辺と下辺を刃部としたものと考えられる。210は流紋岩製で、打面及び片側の側辺に自然面を残し、片側の側辺は打面部から切断している。下辺を刃部としたものと考えられる。211は安山岩製で、打面部の両側辺と下辺を刃部としたものと考えられる。214は安山岩製で、大きく挟まれた打点をもち、扁平で大きなハマグリ形を成す剥片の側辺を切断し、残った側辺と下辺を刃部としたものである。206は安山岩製の礫器と考えられるもので、扁平な自然礫の上端を打面として表裏面ともに明確な打点を残す。縦位に剥離痕が残る。側辺には使用痕が認められる。また、この石器は大型剥片の石核とも考えられる。203は竪穴内のピット(P1)から検出したチャート製の横長剥片で、腹面の左側に押圧剥離痕を残し、右側を刃部としたものである。ナイフ型石器を思わせる形状を呈するが押型文土器に伴う刃器と考えられる。

E-SB19から検出した押型文土器は畿内地方の神宮寺式土器(註10)と並行する時期と考えられ、新城市萩平遺跡(註11)と豊橋市眼鏡下池北遺跡(註12)から出土した押型文土器に類例をみる。縄文時代早期前葉に位置づけられよう。よって本竪穴もこの時期に営まれたものであろう。

第2節 土壇

E区で検出された土壇は50基である。このうち遺物が検出された土壇は、E—SK1・E—SK4～E—SK7・E—SK9・E—SK10・E—SK13・E—SK26・E—SK28・E—SK31・E—SK37の12基である。E—SK2・E—SK3・E—SK8・E—SK11・E—SK12・E—SK14～E—SK25・E—SK27・E—SK29・E—SK30・E—SK32～E—SK36・E—SK38～E—SK50の38基からは図示する遺物は検出されなかった。

1、土壇E—SK1

(1) 遺構(挿図第4・第25、図版第6の1)

土壇E—SK1は、E区西地区の竪穴住居址E—SB19の西20cmに位置する。平面形は不定形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径86cm、短径54cm、深さ20cmである。長軸はN—58°—Wである。土壇内の底面や埋土から押型文土器片や石器が検出されている。

(2) 遺物(挿図第46の215～234・第51の374)

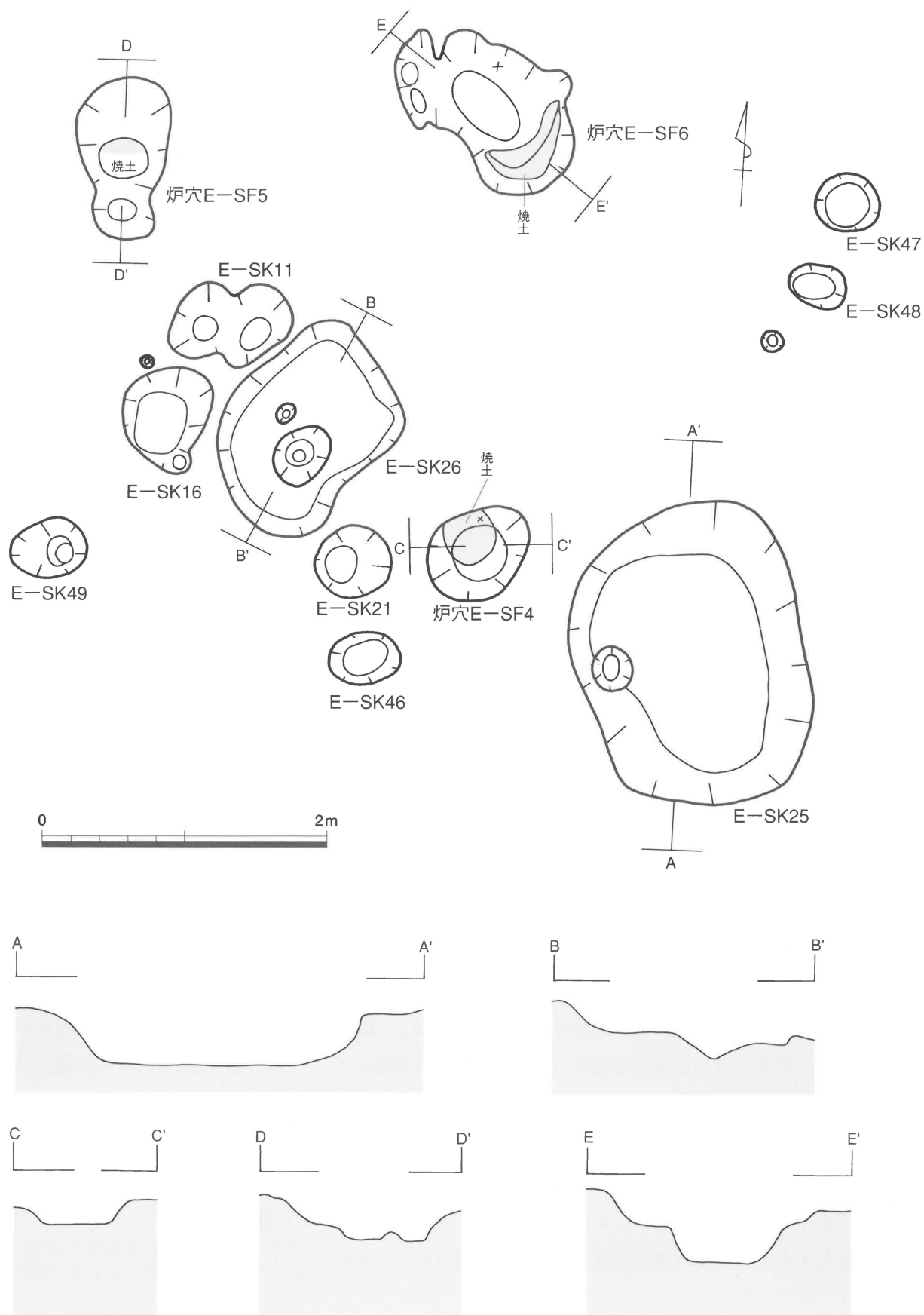
215～234・374はE—SK1の埋土中から検出した遺物である。215はA—a類に属す。文様は正方形で断面形が凹形の格子目押型文を施した胴部破片である。216はA—b類で押捺は深く、断面形が弓形の格子目押型文をもつ胴部破片である。217～219はB1—a類の一群であり、同一個体である。218は口縁部に近い上胴部の破片である。220～229はC1—a類の長い平行四辺形の斜格子目押型文土器である。220は口縁部から胴部にかけての土器である。胴部が厚く、口縁部を舌状に薄くして緩やかに外反する器形である。口縁部外面にはヨコナデ調整を行った後に、長い平行四辺形の斜格子目押型文が施されている。口端と文様の間には約1cmの無文帯をもつ。内面には横位方向に押捺されたC1—a類の斜格子目押型文が二列に施され、口縁の内面をかざる。口径は約15cmであり、小形の深鉢と考えられる。221～230は深鉢の胴部破片と考えられる。230はE1—a類の横位方向に山型押型文を施した土器である。3点の小片接合例で、やや乱れた山形文を持ち山形文の幅は1.5cm、高さは1.5cmと大柄な文様が施されている。

231～233は全て流紋岩製の剥片である。231は打面に自然礫面を残し、形状は羽状を呈し横長の剥片である。下方の側辺に使用痕が認められる刃器である。232は横長剥片の下方の側辺部に使用痕が認められる。打面には自然礫面を残し、剥片の側辺部は切断されている。233は縦長剥片の両側辺部に使用痕が認められる刃器である。234は石材不明の石器である。礫器と考えられるもので、両側辺に剥離痕を残し側辺部のほぼ全体が火気をうけ赤色化している。374も石材不明の大型石器である。風化が著しく、形状は直角三角形を成している。自然礫の表裏に剥離痕が認められる。この部分を刃部と捉えるなら礫器であろう。また剥離痕と捉えるなら石核と考えられる。

E—SK1から出土した遺物は縄文時代早期前葉のものである。

2、土壇E—SK2

(1) 遺構(挿図第3・第18、図版第6の1)



挿図第26 土坑E-SK11・E-SK16・E-SK21・E-SK25・E-SK26・
E-SK46～E-SK49、炉穴E-SF4～E-SF6実測図

土壙E—SK 2は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB 16の北壁を掘り込んで南北に位置する。平面形は楕円形に近く、断面形はU字形である。その規模は長径3.50m、短径2.24m、深さ20cmである。長軸はN—8°—Eである。

(2) 遺物 (挿図第45の235～240)

235～240はE—SK 20の埋土中から検出した遺物である。235・236は同一個体で、深鉢の胴部破片である。これらはB1—a類で菱形の文様を持ち、断面形が箱状を呈した土器である。237～239はC1—a類の文様を施した土器の胴部破片である。240はE1—a類の胴部の破片と考えられる。外面はナデ調整を行い無文である。内面は横位3条の山形押型文が施されている。山形文の幅は0.8cm、高さは0.7cmを測る。この部分の復元径は13.5cmと小型の深鉢である。

E—SK 2から出土された遺物は縄文時代早期前葉のものである。

3、土壙E—SK 3

(1) 遺構 (挿図第3・第18、図版第6の1)

土壙E—SK 3は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB 16内の南東3mに位置する。平面形は楕円形で、断面形は浅い逆台形である。その規模は長径54cm、短径28cm、深さ12cmである。長軸はN—61°—Wである。

(2) 遺物 (挿図第46の241)

241はE—SK 3の埋土中から検出された泥岩製の大型剥片を使用し片面に自然面を残している。剥片の下方には叩痕が認められる洋弓形を呈した礫器と考えられる。

241は縄文時代早期前葉の石器と考えられる。

4、土壙E—SK 4

(1) 遺構 (挿図第3・第18、図版第6の1)

土壙E—SK 4は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB 16内に位置する。平面形は倒卵形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径44cm、短径36cm、深さ13cmである。長軸はN—4°—Wである。

5、土壙E—SK 5

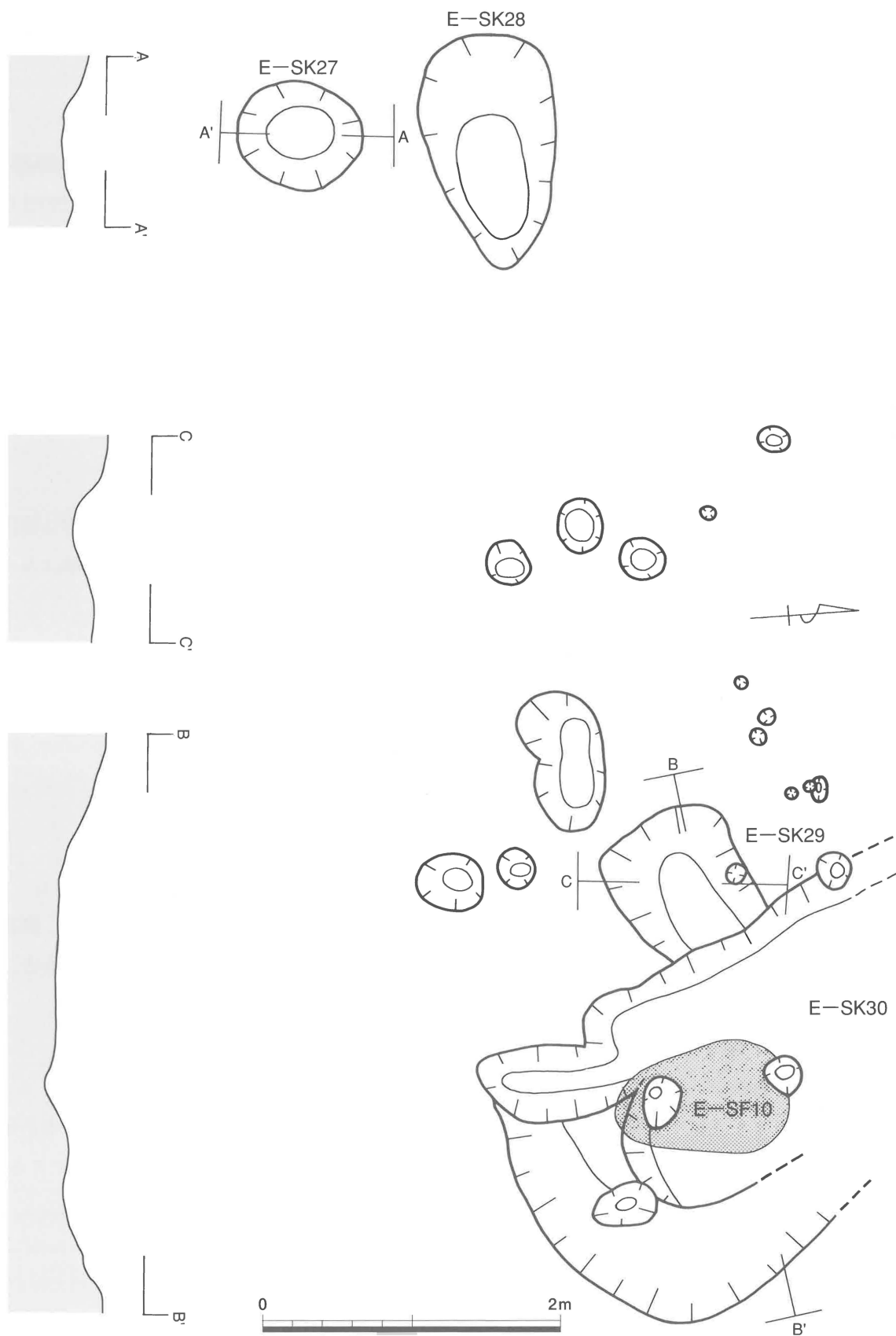
(1) 遺構 (挿図第3・第18、図版第6の1)

土壙E—SK 5は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB 16の西壁を掘り込んで構築されている。平面形は不定形、断面形は鍋底形で長径95cm、短径74cm、深さ18cmである。長軸はN—80°—Wである。

6、土壙E—SK 6

(1) 遺構 (挿図第3、図版第6の1)

土壙E—SK 6は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB 16の西壁20cmの所に位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径46cm、短径45cm、深さ23cmである。長軸はN—18°—Eである。



挿図第27 土坑E-SK27～E-SK30、炉穴E-SF10実測図

7、土壇E—SK 7

(1) 遺構(挿図第3・第18、図版第6の1)

土壇E—SK 7は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB16内に位置する。平面形は長楕円形で、断面形は浅いU字形である。その規模は長径64cm、短径27cm、深さ13cmである。長軸はN—82°—Wである。

8、土壇E—SK 8

(1) 遺構(挿図第3・第18)

土壇E—SK 8は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB16の北壁を掘り込んで構築された土壇E—SK 2内に所在する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。その規模は長径78cm、短径62cm、深さ38cmである。長軸はN—59°—Wである。

(2) 遺物(挿図第41の88・89)

88は塩基性岩の石斧である。体部の下半部が残る。定角石斧の形状をもち、風化がすすんでいるが全面に研磨痕が認められる。刃部は直刃で、断面形は片刃である。89は凝灰岩製の石皿である。板状の礫を使用したもので、上面に浅く窪む機能面をもつ。

88の石斧は、その形状・製作痕の状況から縄文時代早期から前期にかけての所産と考えられる。また89の石皿も同時代とされよう。

9、土壇E—SK 9

(1) 遺構(挿図第3・第19)

土壇E—SK 9は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB17の南壁寄りに構築されている。平面形は楕円形で、断面形は浅いU字形である。その規模は長径81cm、短径51cm、深さ9cmである。長軸はN—11°—Eである。

10、土壇E—SK 10

(1) 遺構(挿図第3・第19)

土壇E—SK 10は、E区中央地区の竪穴住居址E—SB17内の南西コーナー寄りに構築されている。平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径50cm、短径46cm、深さ23cmである。長軸はN—20°—Eである。

11、土壇E—SK 11

(1) 遺構(挿図第4・第26・第26)

土壇E—SK 11は、E区西地区の竪穴住居址E—SB19の東2 mに位置する。平面形は、瓢箪形で、断面形は2つの鍋底をつなげた形をしている。長径は82cmで、短径は40cmで深さは西側が34cm、東側が32cmである。長軸はN—86°—Wである。

12、土壙E—S K12

(1) 遺構 (挿図第3)

土壙E—S K12は、E区中央地区の竪穴住居址E—S B16とE—S B17の間に所在する。平面形は楕円形で、断面形は浅いU字形である。その規模は長径62cm、短径40cm、深さ11cmである。長軸はN-7°-Eである。

13、土壙E—S K13

(1) 遺構 (挿図第3)

土壙E—S K13は、E区中央地区の竪穴住居址E—S B16とE—S B17の間に所在する。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径47cm、短径36cm、深さ9cmである。長軸はN-80°-Eである。

14、土壙E—S K14

(1) 遺構 (挿図第3・第19、図版第6の2)

土壙E—S K14は、E区中央地区の竪穴住居址E—S B17内の南東に所在する。北側にある土壙E—S K15を掘り込んで構築されている。そのことから、土壙E—S K14はE—S K15より新しいと考えられる。平面形は不定形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径168cm、短径158cm、深さ34cmである。長軸はN-7°-Eである。

15、土壙E—S K15

(1) 遺構 (挿図第3・第19、図版第6の2)

土壙E—S K15は、E区中央地区の竪穴住居址E—S B17内に所在し、土壙の北側部分は竪穴住居址E—S B17に切られている。平面形は長方形で、断面形は逆台形である。その規模は長径134cm、短径110cm、深さ42cmである。長軸はN-8°-Eである。

(2) 遺物 (挿図第41の91)

91は壺の上胴部の破片である。外面にハケメ調整を施した後にクシ状器具による薄い横線文を配し、その下にヘラ状器具による刺突文を巡らしている。文様部には赤彩が認められる。

検出した遺物は古墳時代前期の古式土師器である。

16、土壙E—S K16

(1) 遺構 (挿図第4・第26・第26、図版第6の1)

土壙E—S K16は、E区西地区の竪穴住居址E—S B19の東50cmに位置する。平面形は楕円形で、断面形は浅いU字形である。その規模は長径68cm、短径58cm、深さ16cmである。長軸はN-57°-Eである。

17、土壇E—S K 17

(1) 遺構 (挿図第3・第20)

土壇E—S K 17は、E区中央地区の竪穴住居址E—S B 18の床面中央に所在する。竪穴住居址E—S B 18の柱穴P 8 (42×24×18) に掘り込まれている。平面形は不定形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径66cm、短径29cm、深さ11cmである。長軸はN—83°—Wである。

18、土壇E—S K 18

(1) 遺構 (挿図第3・第20)

土壇E—S K 18はE区中央地区の竪穴住居址E—S B 18内に所在する。土壇の西側は竪穴住居址E—S B 18の柱穴P 15に掘り込まれている。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径54cm、短径46cm、深さ24cmである。長軸はN—0°—Wで真北にあたる。

19、土壇E—S K 19

(1) 遺構 (挿図第3・第20)

土壇E—S K 19はE区中央地区の竪穴住居址E—S B 18内に所在する。土壇の西側は竪穴住居址E—S B 18の柱穴P 6に掘り込まれている。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。その規模は長径70cm、短径46cm、深さ12cmである。長軸はN—9°—Wである。

20、土壇E—S K 20

(1) 遺構 (挿図第4・第21・第25)

土壇E—S K 20はE区西地区の竪穴住居址E—S B 19の南東側の壁を掘り込んで所在する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。その規模は長径55cm、短径45cm、深さ32cmである。長軸はN—48°—Wである。

(2) 遺物 (挿図第46の243～246)

E区の西部から検出されたE—S K 20の埋土中から見出した。242～245は全てC 1—a 類の平行四辺形をもつ斜格子目押型文土器の胴部破片である。246は深鉢の口縁部に近い破片と考えられる。器体にB 1—a 類の菱形をなす斜格子目押型文、C 1—a 類の長い平行四辺形をもつ斜格子目押型文、D 1—a 類の大きな楕円形の文様が混在して認められる。

E—S K 20から出土した遺物は縄文時代早期前葉のものである。

20、土壇E—S K 21

(1) 遺構 (挿図第4・第21・第26)

土壇E—S K 21はE区西地区の竪穴住居址E—S B 19の東4.0mに位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径53cm、短径53cm、深さ42cmである。長軸はN—87°—Wである。

21、土壙E—S K 22

(1) 遺構 (挿図第3、図版第4・第5の1)

土壙E—S K 22はE区中央地区にある竪穴住居址E—S B 14とE—S B 15の間に所在する。平面形は三角形に近いおにぎり形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径150cm、短径90cmである。長軸はN—48°—Wである。

22、土壙E—S K 23

(1) 遺構 (挿図第3、図版第4の1・第5の1)

土壙E—S K 23はE区中央地区にある竪穴住居址E—S B 14とE—S B 15の間に所在する。平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径110cm、短径100cmである。長軸はN—112°—Eである。

23、土壙E—S K 24

(1) 遺構 (挿図第3、図版第4の1・第5の1)

土壙E—S K 24はE区中央地区にある竪穴住居址E—S B 14の南東2.10mに位置する。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径70cm、短径54cm、深さ60cmである。長軸はN—56°—Wである。

24、土壙E—S K 25

(1) 遺構 (挿図第4・第21・第26)

土壙E—S K 25はE区西地区にある竪穴住居址E—S B 19の東端から4.50m東に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。その規模は長径205cm、短径140cm、深さ25cmである。長軸はN—19°—Wである。

25、土壙E—S K 26

(1) 遺構 (挿図第4・第21・第26)

土壙E—S K 26はE区西地区にある竪穴住居址E—S B 19の東端から1.50m東に位置する。平面形は楕円形に近い形で、断面形は浅いU字形である。その規模は長径130cm、短径95cm、深さ10cmである。長軸はN—40°—Eである。

26、土壙E—S K 27

(1) 遺構 (挿図第4・第21・第27)

土壙E—S K 27はE区西地区にある竪穴住居址E—S B 19の東端から6.50m東北東に位置する。平面形は楕円形で、断面形はU字形である。その規模は長径85cm、短径72cm、深さ15cmである。長軸はN—0°—Eでほぼ真北である。

27、土壙E—S K 28

(1) 遺構 (挿図第4・第21・第27)

土壙E—S K 28はE区西地区にある竪穴住居址E—S B 19の東端から7.00m北東に位置する。平面形は紡錘形で、断面形は浅いU字形である。その規模は長径164cm、短径80cmである。長軸はN—82°—Eである。

(2) 遺物 (挿図第52の385)

385は壺の底部である。平底の底面をもつ破片であり、内外面とも磨滅している。検出された遺物は古式土師器である。

28、土壙E—S K 29

(1) 遺構 (挿図第4・第21・第27)

土壙E—S K 29はE区西地区にある竪穴住居址E—S B 19の東端から南南東13.50mに位置する。土壙の東側は、土壙E—S K 30に掘り込まれている。平面形はほぼ四角形で、断面形は鍋底形である。現状での規模は長径96cm、短径86cm、深さ20cmである。長軸はN—64°—Eである。

29、土壙E—S K 30

(1) 遺構 (挿図第4・第21・第27)

土壙E—S K 30はE区西地区にある竪穴住居址E—S B 19の東端から南南東15.0mに位置する。土壙の北側は段丘の縁端部にあたり、滅失していた。平面形は四角形で、断面形は逆台形である。規模は長径310cm、短径210cm、深さ34cmである。土壙の長軸はN—33°—Wである。なお、土壙の底面から焼土が検出された。その範囲は長軸120cm、短軸74cmである。炉穴の一種と考えられる。

30、土壙E—S K 31

(1) 遺構 (挿図第3・第13)

土壙E—S K 31はE区中央地区にある竪穴住居址E—S B 11の南東隅の壁を掘り込んで位置する。平面形は楕円形で、断面形は擂鉢形である。規模は長径88cm、短径62cm、深さ50cmである。長軸はN—132°—Eである。

31、土壙E—S K 32

(1) 遺構 (挿図第2・第7)

土壙E—S K 32はE区東地区にある竪穴住居址E—S B 3内の北東壁に接して所在する。平面形は楕円形に近い形で、断面形は浅いU字形である。規模は長径94cm、短径82cmである。長軸はN—52°—Wである。

32、土壙E—S K 33

(1) 遺構 (挿図第2・第6)

土壙E—SK33はE区東地区にある竪穴住居址E—SB2内に所在する。平面形は楕円形で、断面形は浅いU字形である。規模は長径104cm、短径64cmである。長軸はN—81°—Wである。

33、土壙E—SK34

(1) 遺構(挿図第2・第10)

土壙E—SK34はE区東地区にある竪穴住居址E—SB7内に所在する。平面形は人の足形をしており、断面形は緩やかなU字形である。規模は長径128cm、短径70cm、深さ12cmである。長軸はN—78°—Eである。

34、土壙E—SK35

(1) 遺構(挿図第2・第9)

土壙E—SK35はE区東地区にある竪穴住居址E—SB6の南東隅の壁を外から掘り込んで作られている。平面形はほぼ円形で、断面形は逆台形である。規模は長径69cm、短径66cm、深さ10cmである。長軸はN—14°—Eである。

36、土壙E—SK36

(1) 遺構(挿図第2・第8)

土壙E—SK36はE区東地区にある竪穴住居址E—SB3とE—SB9の両遺構を掘り込んで設けられている。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。規模は長径86cm、短径51cm、深さ17cmである。長軸はN—84°—Wである。

37、土壙E—SK37

(1) 遺構(挿図第2・第11)

土壙E—SK37はE区東地区にある竪穴住居址E—SB8の東壁と南壁の一部を掘り込んで設けられている。平面形は隅円長方形で、断面形は逆台形である。規模は長径208cm、短径66cm、深さ28cmである。長軸はN—51°—Eである。

(2) 遺物(挿図第52の386)

386は須恵器の無蓋高坏の坏部の縁部破片である。体部は丸みを帯び、口端で外反する。口縁部の外面に一条の沈線が巡る。386は古墳時代後期の第4型式の時期にあたる須恵器である。

38、土壙E—SK38

(1) 遺構(挿図第2・第11)

土壙E—SK38はE区東地区にある竪穴住居址E—SB8の南西隅に位置する。平面形は不定形で、断面形は逆台形である。規模は長径115cm、短径は上部が72cmで下部が90cmである。長軸はN—20°—Eである。

39、土壙E—S K 39

(1) 遺構 (挿図第2・第28)

土壙E—S K 39はE区東地区にある方形周溝墓E—S Z 1の台状部に所在する。平面形は楕円形で、断面形はU字形である。規模は長径55cm、短径41cm、深さ13cmである。長軸はN—20°—Eである。

40、土壙E—S K 40

(1) 遺構 (挿図第2・第28)

土壙E—S K 40はE区東地区にある方形周溝墓E—S Z 1の台状部の中央に位置する。土壙E—S K 40は南北に長軸をもつが、南の一部は土壙E—S K 41に切られている。平面形は長楕円形で、断面形は浅いU字形である。規模は現状では長径176cm、短径64cm、深さ4cmである。長軸はN—11°—Eである。

41、土壙E—S K 41

(1) 遺構 (挿図第2・第28)

土壙E—S K 41はE区東地区にある方形周溝墓E—S Z 1の南側に位置する。台状部にある土壙E—S K 40を切り、台状部と周溝の両方を挟み込んでつくられている。平面形は長楕円形で、断面形は浅いU字形である。規模は長径152cm、短径48cm、深さ8cmである。長軸はN—2°—Eである。

42、土壙E—S K 42

(1) 遺構 (挿図第2・第28)

土壙E—S K 42はE区東地区にある方形周溝墓E—S Z 1の台状部に位置する。平面形はだるま形で、断面形は逆台形である。規模は長径85cm、短径は上部が40cm、下部が58cm、深さ4cmである。長軸はN—15°—Wである。

43、土壙E—S K 43

(1) 遺構 (挿図第2・第29)

土壙E—S K 43はE区東地区北西の近世土壙墓群内に位置する。土壙の一部は近世土壙墓E—S Z 24に掘り込まれている。平面形は楕円形で、断面形はU字形である。規模は長径72cm、短径42cm、深さ25cmである。長軸はN—47°—Wである。

44、土壙E—S K 44

(1) 遺構 (挿図第2・第8)

土壙E—S K 44はE区東地区にある竪穴住居址E—S B 5とE—S B 9の2つの遺構に跨ってつくられている。平面形は長四角形で、断面形は逆台形である。規模は長径156cm、短径50cm、深さ26cmである。長軸はN—8°—Wである。

45、土壙E—S K 45

(1) 遺構(挿図第2)

土壙E—S K 45はE区東地区にある方形周溝墓E—S Z 1の南周溝より80cm南に位置する。平面形は楕円形で、断面形はU字形である。規模は長径130cm、短径80cmである。長軸はN—87°—Eである。

46、土壙E—S K 46

(1) 遺構(挿図第4・第21、第26)

土壙E—S K 46はE区西地区の竪穴住居址E—S B 19の東南東3 mに位置する。平面形は楕円形で、断面形はU字形であろうが南壁は攪乱されている。その規模は長径48cm、短径42cm、深さ33cmである。主軸方位はN—68°—Eである。

(2) 遺物(挿図第46の242)

E区の中央部に位置するE—S K 46の埋土中から検出された242はB—a類の菱形の斜格子目押型文を持つ深鉢の胴部破片である。

E—S K 46ピット内から出土された土器は縄文時代早期前葉のものである。

47、土壙E—S K 47

(1) 遺構(挿図第4・第21・第26)

土壙E—S K 47は、E区西地区の竪穴住居址E—S B 19の東北東5.50 mに位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。その規模は長径44cm、短径37cm、深さ9 cmである。長軸はN—71°—Eである。

48、土壙E—S K 48

(1) 遺構(挿図第4・第21・第26)

土壙E—S K 48はE区西地区の竪穴住居址E—S B 19の東北東5 mに位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。その規模は長径40cm、短径28cm、深さ10cmである。長軸はN—72°—Wである。

49、土壙E—S K 49

(1) 遺構(挿図第4・第21・第26)

土壙E—S K 49はE区西地区の竪穴住居址E—S B 19の東20cmに位置する。平面形は楕円形で、断面形はU字形である。その規模は長径54cm、短径40cmである。長軸はN—76°—Eである。

50、土壙E—S K 50

(1) 遺構(挿図第2・第10)

土壙E—S K 50はE区東地区にある竪穴住居址E—S B 7の北西隅に所在する。平面形は人の足形

をしており、断面形は逆台形である。その規模は長径154cm、短径100cm、深さ16cmである。長軸はN-90°-Wである。

第3節 方形周溝墓

E区から検出された方形周溝墓は1基である。C区とE区との間、D区とE区との間に仮設道路が付設されたが、その仮設道路部分は未調査のままである。浪ノ上1号墳南に所在する正円寺墓地の改葬作業については調査員の立会いのもとに行われたが、遺構は検出されなかった。そのことから、浪ノ上1号墳の南東側で検出されたE区の方形周溝墓は1基のみである。従って、浪ノ上遺跡で検出された方形周溝墓は、A区の5基と、三菱レイヨン株式会社送還水管施設移設工事に伴う発掘調査（註13）で検出された2基とE区の1基の合計8基である。E区の1基のみは独立しているが、他の7基はまとめてA区とA区の南側で検出されている。7基は浪ノ上1号墳から東へおよそ140～160mの範囲に所在しているのに対して、方形周溝墓E-SZ1は浪ノ上1号墳から南東へ35mの所に所在する。

1、方形周溝墓E-SZ1

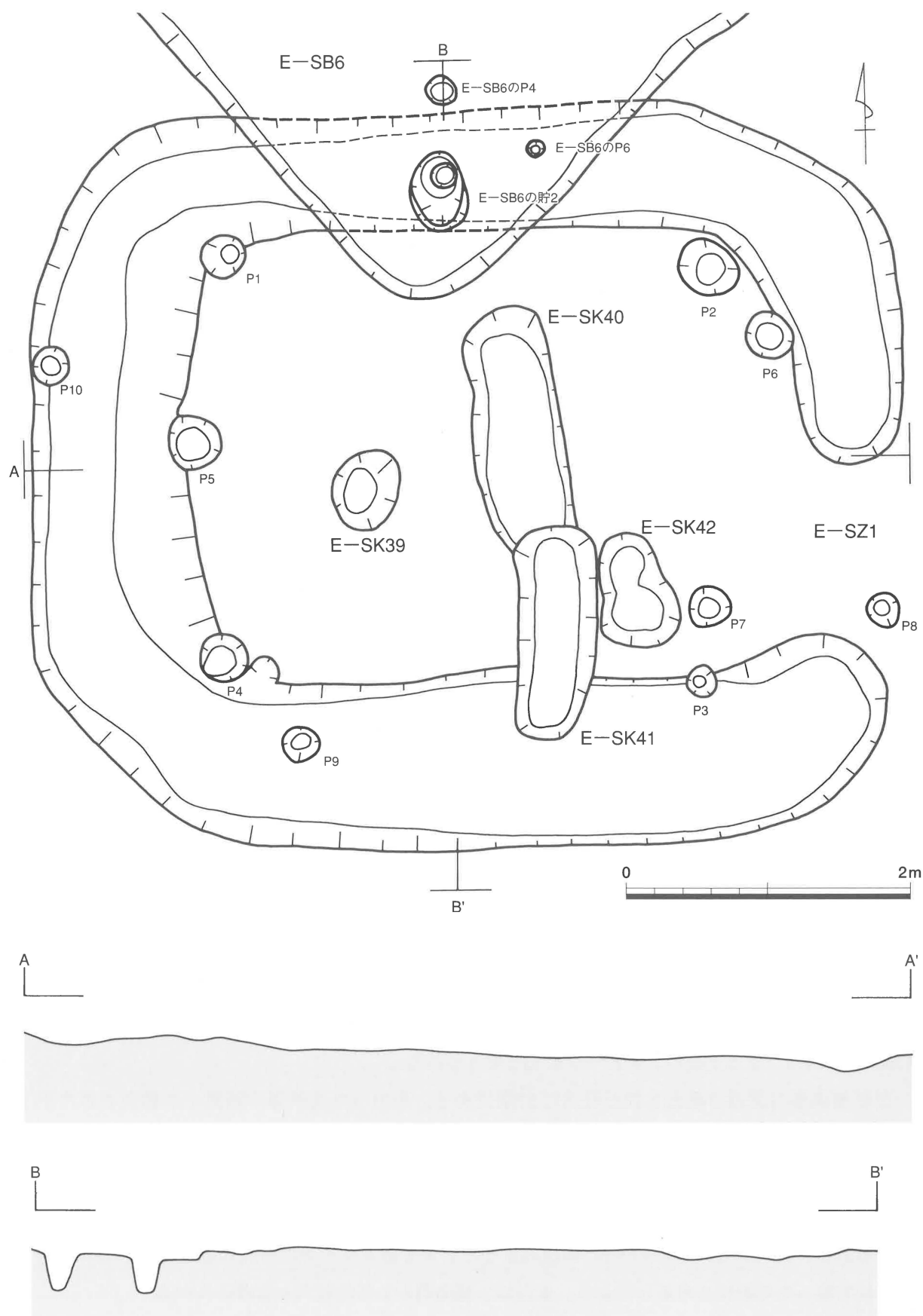
（1）遺構（挿図第1・第2・第28、図版第1・第3の2）

方形周溝墓E-SZ1はE区東地区の東側に位置する。方形周溝墓の北周溝は竪穴住居址E-SB6に切られている。西周溝は竪穴住居址E-SB8の東壁と接している。削平面から周溝の底面までの深さは5cm～10cmと浅くなっている。方形周溝墓A-SZ1の周溝の深さが34cm～42cm、A-SZ2の周溝の深さが20cm～30cmであることから、少なくとも台状部は、30cm以上削平されているものと考えられる。周溝の長さは周溝の中心部で計測すると北側周溝が4.34m、南周溝が4.30m、東周溝が2.00m、西周溝が3.70mである。台状部の四隅に位置する柱穴P1～P4の長さはP1～P2が3.40m、P2～P3が1.90m、P3～P4が2.40m、P4～P1が1.90mと向かい合った長さは同じで、4つの線を結ぶと長方形になる。周溝の陸橋部は東側にあり、その長さは南東隅から1.20mである。

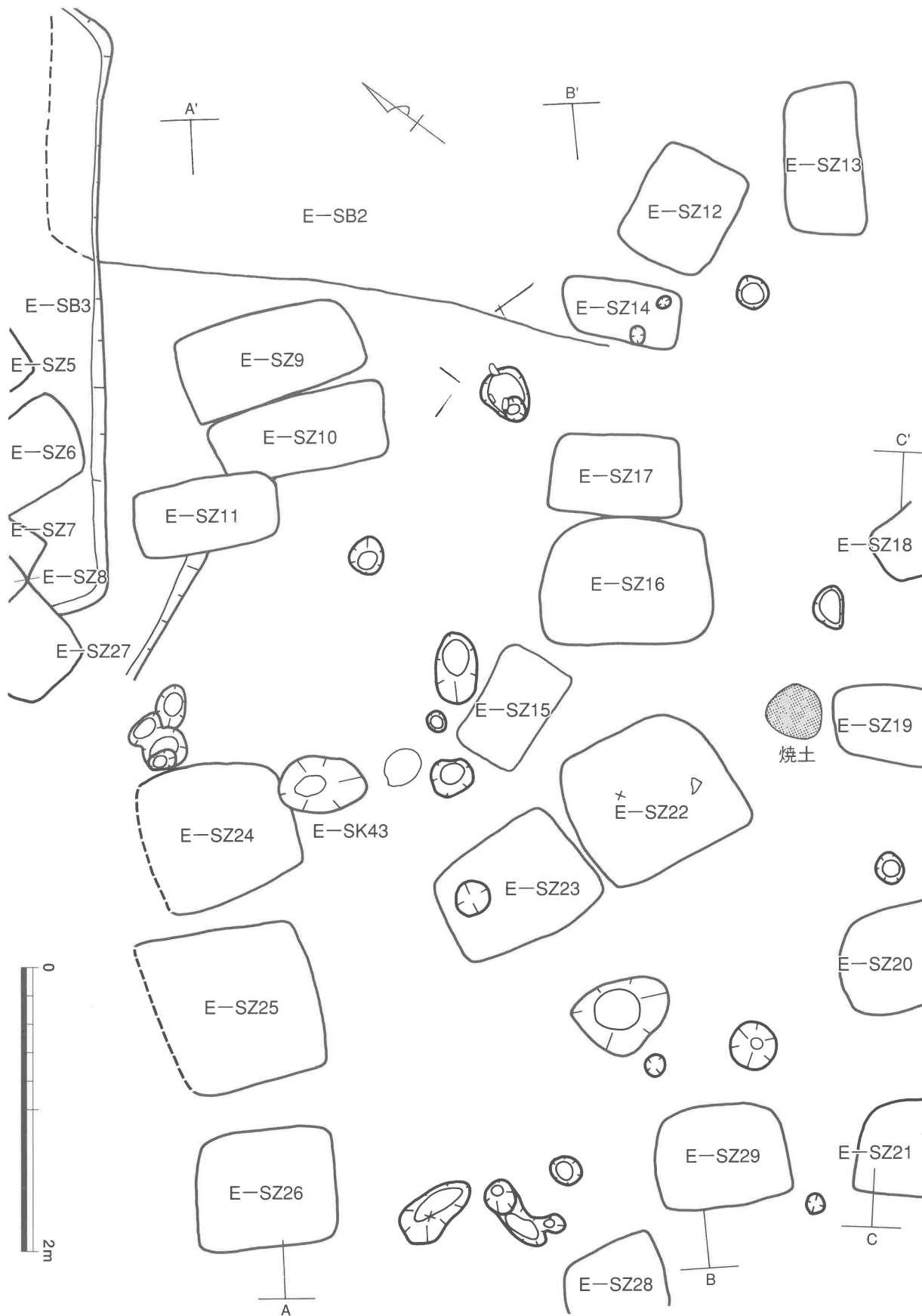
台状部には土壌E-SK39、E-SK40、E-SK41、E-SK42の4基が所在している。そのうち、位置や大きさからこの方形周溝墓の主体部は台状部の中央を占めており、南北に長軸を持つ長さ176cm、幅64cm、深さ4cmの土壌E-SK40と考えられる。

方形周溝墓の周辺で検出された柱穴は13個である。そのうち台状部の四隅から検出されたP1（33×30×36）、P2（44×41×28）、P3（20×19×20）、P4（35×32×30）の4個は、台状部が30cm以上削平されたものと想定すると柱穴は40～50cmの深さとなる。柱穴の大きさ、深さがそろっておりしっかりしていることから主体部の土壌E-SK40を覆う構築物の残屋として利用されたものと考えられる。柱穴P5（35×30×9）は柱穴P3とP4を結ぶラインの中央に位置していることから5本柱であった可能性も考えられよう。または、補助用としての柱穴とも考えられる。

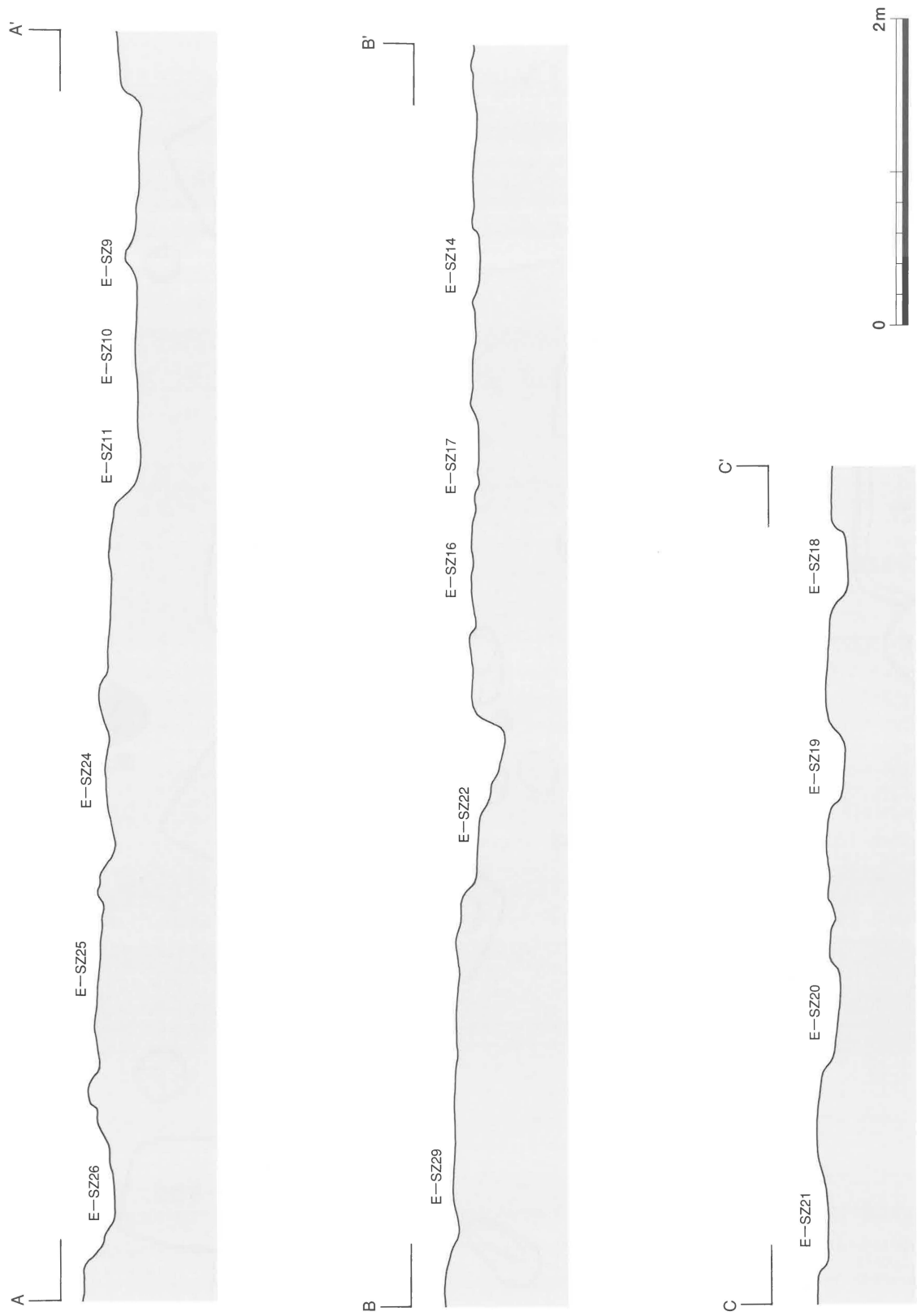
方形周溝墓のコーナーは、北西隅、北東隅、南東隅は隅円である。柱穴P1とP3を結んだ対角線と方形周溝墓の周溝の外周との交点を中心として、対角線の長さの半分を半径とした円を描くと、南



挿図第28 方形周溝墓E-SZ1、土壇E-SK39～E-SK42実測図



挿図第29 土壌E-SK43、近世土壌墓E-SZ5～E-SZ29平面図



挿図第30 近世土壌墓 E-SZ9~E-SZ11・E-SZ14・E-SZ16~E-SZ22・
E-SZ24~E-SZ26・E-SZ29断面図

表第5 E区 近世土壌墓法量一覧表

(単位 cm)

土壌墓番号	長径	短径	深さ	主軸方位	備考
E-S Z 2	82	64	—	N-19° —W	
E-S Z 3	106	84	—	N-72° —W	
E-S Z 4	82	54	—	N-49° —W	人骨 古式土師器甕
E-S Z 5	104	64	—	N-74° —W	須恵器坏蓋
E-S Z 6	116	64	—	N-75° —W	高坏の坏部片
E-S Z 7	80	70	—	N-22° —E	煙管
E-S Z 8	80	46	—	N-76° —W	
E-S Z 9	128	50	34	N-49° —W	かわらけ
E-S Z 10	124	55	34	N-52° —W	深鉢
E-S Z 11	80	46	36	N-76° —W	
E-S Z 12	82	70	—	N-82° —E	
E-S Z 13	107	53	—	N-48° —E	
E-S Z 14	82	42	24	N-27° —W	
E-S Z 15	76	48	—	N-90° —W	
E-S Z 16	120	88	20	N-38° —W	人骨
E-S Z 17	(80)	55	24	N-29° —W	
E-S Z 18	(50)	48	20	N-68° —W	

土壌墓番号	長径	短径	深さ	主軸方位	備考
E-S Z 19	(94)	56	18	N-29° —W	
E-S Z 20	(73)	70	14	N-52° —W	押型文土器深鉢
E-S Z 21	(80)	56	18	N-29° —W	
E-S Z 22	112	104	42	N-65° —W	寛永通寶 6文銭
E-S Z 23	104	80	—	N-12° —W	
E-S Z 24	(110)	100	20	N-52° —W	
E-S Z 25	(110)	110	16	N-51° —W	
E-S Z 26	160	84	24	N-40° —W	かわらけ
E-S Z 27	(74)	70	—	N-5° —E	人骨壺
E-S Z 28	96	68	—	N-38° —E	古式土師器
E-S Z 29	92	70	6	N-45° —W	
E-S Z 30	96	68	—	N-38° —E	人骨
E-S Z 31	98	82	—	N-34° —E	かわらけ
E-S Z 32	120	74	44	N-24° —E	人の歯
E-S Z 33	106	80	14	N-45° —E	古銭
E-S Z 34	(52)	50	—	N-52° —W	

西隅は土壌E-S K 37によって掘り込まれたため、20cmほど短くなっているが、他のコーナーは円周上にある。

(2) 遺物

確認されなかった。

第4節 近世土壌墓

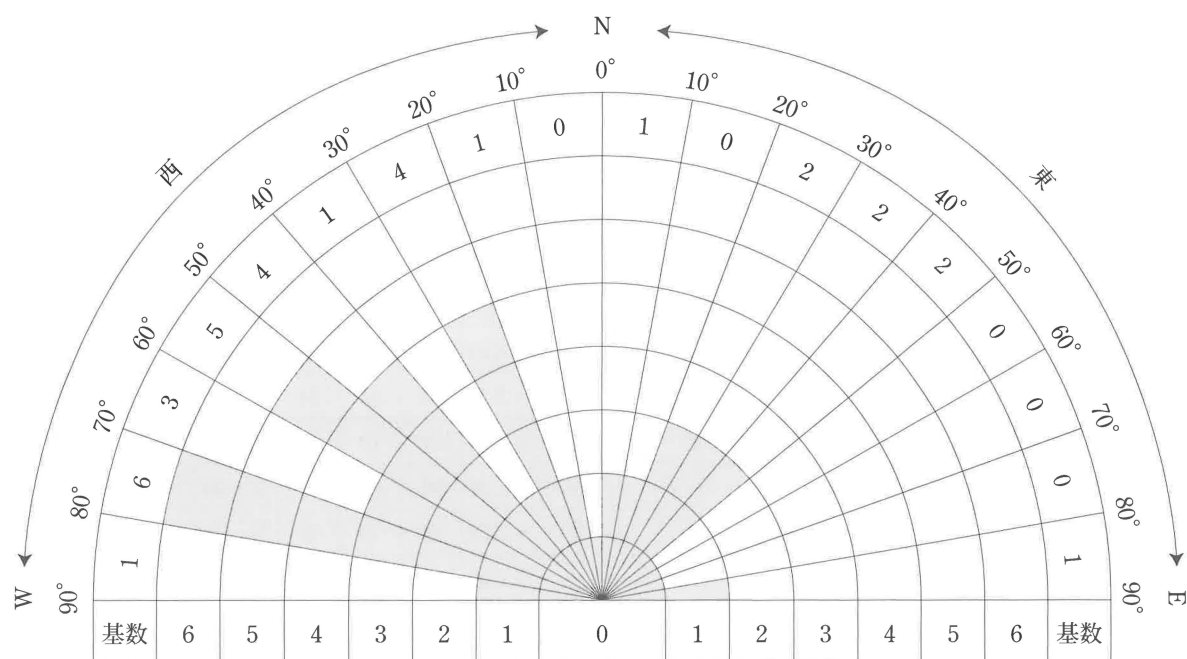
E区には牛川町内に所在する瑠璃山正円寺の墓地が現存していた。墓域内には六地藏が祀られ、棺台も設けられていた。正円寺は天正年間(1573～1592)に戸田宗光の後裔戸田種長が堂宇を再興して正円寺と改めたという。慶長6(1601)年の伊奈忠次の黒印状に寺領2石とある。

墓地について、当時正円寺住職であった金仙宗樹氏から先代らの話として「現在の墓地は明治の始め頃この地に決まった」とのことである。この墓地は昭和57年2月2日と3日に改葬された。

墓域範囲に土壌墓だけでなくその他の遺構の存在の可能性も考えられたので、調査員立会いのもとで作業は進められた。表土を削平したところ、66基(註4)の土壌墓が検出された。遺構は土壌墓のみで、その他の遺構は検出されなかった。すべて集骨され、改葬作業は終了した。

ところが、正円寺の墓域以外の所から33基の土壌墓が検出された。そのうち人の骨や歯が確認できたのはE-S Z 4・E-S Z 13・E-S Z 16・E-S Z 27・E-S Z 30・E-S Z 32の6基と出

表第6 E区 近世土壌墓長軸方位集計表



土地点不明の6体の12体であった。検出された人骨は現在大阪市立大学大学院に委託されている。副葬品としてはE-S Z 7の煙管、E-S Z 9・E-S Z 26 (図なし)・E-S Z 31のかわらけ、E-S Z 22の6枚の寛永通寶、E-S Z 33 (図なし)の寛永通寶がある。土壌墓は副葬品や正円寺の歴史から近世土壌墓と推測される。近世土壌墓の法量は表第5 E区近世土壌墓法量一覧表の通りである

(1) 遺構

近世土壌墓33基は平面形が長方形かほぼ長方形である。それぞれの近世土壌墓は長径で最も長いのがE-S Z 9の128cmである。最も短いのがE-S Z 15の76cmである。

長径が100cm以上が12基、100cm未満は13基で、平均は99cmである。長径の違いが、性差によるものか年齢差によるものかは今のところ判別できていない。

次に、近世土壌墓に埋葬されている人骨の方位については埋葬されている頭の向きが関係するが、未実測のため土壌墓の長軸方位を手がかりにした。長軸の方位は長径の中軸線の方位で表した。近世土壌墓33基とも長軸方位を割り出すことができた。それが表第5の近世土壌墓長軸方位集計表である。

これによると西向きは25基で全体の75.8%、東向きは8基で24.2%である。西向きについては、N-20°-WからN-80°-Wで23基全体の69.7%を占め、西向き志向が見られる。これは西方浄土思想が色濃く残っているのではなかろうか。

(2) 遺物

ア E-S Z 4 (挿図第52の375・376)

375・376はいずれもS K 4の埋土中から検出された遺物である。375は甕の口縁部破片である。短く厚手の口縁部を外反させている。外面はヨコナデ調整を施し、内面は磨滅しているが外反部に稜をもつ。口端は丸みをもたせ仕上げている。376はS字甕の口縁部破片である。短く直立して屈曲する頸部をもち、口端は外反させ丸く仕上げている。

E-S Z 4 から検出した375は平安時代の土師器で、376は古墳時代前期の王江式土器である。

イ E-S Z 5 (挿図第52の377)

377は須恵器の坏蓋である。鈕及び口縁部を欠損した体部である。外面にはへう削り痕とロクロ目痕が残る。

検出された遺物は奈良朝須恵器の坏蓋である。

ウ E-S Z 6 (挿図第52の378)

378は高坏の坏部の破片である。外面に稜をもつもので、口縁部は大きく外反している。口縁部は薄く仕上げ、口端に丸みをもつ。E-S B 17から検出した93・97と同様の形状を示し、筒状の脚を持つものであろう。

検出された遺物は青山式土器である。

エ E-S Z 7 (挿図第52の393)

393は羅字煙管である。雁首、羅字、吸い口に分かれて出土した。全て同一製品と考えられる。雁首は銅製である。胴と雁首の合わせ部にはロウ付けの痕が残る。火皿は丸みのある碗形を呈している。胴部の腹面には敲击痕が見られ凹んでいる。雁首と吸い口の内部には、竹製の羅字が残っていた。また吸い口側の羅字には、嵌めこみの為に削り細めた痕が認められる。吸い口には、やや膨らみをもつヤニドメ（イボ）が認められる。

検出された遺物は近世の埋葬に関わる副葬品と考えられる。

オ E-S Z 9 (挿図第52の379)

379は、かわらけである。外面に指痕が残り、内面にイタ状器具によるナデ痕が認められる。

検出された遺物は近世ものと考えられる。

カ E-S Z 10 (挿図第52の380)

380は深鉢の口縁部の破片である。口縁部は大きく外反する。口端を上下に拡張して平坦部を作る。平坦面には二枚貝の腹縁による押し引き状のキザミ目を配している。外面は目の粗い条痕を残し、内面にはヨコナデ調整痕が認められる。

検出された遺物は条痕文系の水神平式土器である。

キ E-S Z 13 (挿図第52の381)

381は壺の底部破片である。平底で底面に凹みがある。外面にハケメ調整痕が残り、内面にはナデ調整痕が残る。

検出された遺物は古式土師器と考えられる。

ク E-S Z 22 (挿図第52の387～392)

387～392は全て銅製の「寛永通寶」である。387は古寛永通寶であり、他は全て新寛永通寶である。古銭は、所謂「三途の川の渡し賃」としての六文銭で、江戸時代中期から後期にかけて鑄造されたものである。

ケ E-S Z 26 (挿図第52の382)

382は底部を欠く、かわらけの破片である。口縁部がやや内向する丸みのある体部をもつ。外面にはナデ調整痕を残し、内面には指痕とナデ痕が認められる。

検出された遺物は近世のものと考えられる。

コ E—S Z 27 (挿図第52の383)

383は厚手で大形の壺の下胴部破片である。内外面にはナデ調整痕が認められる。また外面に赤彩が認められる。

サ E—S Z 31 (挿図第52の384)

384はかわらけである。内外面に指痕とナデ痕が残る。

検出された遺物は近世のものと考えられる。

第5節 ピット群

ピット群はE区西地区にある竪穴住居址E—S B 19の南東6 m～21 mの範囲に認められた。地山面まで掘りあげた後25 cm間隔で等高線測量をし、西地区の地形図を作製したのが、挿図第21である。測量の結果、台地の縁端部は等高線が密になり尾根状を呈した高まりを見せている。この尾根状をした高まりの南側が緩やかな傾斜をして低くなり谷状地形を呈する。この谷状地形に設けられた竪穴住居址E—S B 19と尾根とは約1 mほどの比高差が認められた。この谷状地形は東から西に向かって緩やかに下り「かにあらゐの沢」に向かっている。ピット群は標高の高い尾根からやや低くなった緩やかな斜面上に設けられている。このピット群では78個のピットが検出されている。ピットの長径と短径、深さは「表第7 ピット群法量一覧表」の通りである。

(1) 遺構

ピット群の中で、ピットP 51・P 53・P 65・P 66・P 71・P 60・P 55で囲まれた範囲は黒色有機土の広がり認められた。平面形は楕円形で、長径3 m、短径2.5 mである。掘立柱建物の床面ではなかろうか。

P 36・P 38・P 39・P 70・P 37・P 71・P 61・P 56・P 49で囲まれた範囲は、ピットの並びから考えると掘立柱の建造物が想定される。その範囲は長径3.50 m、短径2.80 mの楕円形を呈している。いずれにせよ、ピット群は何らかの意図で造られた建造物の痕跡ではなかろうか。

(2) 遺物 (挿図第47の247・248)

E区のピット群中の埋土から見出された遺物である。247は扁平で長いチャートの自然礫の側辺を剥離して、その側辺にフレーキング痕を残す。削器と考えられる。

248は横長剥片の側辺に使用痕が残る。チャート製の刃器である。

ピット群中から出土した石器は縄文早期前葉の押型文土器に伴う遺物と考えられる。

表第7 E区 ピット群法量一覧表

(単位 cm)

番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考
1	10	9	3		27	34	30	34		53	22	16	13	
2	25	25	13		28	24	22	17		54	30	20	16	
3	16	16	8		29	20	20	18		55	30	26	12	
4	18	15	12		30	31	26	16		56	22	20	12	
5	26	22	14		31	28	24	34		57	18	12	7	
6	22	18	20		32	16	14	7		58	14	13	16	
7	20	19	11		33	16	14	7		59	16	12	13	
8	18	15	11		34	22	21	9		60	26	16	6	
9	20	18	8		35	23	21	13		61	36	26	6	
10	18	15	11		36	33	28	18		62	16	14	9	
11	20	18	9		37	20	20	5		63	26	22	22	
12	17	16	12		38	31	28	14		64	14	12	7	
13	18	17	19		39	15	13	11		65	30	28	15	
14	24	18	8		40	20	16	10		66	31	30	15	
15	30	19	9		41	25	17	17		67	20	18	17	
16	20	20	11		42	42	26	23		68	14	12	8	
17	22	21	14		43	50	48	14		69	18	12	6	
18	30	26	18		44	23	20	10		70	18	16	10	
19	31	23	15		45	19	14	9		71	21	20	16	
20	12	10	9		46	28	26	14		72	15	15	10	
21	30	28	10		47	16	14	6		73	40	32	9	
22	24	18	11		48	25	20	9		74	26	26	16	
23	16	15	12		49	35	26	—		75	14	14	11	
24	26	22	26		50	14	12	9		76	29	22	10	
25	21	20	34		51	20	16	7		77	30	25	11	
26	20	20	26		52	16	15	6		78	25	22	19	

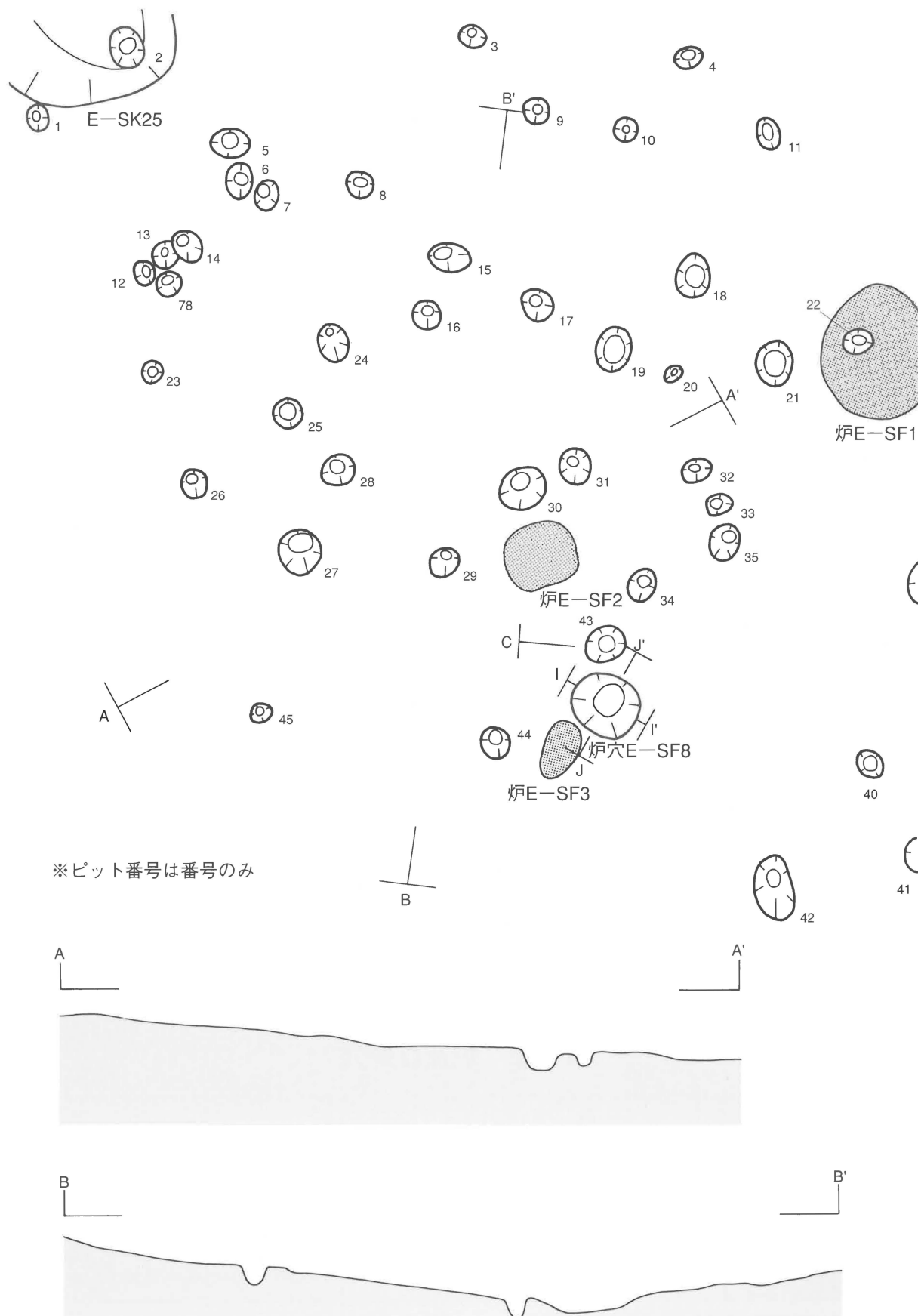
第6節 炉及び炉穴

E区西地区に所在する竪穴住居址E—S B19の東側の土壌群やピット群で地山面が赤く焼け灰や炭化物が堆積していた場所（炉E—S F）が3カ所と、掘り窪められた地山面が赤く焼け、灰や炭化物が堆積していた場所（炉穴E—S F）が7カ所確認された。

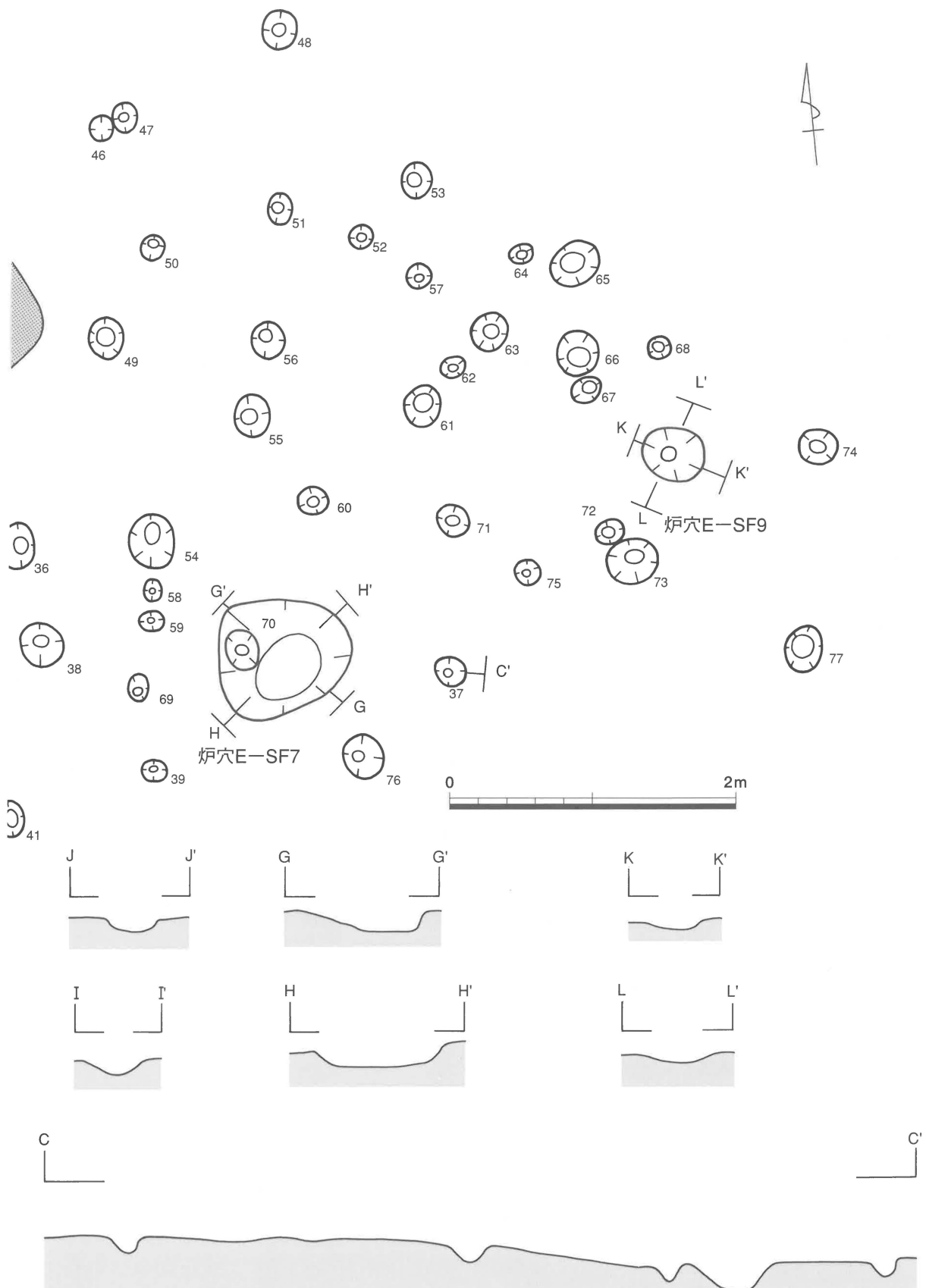
1、炉E—S F 1

（1）遺構 （挿図第4・第31・第32）

炉E—S F 1はピット群のほぼ中央部にあり、P22の周辺に位置している。平面形は楕円形で、長



挿図第31 ピット群および炉穴E-SF7～E-SF9、炉E-SF1～E-SF3実測図1



挿図第32 ピット群および炉穴E-SF7～E-SF9、炉E-SF1～E-SF3実測図2

径92cm、短径88cmである。地山面は赤く焼け、灰が堆積し、炭化物も認められた。

2、炉E－SF 2

(1) 遺構(挿図第4・第31)

炉E－SF 2はピット群の中央部南西寄りに位置している。平面形はほぼ隅円方形で長径54cm、短径48cmである。地山面は赤味を帯び、灰が認められた。

3、炉E－SF 3

(1) 遺構(挿図第4・第31)

炉E－SF 3はピット群の中央部南寄りにあり、炉穴E－SF 8に接して南西に位置している。平面形は楕円形で長径44cm、短径28cmである。地山面はやや赤味を帯び、灰が2cm～3cmの厚さで認められた。炉穴E－SF 8と関連があるかもしれない。

4、炉穴E－SF 4

(1) 遺構(挿図第4・第26、図版第9の1)

炉穴E－SF 4はE区西地区に所在する竪穴住居址E－SB 19の東3mに位置する。平面形は楕円形で、炉穴の上端は長径75cm、短径67cm、下端はほぼ円形で長径40cm、短径38cmである。断面形は鍋底形で深さは15cmである。焼土面は断面図でわかるように焼けている壁のほうに10cm低くなっている。焼けている面は北西の壁と北西側の穴の底面である。この焼土面から1点の石片が検出されている。

5、炉穴E－SF 5

(1) 遺構(挿図第4・第26、図版第9の1)

炉穴E－SF 5はE区西地区に所在する竪穴住居址E－SB 19の東端から1m東に位置する。北側の土壌と南側のピットは連結しており、土壌とピットは一体化したものとして捉えることにした。平面形は不定形であるが、長径110cm、短径は北側が64cm、南側が44cmである。断面形は鍋底形であり底面は凹凸がみられるが、深さは20cmである。北側のピットの壁面が赤く焼けていた。

6、炉穴E－SF 6

(1) 遺構(挿図第4・第26)

炉穴E－SF 6はE区西地区に所在する竪穴住居址E－SB 19の東端から3m東に位置する。平面形は楕円形に近いもので、上端で長径146cm、短径70cm、深さ54cmである。ピットの南東壁面が赤く焼けていた。

7、炉穴E－SF 7

(1) 遺構(挿図第4・第32)

炉穴E－SF 7はE区西地区に所在する竪穴住居址E－SB 19の東端から13m南東に位置する。平

面形は上端が楕円形に近いもので、長径98cm、短径88cm、下端は楕円形で長径50cm、短径40cmである。断面形はU字形で深さ18cmである。地山面は北から南にかけて緩やかに傾斜をしており、比高差は8cmほどである。掘り込まれたピットの北西壁側が赤く焼けていた。

8、炉穴E—SF 8

(1) 遺構（挿図第4・第31）

炉穴E—SF 8はE区西地区に所在する竪穴住居址E—SB 19の東端から10m南東に位置する。平面形は上端が楕円形に近いもので、長径46cm、短径42cm、下端はほぼ円形で直径18cmである。断面形は鍋底形で深さは18cmである。地山面は北から南にかけて緩やかに傾斜をしており、屋外炉の北壁と南壁では4cmほどの比高差がある。掘り窪んだ底面や壁面は赤く焼けていた。特に焼土面のみられる南壁側が赤く焼け締まっていた。

9、炉穴E—SF 9

(1) 遺構（挿図第4・第32）

炉穴E—SF 9はE区西地区に所在する竪穴住居址E—SB 19の東端から15.5m南南東に位置する。平面形は上端が楕円形に近いもので、長径46cm、短径40cm、下端はほぼ円形で径14cmである。断面形は鍋底形で、深さは10cmである。地山面はほぼ平らになっている。掘り窪められた底面も壁面も焼けていた。

10、炉穴E—SF 10

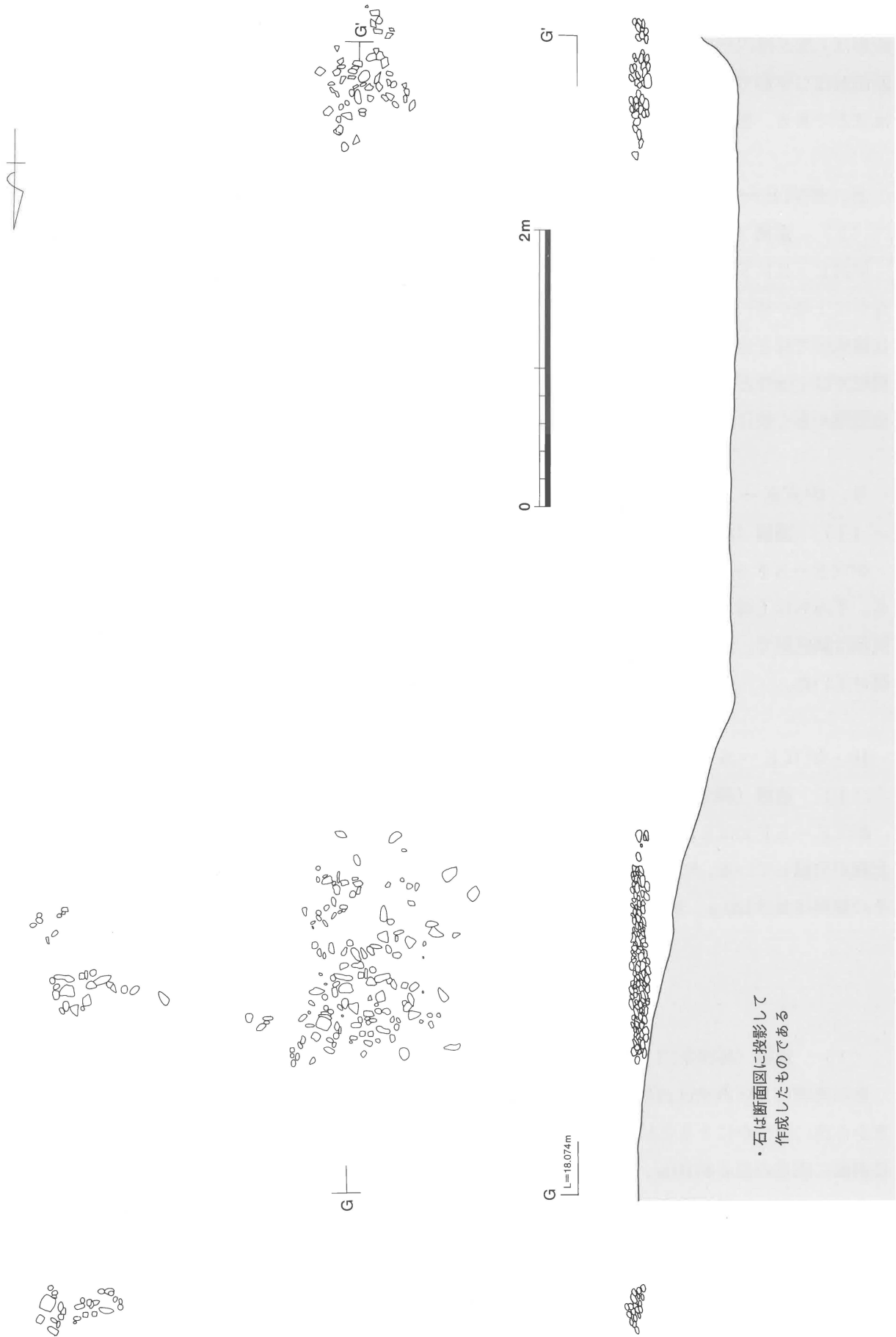
(1) 遺構（挿図第4・第21・第27）

炉穴E—SF 10はE区西地区の竪穴住居址E—SB 19の北東約15mに位置する。土壌E—SK 30は北側が欠損している。欠損していない南側の土壌内に所在する。炉穴E—SF 10の平面形は楕円形で、その規模は長径120cm、短径70cmである。南側の土壌の壁や床面に灰が認められた。

第7節 集石遺構

(1) 遺構（挿図第33、第34、第35、図版第8）

集石遺構はE区西地区西側に位置する竪穴住居址E—SB 19の西側上面に所在する。集石遺構は、東から西に緩やかに下る谷状地形を横断するように尾根状の高まりを見せる北側から緩やかに南に下る斜面に南北の長さ約10m、東西の幅約3mの範囲で認められた。多量の石が層をなしていたため、一つ一つの石の位置と高さを記録して順次取り上げた。挿図第33～挿図第35は本来一枚の図にすべきであるが、便宜的に3枚に分けた。集石遺構の石は自然礫で、直径が5cm～20cmほどのものである。挿図第33は検出順が3番目で、集石遺構では最下面にあたる。石は北側に東西1.60m、南北1.60m、その1.50m東側に東西0.8m、南北0.8mの範囲に固まっている。その固まりのほぼ5m南に東西0.7m、南北1mの範囲にも認められる。集石遺構から検出された石の数は472個で、そのうち赤く焼けた石



挿図第33 集石遺構E－S S 1 実測図（検出順3 番目）

は77個で全体の16.3%にあたる。焼土面は2カ所で検出された。焼土面1は集石遺構の北側で検出され、範囲は東西1.60m、南北1.40mの楕円形をしている。焼土面内の石は赤く焼けたものが多く、灰の堆積も見られた。焼土面2は焼土面1より1.2m南にあり、東西2m、南北0.80mの不定形をしている。集石遺構に接した西側に南北の長さ8.50m、幅15cmほどの間壁を設け、層序の確認と遺構の切り合い状態に注意しながら調査を進めた。集石遺構の底面はほぼ同じ高さである。石に混じって押型文土器や石器が検出されている。焼土、石、土器、石器はほぼ同じ層から検出されている。集石遺構の石を精査しながら取り除いたが石は竪穴住居址E—S B 19の床面上では検出されなかった。このことから、集石遺構が放棄された後に竪穴住居址が構築されたものと考えられる。

(2) 遺物(挿図第47の249～281・第48の282～293・第49の294～296)

249～296はE—S B 19の西側に広がる集石遺構の集石と伴に検出された遺物である。

249～251はB 1—a 類に属する菱形の斜格子目押型文をもつ深鉢の胴部破片である。

252～260はC 1—a 類の長い平行四辺形の文様をもつ押型文土器である。252は深鉢の口縁部破片である。口縁は緩やかな反りをもち立ち上がる。口端はヨコナデ調整で面取りされ丸みをもつ。外面の約1cm下方まで無文部がある。その下には長い平行四辺形をもつC 1—a 類、C 2—a 類の文様が混在した斜格子目押型文が施されている。内面には2列の横位方向に施文された小さい平行四辺形の押型文が巡っている。また口端の外面約2.5cm以下の部分には炭化物の付着が認められた。253～260は胴部破片である。

261～263はC 2—a 類の小さな平行四辺形を成す斜格子目押型文が施された土器である。261は口縁部の破片である。小片のため明確ではないが緩やかな反りをもつ口縁部であろう。口端はヨコナデ調整により面取りされ丸みをもつ。内面は無文である。262～263は胴部の破片であり、横位方向に細密な斜格子目押型文を施している。

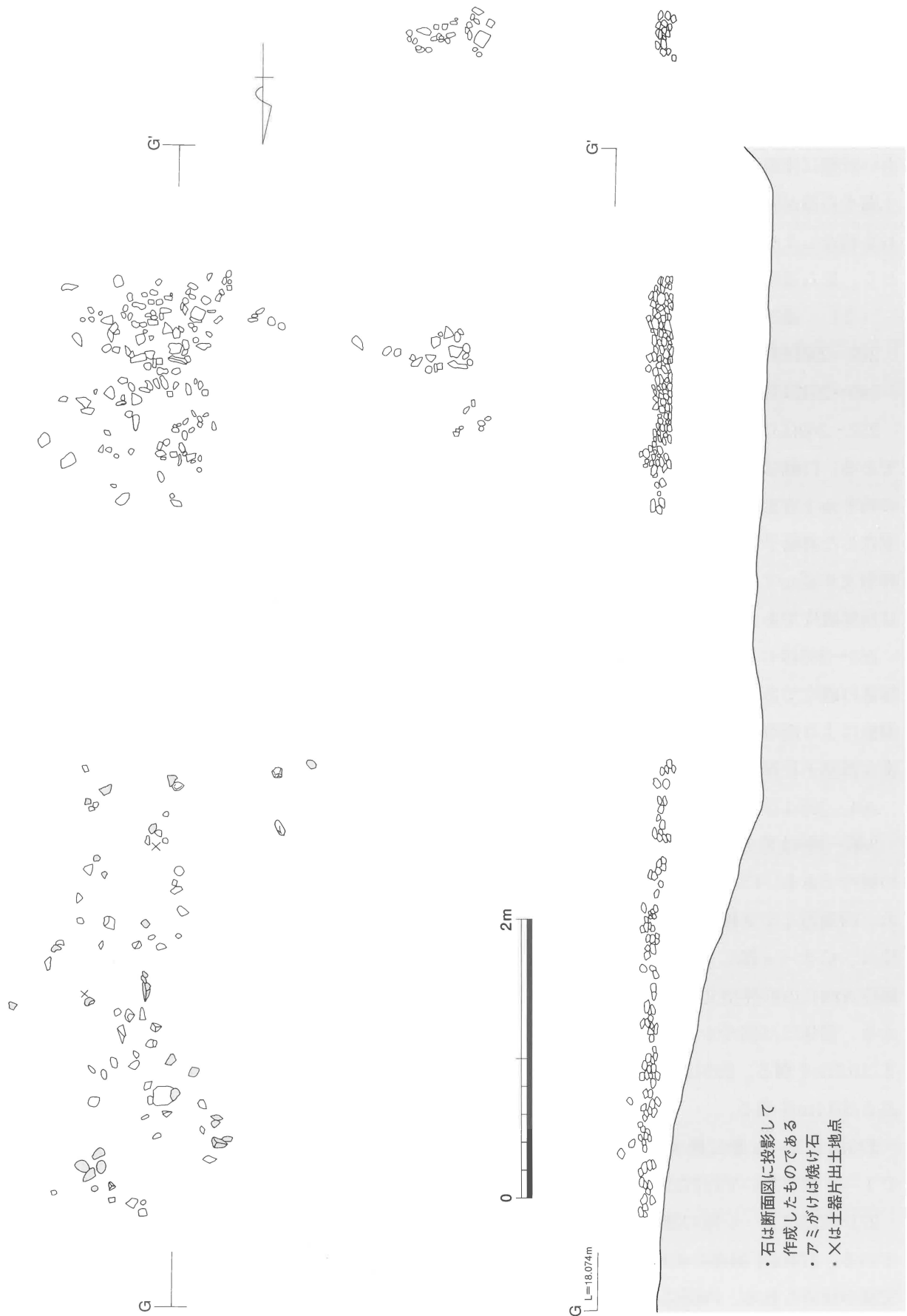
264・265はD 2—a 類の胴部破片である。小さな楕円押型文が施されている。

266～269はE 1—a 類の山形押型文をもつ深鉢の各部位である。266は口端を欠損している口縁部の破片である。口縁は緩やかに外反して立ち上がる。外面には縦方向に施された山形押型文が認められ、口端近くで文様が切れている。山の幅は1.6cmで、高さは0.5cmを測る。また内面の口端に近い部位に、C 2—a 類にあたる格子目押型文が横位方向に押捺されている。267は下胴部の破片である。縦位方向に山形押型文を施している。山の幅は2.1cm、高さは0.9cmを測る。268は口縁部に近い破片である。器体には緩やかな反りをもつ。縦位方向に薄い山形押型文を施している。山の幅は2.2cm、高さは0.7cmを測る。269は胴部の破片である。横位方向に山形押型文を押捺している。山の幅は1.8cm、高さは0.7cmを測る。

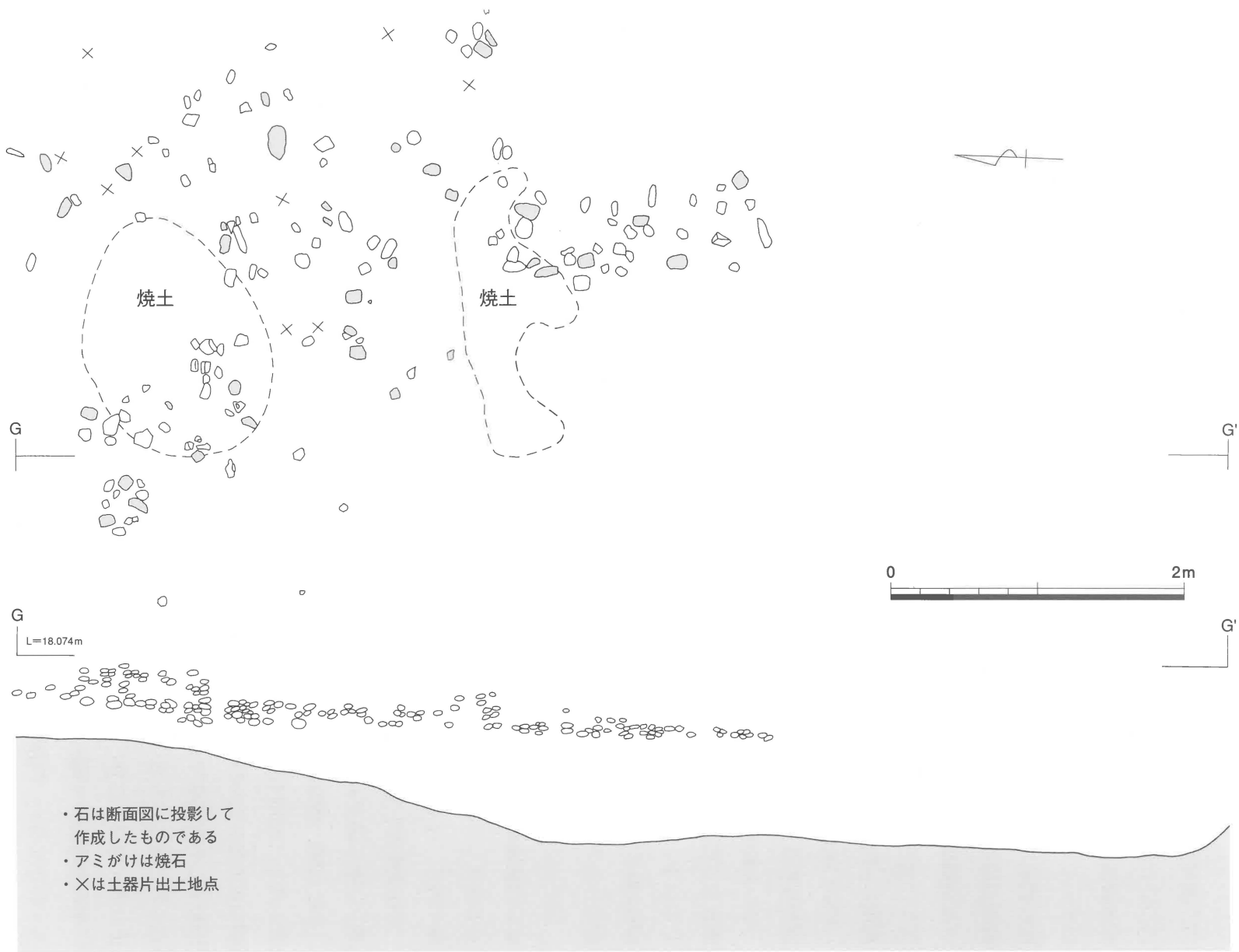
270はE 2—a 類に属す山形押型文土器の胴部破片である。山と谷の間に隙間が存在するもので、C 1—a 類の長い平行四辺形を交互斜めに施し、山形にした文様である。

271～273はF—c 類の撚糸文土器の胴部破片である。全て縦位方向の大柄な撚糸文(R)が施されている。274は下胴部の破片である。外面は磨滅しており、文様の有無は明確でないが押型文らしき文様が認められる。内面には指による横位方向の撫痕が明確に残る。

275～280・283・287は小形の剥片を利用した刃器である。275はチャート製の横長剥片で剥離面に



挿図第34 集石遺構E—S S 2実測図（検出順2番目）



挿図第35 集石遺構E—SS3実測図(検出順1番目)

は明確なリングとバルブ痕が認められる。この面に剥片を斜めに切断した際についた打点が認められる。形状は長い台形状を呈し、下方側辺と上方側辺に使用痕が認められる。276はチャート製である。打面にややカーブのある自然面を残した横長剥片を用いている。打点・バルブ・リング痕は明確に認められる。下方で斜めに切断されているが、打点は認められない。形状は長い台形状を呈し、下方側辺に使用痕が認められる。278はチャート製である。やや厚めの横長剥片の腹面に剥片を切断する際についた打点が認められる。形状は台形状を呈している。また側辺には使用痕が認められる。277は流紋岩製の横長剥片である。下方側辺に使用痕が認められる。腹面側の下方に自然礫面が残る。279はチャート製の縦長剥片を利用している。両側辺に使用痕が認められる。280はチャート製の縦長剥片の側辺に使用痕が認められるものである。283は安山岩製の横長剥片である。側辺に使用痕が残る。打面には明確な打点が残る。287はやや大きめなチャート製の縦長剥片である。打点・リング・バルブ痕が明確に認められ、背面には側辺を切断した際についた打点が認められる。形状は長い台形状を呈し、上方側辺と下方側辺に使用痕が残る。284はチャート製の縦長剥片である。打面に自然礫面を利用し、打点・バルブ・リング・フィッシャー等が明確に認められる。剥片の側辺には剥離痕が残る。

282・285は大形の剥片を利用した刃器である。282は安山岩製の縦長剥片で両側辺下方に使用痕が認められる。285は安山岩製の縦長剥片で、両側辺に使用痕が認められる。

281は塩基性岩製の石斧である。扁平な自然礫の側辺を敲打して石斧の形状を作り出している。表裏ともに自然面を残し、先端部を磨き刃部としている。形状は胴張りの長方形で刃先の約3/4は剥離している。この刃部に対して約50° 傾く使用痕が認められ、縦斧として使用されたものであろう。286は塩基性岩製の大形剥片である。片面に自然面を残し、側辺に叩痕が残る。下方の側辺に磨痕が認められるため剥片を利用した石斧と考えられる。

288～290は石核と考えられるもので、288・289の石質は安山岩？、290は流紋岩製である。288は板状の自然礫の平坦面を打面として、表裏の各1カ所に剥片摘出痕が残る。289は板状の剥片で自然面を打面として表裏各2カ所に剥離痕が残る。290の形状は舟形を呈し剥離面を打面として2カ所に剥離が残り、片面には自然礫面が残る。

291は棒状を呈した自然礫の片方を切断して平坦面を作る。この部分には打痕が残る。いわゆるスタンプ形石器である。石質は結晶片岩製である。

292・293・295は敲石である。292は砂岩の長円形に近い自然礫を利用している。下方に敲痕と剥離痕が残る。293は花崗岩製で隅丸長方形の自然礫を利用している。下方に敲痕と剥離痕が残る。295は隅円正方形に近い自然礫を利用している。下方に剥離痕が残る。294は磨石である。花崗岩製でほぼ円形をした自然礫である。下方にスリ痕が残り、上方の一部に敲痕が残る。磨石を敲石として使用したものと考えられる。296は花崗岩製の石皿である。底の平坦な大型の自然礫を利用している。機能面は浅く窪んでおり、この面には敲痕が点在する。

集石遺構内から検出された遺物は縄文時代早期前葉の時期に当たる。E-S B19は本遺構を掘り込んで存在するが、時期的にはE-S B19と同時期の押型文土器を使用した遺構である。

第8節 遺物包含層

遺物包含層は表土層（耕作土層）と遺構をともなわない黒色有機土層に分けられる。表土層は重機により削平された埋土で、すべて表面採集遺物とした。図示したものは7点である。黒色有機土層からの出土遺物は遺構に伴わないもので図示したものは31点である。

（1）E区1・3 黒色有機土層（挿図第54の406～424）

406～412は甕の各部位である。406は口縁部で、丈が高く直線的で、口端を丸め、クシ状器具によるキザミが配されている。外面は斜位のハケメ調整痕が残り、内面にはヨコナデ調整痕が残る。407は口縁部から上胴部にかけてのS字口縁の甕である。外反して立ち上がる口縁に丸みをおびた口端をもつ。上胴部には斜位のハケメ調整痕が残り、その後にクシ状器具による平行線を施している。408～412は脚台部である。408・410・411はハの字状に開く脚台部をもつ。外面調整に薄いハケメを施した後にナデ調整を行っている。408・410の脚台端は角張り、411は丸みをおびている。409は下胴部から脚台部にかけてのものである。脚台部はハの字状に広がり、脚台端は角張る。上胴部、脚台部は内外面ともにハケメ調整痕が残る。412は脚台部の脚台端を欠く破片である。脚台部はハの字状に広がり、外面にハケメ調整痕を残すが、内面は磨滅している。

413・416～422は壺の各部位である。413は口縁部から下胴部である。くの字状に開く丈の高い口縁部をもつ。内面は磨滅しているが、上胴部の外面にハケメ調整痕が残る。416～422は赤彩が認められる胴部破片である。また419の下方にヘラ状器具による刺突文列が認められる。417・420には表裏面ともに赤彩が認められた。

415は高坏の脚部である。ハの字状に大きく開き、3カ所に円形の透かし孔が配されている。全体に磨滅しており、外面の一部にハケメ調整痕が認められる。414は器台の脚部と考えられる破片である。外面に突帯をもつ。

423は内耳付焙烙である。浅い皿状の体部をもち、口縁部でやや内彎して三角張った口端に至る。口縁部の内面には指痕が残り、またこの部分に二等辺三角形の各頂点にあたる2カ所に吊り下げ用の耳が付いている。外面には器高の約1/2まで底部から左廻りのヘラ削り痕が、その上方にはハケメ痕が認められる。また内面は丁寧にナデ調整を施している。

424は銅銭の「寛永通寶」であり、この穴銭は新寛永である。

406は欠山式土器と考えられる。407～422は古墳時代前期の王江式土器と考えられる。423・424は近世の所産と考えられる。

（2）E—2 黒色有機土層（挿図第55の425～437）

426～431は甕の脚台部である。426はやや丸みをもち、外面にはハケメ調整痕が明確に残る。脚台端は丸く仕上げている。427～429は脚台が低い。外反気味にハの字状に開脚する脚台部をもつ427がある。外面には薄いハケメ調整痕が残り、これを打ち消す様にナデ調整を行っている。脚台端は、427は丸みをおび428・429が角張っている。431は脚台が高く、ハの字状に開く脚台部をもつ。脚台端は平坦面をもつ。外面には縦位のハケメ調整痕、内面には横位のハケメ調整痕を残す。

425・432～434は壺の各部位である。425は口縁部で、ハの字に開き、口端を下方に拡張して口端面の外面にクシ状器具による羽状文を施している。内面にも同器具による羽状文が配されている。432は口縁部で、小形で大きく開き、口端は丸みをもつ。外面にはハケメ痕、内面にはナデ痕が残る。433は胴部で、内外面にナデ調整痕が残る。434は平底の底部で、底面に凹みをもつ。436は高坏の脚部で脚端部を欠く。筒状の脚下方で開脚する形状と考えられる。外面には横位方向にヘラミガキ痕が残る、内面にはケズリ痕が残る。435は器台である。稜を持ち外反する坏部をもつ。脚端を欠くが脚部はハの字状に開脚するものと考えられる。脚部には3カ所の円孔が配されている。437は平安朝瓷器の胴部の破片である。内外面にロクロ目残り、外面に薄い施釉が残る。

425・426・430・431・435は王江式土器、426～429・432～434・436は青山式土器と考えられる。437は平安時代の遺物であろう。

(3) E-4 黒色有機土層 (挿図第49の297～318・第49の319～363)

297～326は全てE-SB19を覆う上層の黒色有機土層 (遺物包含層) から検出された遺物である。うち321～323は、この層の最上部から見出したものである。後述する集石遺構を覆う黒色有機土層とは同一層である。

297・298はA-a類の文様をもつ一群である。正方形の押型文を横位方向に施して市松模様状に配している。いずれも胴部の破片である。

299～302はB1-a類にあたり、全て胴部破片である。大きな菱形の斜格子目押型文を配した土器である。

303はB2-a類あたり、胴部破片である。小さな菱形の斜格子目押型文を押捺している。

304～312・314はC1-a類に属す長い平行四辺形の押型文をもつ一群である。306・312は底部に近い下胴部破片であり、他は胴部破片である。また305の土器外面の押型文中、左側1列目の平行四辺形文様は重なっており乱れている。縦位方向に文様を配している。その他に306の土器下方では、文様を施した後にナデ痕が見られ、C1-a類の押捺が楕円文の様な形状に変形している。この様な潰れは310・314などにもみられ、C1-a類の文様がC2-a類のように見えるものもある。

313はC2-a類の底部に近い下胴部の破片である。文様の幅と長さが小形の為、一見市松模様に見えるが縦位方向に施文した斜格子目押型文の土器である。315～318は全て胴部の破片である。D1-a類属し、長径1.2cm、短径0.6cm前後で深さが0.1cm～0.2cmと他の文様より深く大きな楕円押型文をもつ一群である。SB19の床面から検出した174と同様の文様である。349はD2-b類のやや長めな楕円押型文をもつ胴部破片である。

320はE類の山形押型文を施した底部に近い下胴部である。断面形状は文様が薄いため判断できなかった。横位方向に薄く山形押型文が押捺されている。

321は段状を成す深鉢の口縁部であり、口端は欠損している。口縁部にはヘラ状器具による横位の刺突文帯が上下2条に認められ、内部には同器具によるアーチ状の刺突文を配している。内面には荒い条痕残り、繊維痕も認められる。322は下胴部の破片である。外面には細かな条痕が認められ、内面には荒く削りに近い条痕残り、繊維痕が認められる。323は胴部の破片である。幅約4mmの半裁竹管状の器具で縦位方向に2条の沈線が施されている。

324～326は石器である。324は流紋岩製の横長剥片を利用した刃器である。剥片の側辺を切断して、残った側辺を刃部としている。刃部には使用痕が認められる。形状は長い台形を呈している。325は流紋岩製の横長剥片の両側辺に使用痕が残るものである。326はチャート製の刃器と考えられる石器である。側面には自然面が認められ、円礫から剥離された大型の剥片である。剥片の下方側辺部の腹面のみに押圧による剥離痕が残る。形状は正三角形を呈している。

黒色有機土層の最上部から検出した321・322は縄文時代早期後葉の茅山下層式土器（註14）に並行のハッ崎1式土器（註15）である。他の押型文土器は縄文時代早期前葉の土器である。また石器類もこの時期の所産と考えられる。

327～356・358・360・363はE区に存在した集石遺構の上部に広がる黒色有機土層中から、357・359はこの層の最上部から見出した遺物である。

327はA—a類に属す正方形の押型文を市松文風に配した胴部破片である。

328は磨滅しているが、B1—a類に属す菱形の斜格子目文を押捺した胴部破片である。

329～347はC1—a類の長い平行四辺形の斜格子目押型文をもつ破片である。329は直行する口縁部の破片である。やや厚みをもち角張った口端の上面に、棒状器具による押し引き風の右回りのキザミ目文を巡らしている。外面は特に長い押型文が口端近くまで横位方向に並び、内面にはヨコナデ調整痕が認められる。330はC1—a類の押型文を中心として、B1—a類とD1—a類の文様が混在する胴部の破片である。331もC1—a類の押型文の文様を中心として、B1—a類とB2—a類の文様が混在する胴部の破片である。332・333・342は形の整った長い平行四辺形の斜格子目押型文が認められる胴部破片である。334～336は斜格子目押型文が重なり、また施文方向が異なる為に文様が乱れた胴部破片である。また、やや細めであるがC1—a類の347は横位方向に文様を施し、上方に無文部が認められる。

348～350・353はD1—a類の大きな楕円形の押型文を配した一群である。348は整った楕円文をもつ胴部破片である。349の下方には無文部が認められる胴部破片である。また353は下胴部の破片であり、磨滅が激しいが外面の左側に極薄い楕円押型文が認められる。351・352は胴部の破片で、小さな楕円形の押型文をもつD2—a類である。

356はE1—a類の胴部破片であり、山形の押型文を横位方向に施している。山の幅は1.6cm、高さは0.7cmを測る。354・355はE2—a類の胴部破片である。山と谷が離れる類である。平行四辺形を交互に配し、横位方向に施文した山形押型文をもつ。354の下方には山形押型文の重なる部分があり、山の幅は1.5cm、高さは0.9cmを測る。355の山の幅は1.3cm、高さは0.9cmを測る。

357～359はF—c類の撚糸文を縦方向に施した一群である。128は胴部破片で、細かな撚糸文（R）を配している。357・359はいずれも胴部の破片であり、斜位方向に太めの撚糸文（R）を配している。360は底部の破片である。丸底に近い底面に付けた直径1.5cm、高さ1.0cmの円錐形の突起である。外面は指痕が残り、内面にはナデ調整痕が残る。押型文土器の底部か撚糸文土器の底部かは不明であるが、胎土及び色調から押型文土器の底部である可能性が高い。

361～363は流紋岩製の刃器である。361は縦長剥片の下方部の両側辺にかけて使用痕が残るものである。打面に剥離面を利用しており、明確な打点、バルブ、リング痕が残る。362・363は横長剥片の

両側辺に使用痕が残るものである。

西部黒色有機土層から検出された押型文土器と燃糸文土器は縄文早期前葉の土器である。伴出した石器もこの時期に伴うものと考えられる。

(4) Eトレンチ

ア E—1 トレンチ (挿図第53の394)

E—1 トレンチの黒色有機土層から検出された遺物である。

394は須恵器の長頸壺の底部破片である。斜行する台形の高台をもち、下胴部の立ち上がりは丸みを帯びている。外面には自然釉の垂れ痕が認められる。

時期は奈良時代である。

イ E—2 トレンチ (挿図第53の395～400)

E—2 トレンチの黒色有機土層から検出された遺物である。

395～397は甕の口縁部である。395はくの字状に大きく外反し、膨らみをもつ上胴部までの破片である。内外面ともに口縁部はヨコナデ調整痕が、上胴部には横位のハケメ調整痕が残る。396はくの字状の口縁部をもつ。外面にヨコナデ調整痕が、内面にはハケメ調整痕が残る。367はS字口縁の甕の口縁部の破片である。やや鋭さを欠く曲りを持つ口縁部をもち、口端は外反させ丸みを持たせている。398～400は壺の各部位である。400は瓢形の壺を思わせる、口縁部の長い壺の口縁部破片である。口縁部内外面は磨滅のため調整痕は不明だが、頸部外面にハケメ調整痕を残す。398・399は底部破片である。いずれも平底の底面をもち、398の底面には木の葉痕、399の底面には凹みをもつ。

これらの遺物は、おおむね王江式土器と考えられる。

ウ E—4 トレンチ (挿図第53の401～405)

E—4 トレンチの黒色有機土層から検出された遺物である。

401は深鉢の口縁部から胴部までの破片である。直立する胴部からやや内彎して立ち上がる口縁部をもつもので、口端はナデ調整により丸く面取りされている。外面には、太く粗い斜位の条痕が認められる。内面にはナデ痕と指痕が残る。

402・403は壺の口縁部破片である。402は、パレススタイルの壺の口頸部である。外反する頸部に帯状の口縁部をもち、2条の沈線を廻らしている。この部分に赤彩を塗布している。内面は一段の段をもち、クシ状器具による斜行文を配している。D—S B 23の127と接合した。403は口縁部から上胴部にかけての破片である。大きく反る口縁部に角張った折り返し口縁をもち、この面にヘラ状器具による刺突文列が認められる。外面の口縁部のみにハケメ調整痕が残る。

404は須恵器質の小破片である。甑の底部と考えられる。直径8mmの管状器具でくり抜いた円孔痕が3カ所に認められた。405は坏蓋の小破片である。

401は条痕系の水神平式土器で、402は瓜郷上層第3様式の土器であろう。403は402と同時期の遠江地方からの搬入品と考えられる。

(5) E区崖面検出遺物 (挿図第51の364)

364はE区西端の崖面の第2層(暗黄褐色土層)から見出した石器である。板状の大型横長剥片の両側辺の上端を切断して、背面は右側に、腹面にも左側に押圧剥離によるフレーキングを施したもの

で、直線的な刃部を作りだしている。直刃を持つ搔器と考えられる石器である。

362は縄文早期前葉の時期の石器と考えられる。

(6) 表面採集遺物

ア E—1 表土層 (挿図第55の438～440)

439は甕の脚台部である。ハの字状に広がり、脚台端は丸く仕上げている。外面にはハケメ調整痕を残す。438は複合口縁をもつ壺の口縁部である。無文の帯状をした口縁をもち、口端は丸く仕上げている。外面にはハケメ調整痕を残す。

440は小形のかわらけである。内外面はナデ調整で仕上げられている。

438・439は古墳時代前期の王江式土器である。440は近世の所産と考える。

イ E—3 表土層 (挿図第55の441・442)

441は壺の口縁部破片である。外反する口縁部をもち、丸く仕上げた口端に至る。内外面にミガキ痕が残る。442も壺の上胴部破片である。外面に赤彩を残す。

いずれも古墳時代前期の古式土師器である。

ウ E—4 表土層 (挿図第51の365～373・第55の443)

E区の西側の工事削平部から採集された遺物であり、E—S B 19の関連した遺物としてあげる。多くは集石遺構、E—S B 19の上層の黒色有機土層中に含まれた遺物と考えられる。

365は文様の形状と断面形がA—b類に属すものである。外面に正方形の格子目押型文が施されている。366はB 1—a類に属し、外面に菱形の斜格子目押型文が施されている。367・368はC 1—a類の長い平行四辺形の斜格子目押型文土器の破片であり、368は口縁部に近い部分でわずかに外反している。364は底部に近い下胴部の破片である。破片の上方に薄くて細い撚糸文(L)が認められる。撚糸の幅は0.5mmである。

370・371は横長剥片を利用した刃器である。370は流紋岩製の扇状を呈した剥片のほぼ中央を縦方向に切断して、側辺を刃部としたものである。側辺には使用痕が残る。371は安山岩製の扇状を呈した剥片の下方と側辺に使用痕が認められる。372は流紋岩製の台形を呈した石核である。石核の側面には自然円礫面が残る。打面は剥離面を利用している。表裏に剥片剥離痕が認められる。373は鯉節状を呈した石核である。自然円礫面を打面として、表裏に各2カ所の剥片剥離痕を残す。下方には反対方向に進む剥離痕が認められ両極打法による剥片摘出が考えられる。これに似た形状の石核に集石遺構内から検出した290がある。

採集した遺物は全て、縄文時代早期前葉の土器と石器である。

443は高坏の坏部下端から脚部にかけての破片である。脚部外面にはヘラミガキ調整の後にクシ状器具による横線を施している。脚には3カ所の円形の透かし孔が配されている。

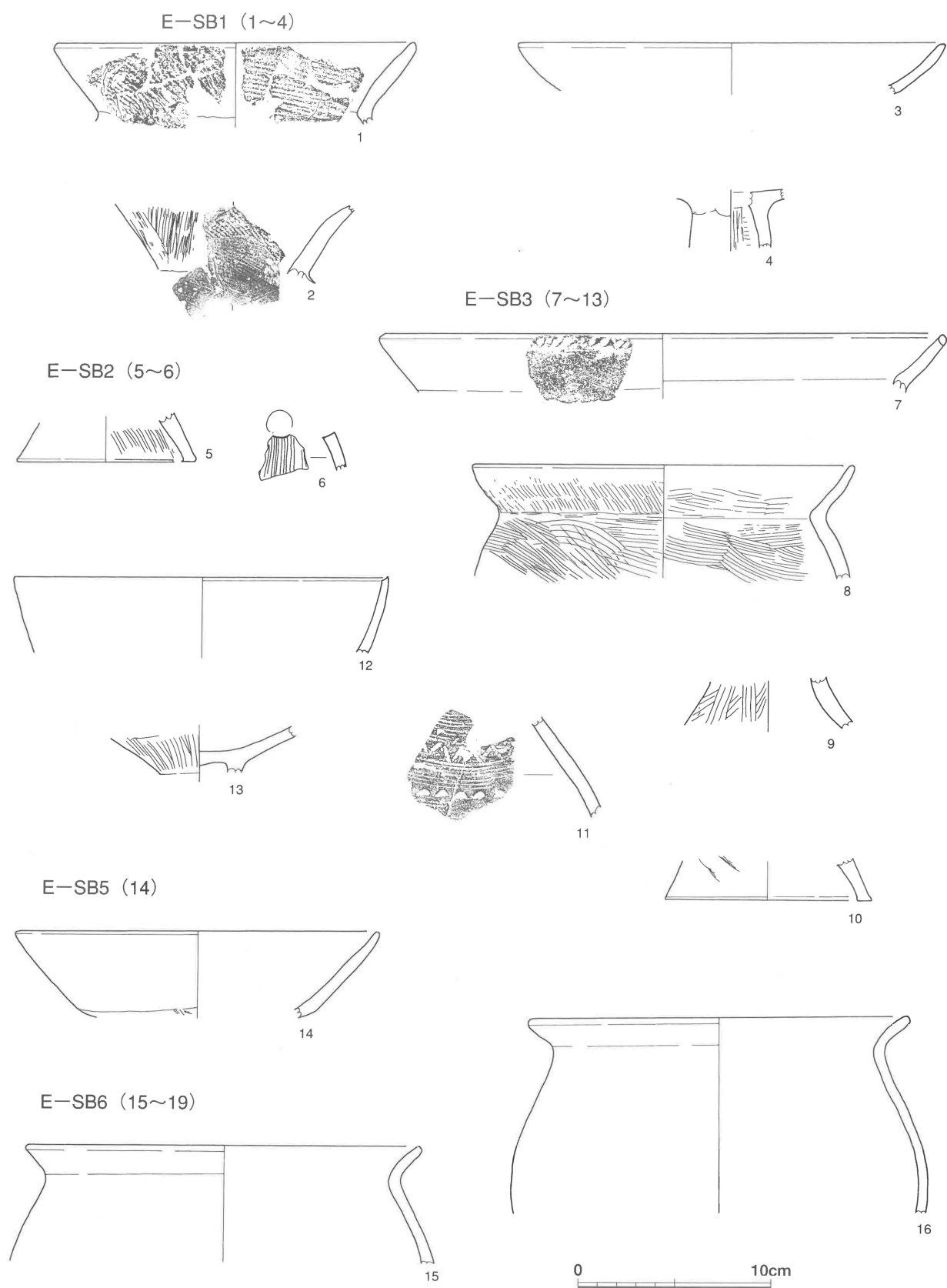
443は弥生時代後期の欠山式土器である。

註1 芳賀 陽「青山貝塚—渥美半島における古代漁村の土器—」『古代学研究20』古代学研究会 1959

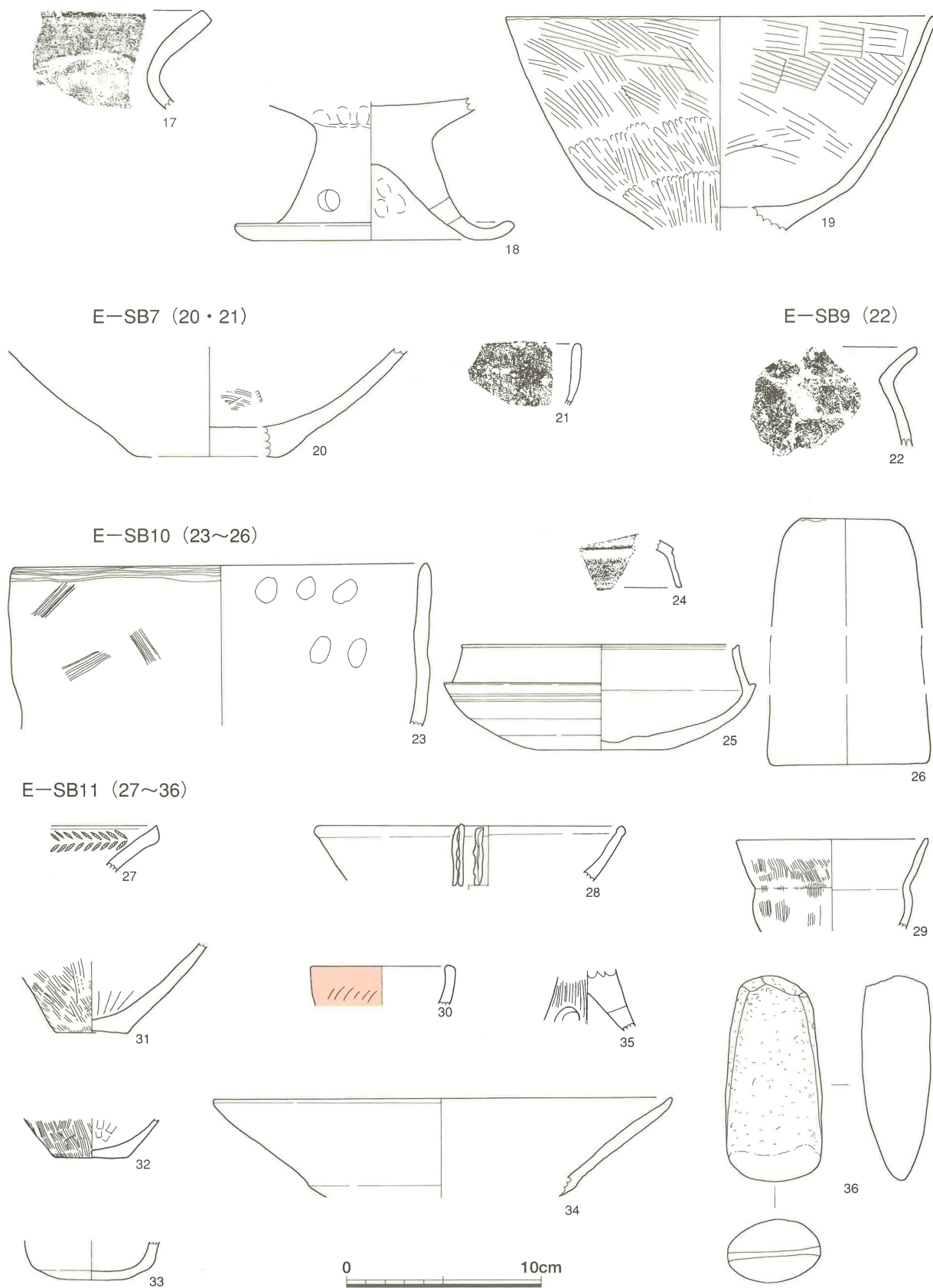
註2 久永春男「弥生土器総括」『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963

久永春男・芳賀陽「欠山遺跡」『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963

- 註3 芳賀 陽『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第93集 瓜郷(Ⅱ)』豊橋教育委員会 2007
- 註4 久永春男・斎藤嘉彦・杉浦茂治「王江遺跡」『愛知県碧海群高浜町の先史・古代遺跡』高浜町誌編纂委員会 1996
- 斎藤嘉彦「王江式土器について」『於御所遺跡 第2次調査』岡崎市教育委員会 1974
- 斎藤嘉彦「伊保遺跡土器の王江式土器」『伊保遺跡』豊田市教育委員会 1974
- 註5 斎藤嘉彦・久永春男「三河における古墳出土須恵器の編年」『岡崎天神山古墳群』愛知県岩津高等学校 1969
- 芳賀 陽「付載第3 東三河における古墳出土須恵器の編年」『二本松古墳群』愛知県開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 1974
- 註6 小野真一『目黒身』沼津教育委員会 1970
- 註7 久永春男「東海地方(土器型式の推移と地域圏)」『新版考古学講座』雄山閣出版株式会社 1969
- 註8 石核から剥離した剥片を切断して刃器としたものを指す。第6章第1節を参照していただきたい。
- 註9 挿図第21を参照。等高線は耕作土(表土)と黒色有機土を削平した後に、25cm間隔の等高線測量をして作成。
- 註10 片岡 肇「神宮寺式系押型文土器の様相」『小林知生教授退職記念考古学論集』南山大学小林知生教授退職記念会編 1978
- 註11 澄田正一・安達厚三・近藤正市・中島義三・夏目邦次郎「I 萩平C遺跡」『川路萩平(C地点)遺跡・大宮八剣遺跡』新城市教育委員会 1969
- 註12 岩瀬彰利・(株)パレオ・ラボ『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第96集 眼鏡下池北遺跡』豊橋市教育委員会 2008
- 註13 「付載・三菱レイヨン株式会社送還水管施設移設工事に伴う発掘調査」参照
- 註14 麻生 優・白石治之『縄文土器の知識Ⅰ』東京美術 1986
- 註15 大参義一『ハツ崎の貝塚』刈谷市文化財保護委員会 1961
- 森 達也・矢田直幸『ハツ崎の貝塚』刈谷市教育委員会 1982
- 増子康真「ハツ崎式について」『古代人42』名古屋市考古学会 1983

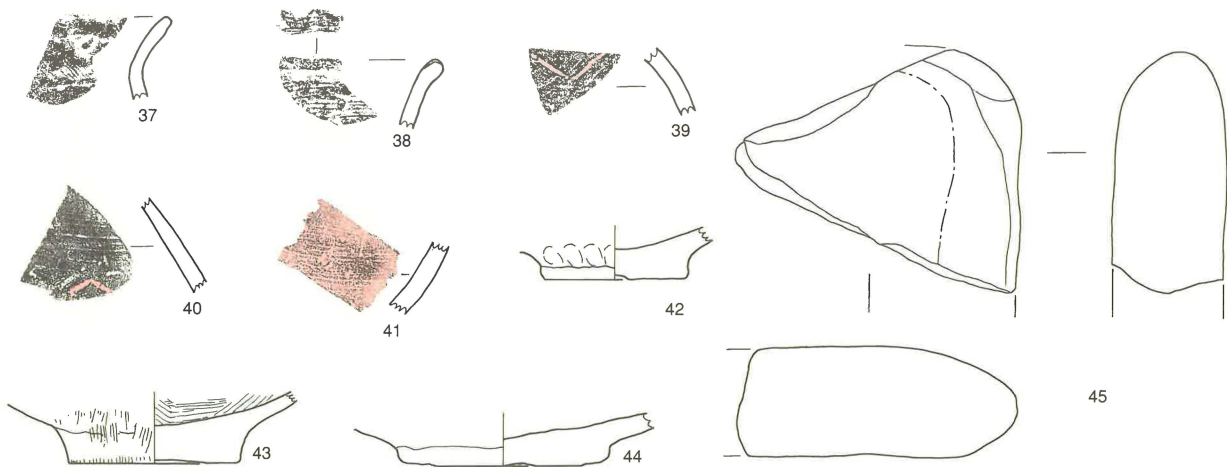


挿図第36 E区出土遺物実測図1 (E-SB1・E-SB2・E-SB3・E-SB5・E-SB6)

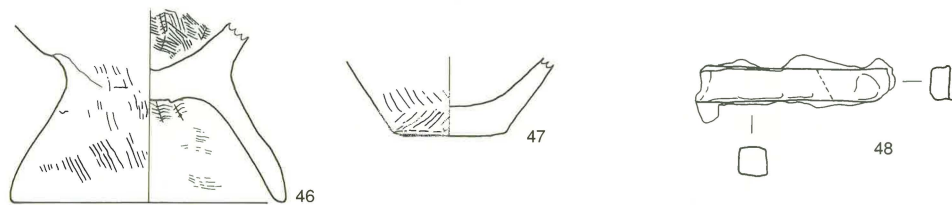


挿図第37 E区出土遺物実測図2 (E-SB6~E-SB11)

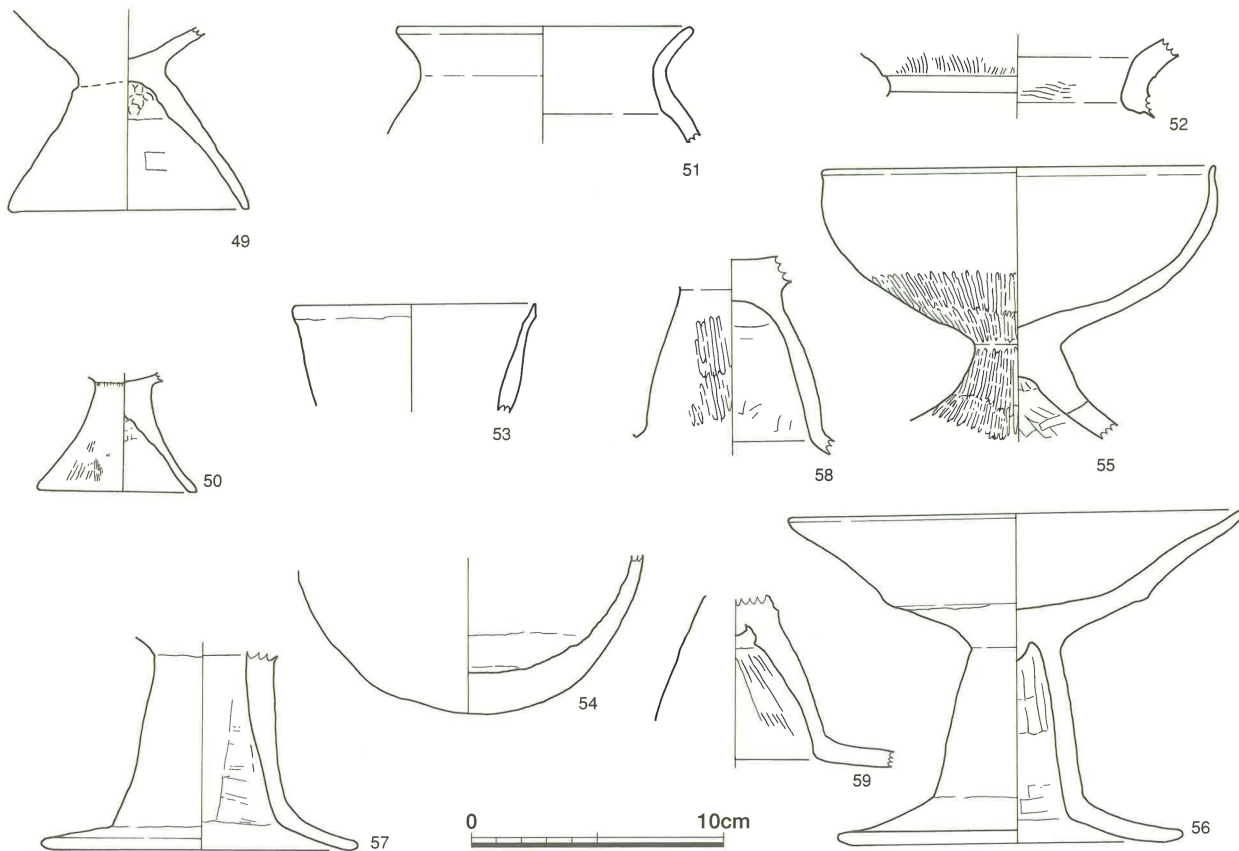
E-SB12 (37~45)



E-SB13 (46~48)

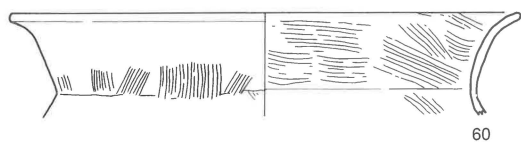


E-SB14 (49~59)

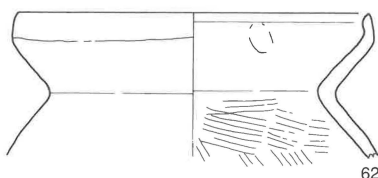


挿図第38 E区出土遺物実測図3 (E-SB12~E-SB14)

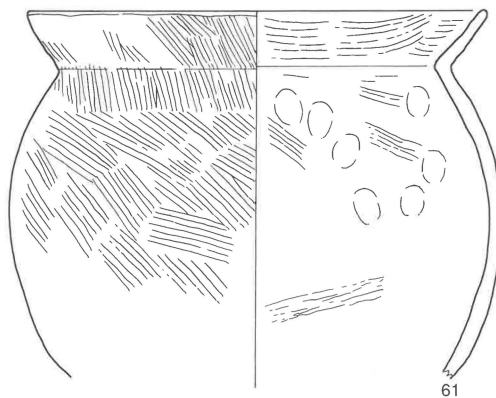
E-SB15 (60~68)



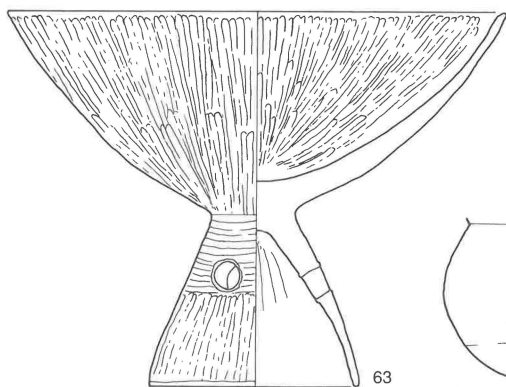
60



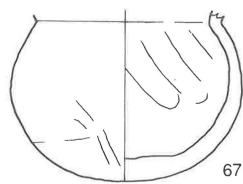
62



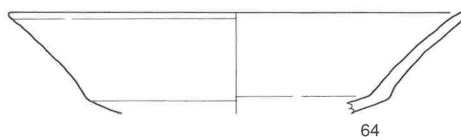
61



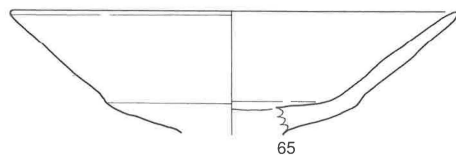
63



67

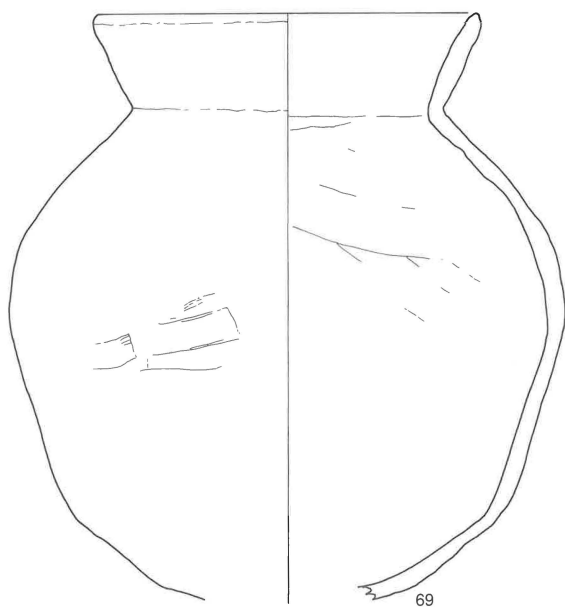


64

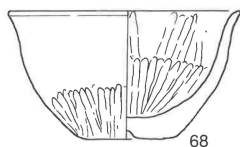


65

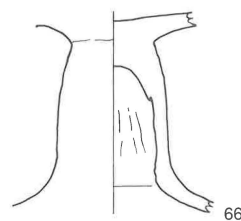
E-SB16 (69~87)



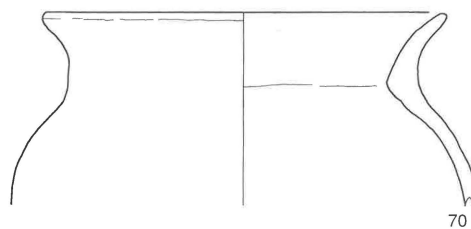
69



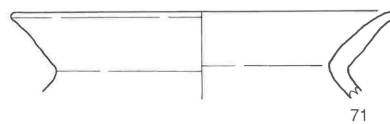
68



66



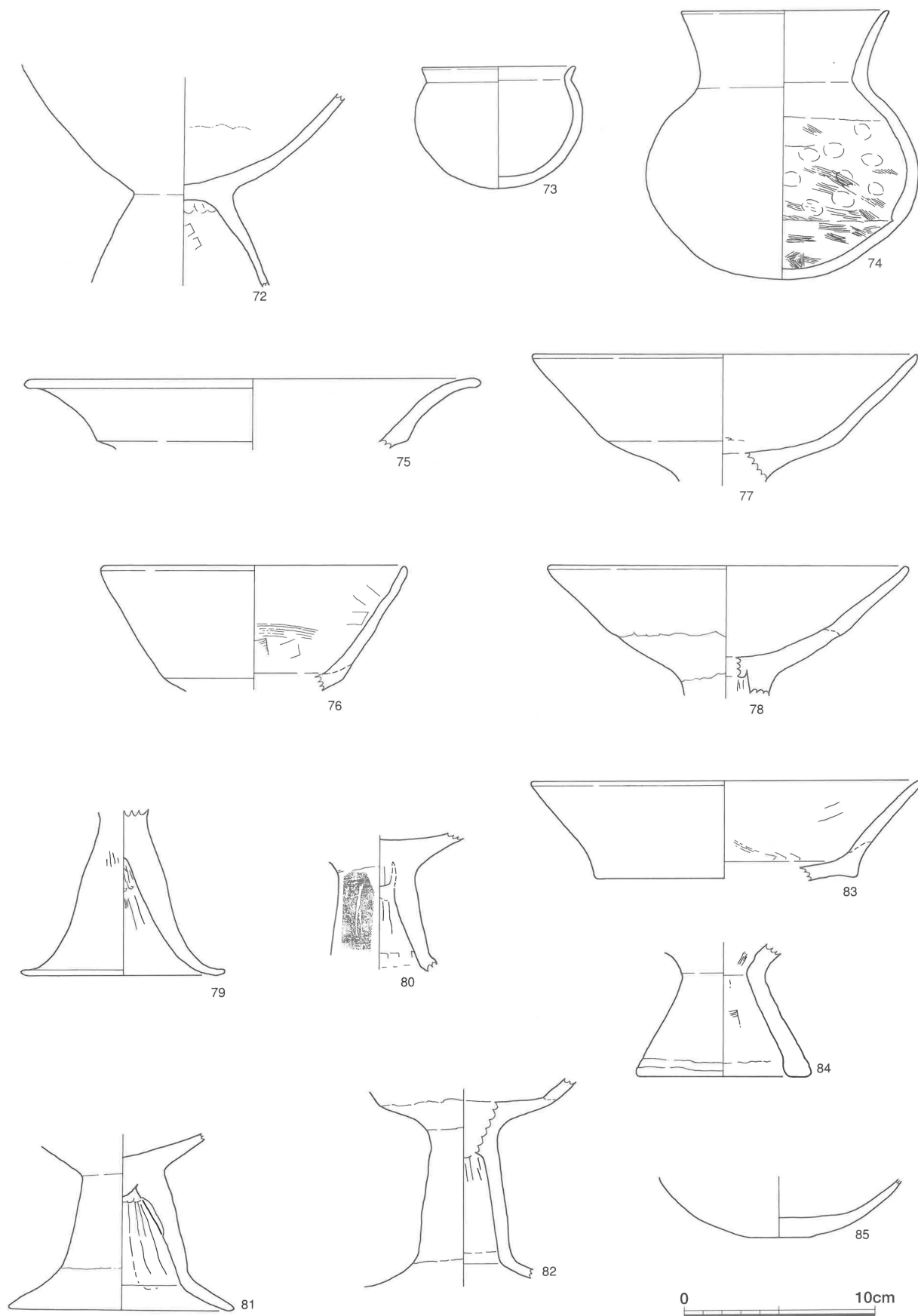
70



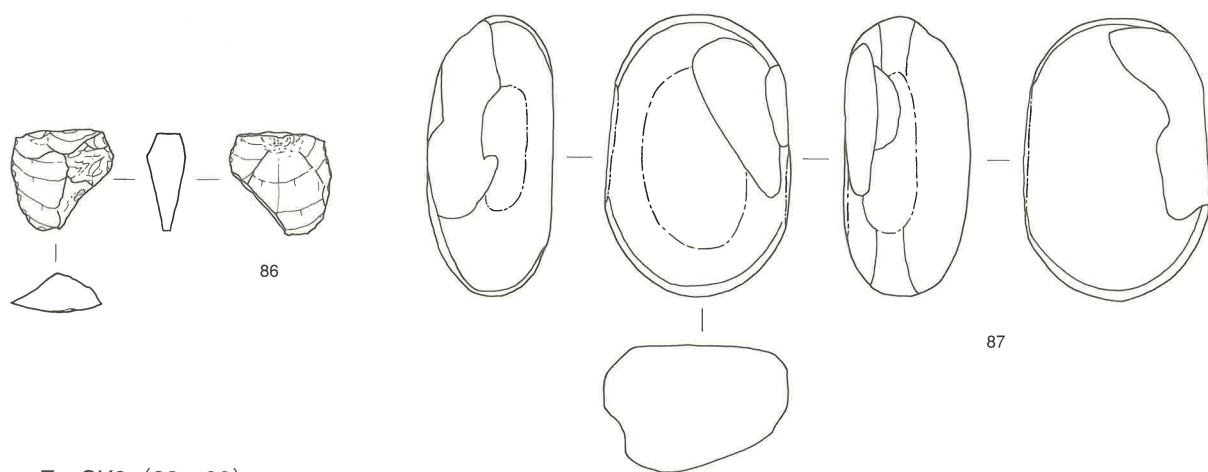
71

0 10cm

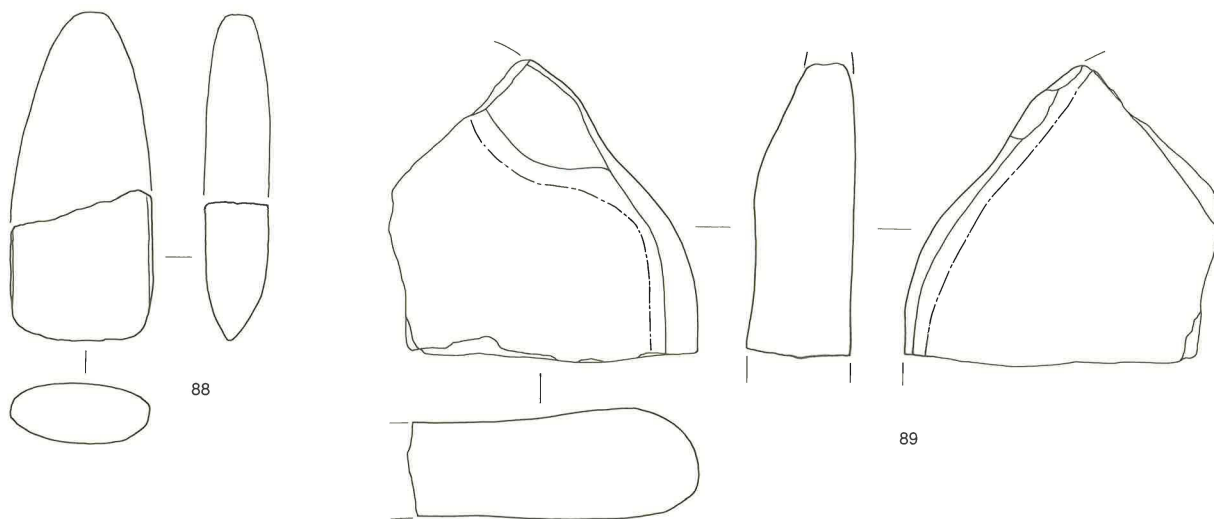
挿図第39 E区出土遺物実測図4 (E-SB15・E-SB16)



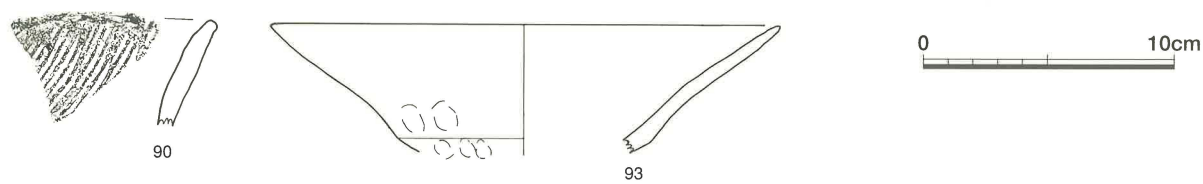
挿図第40 E区出土遺物実測図5 (E-SB16)



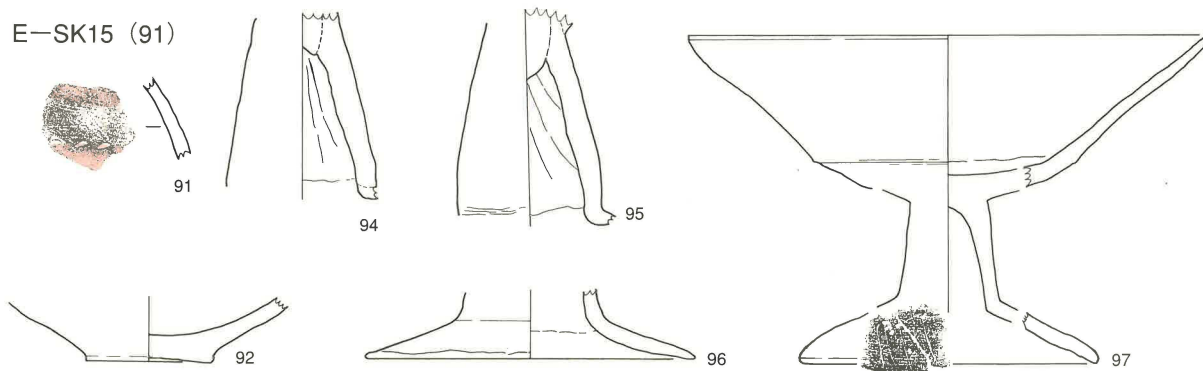
E-SK8 (88・89)



E-SB17 (90・92~97)

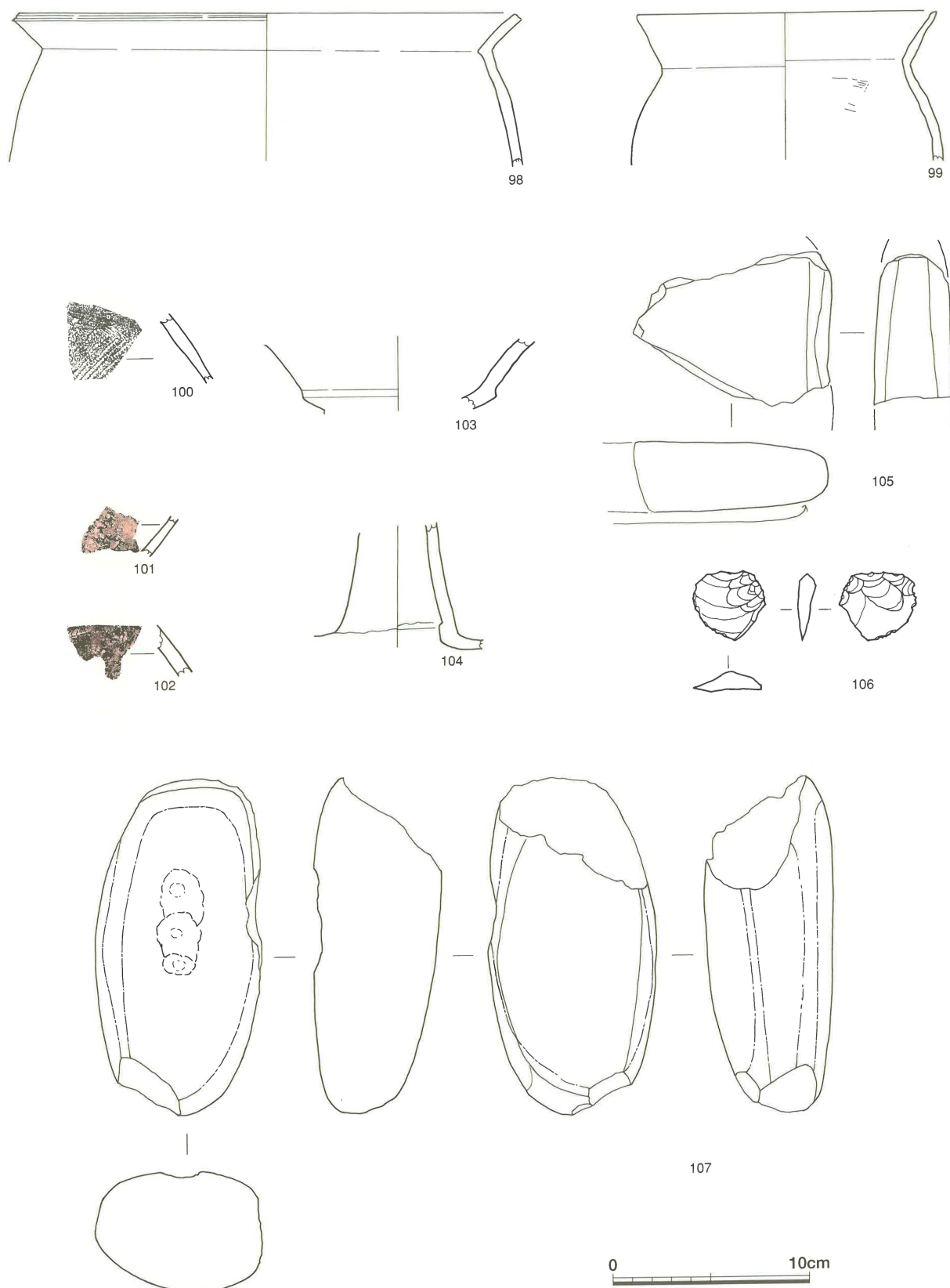


E-SK15 (91)



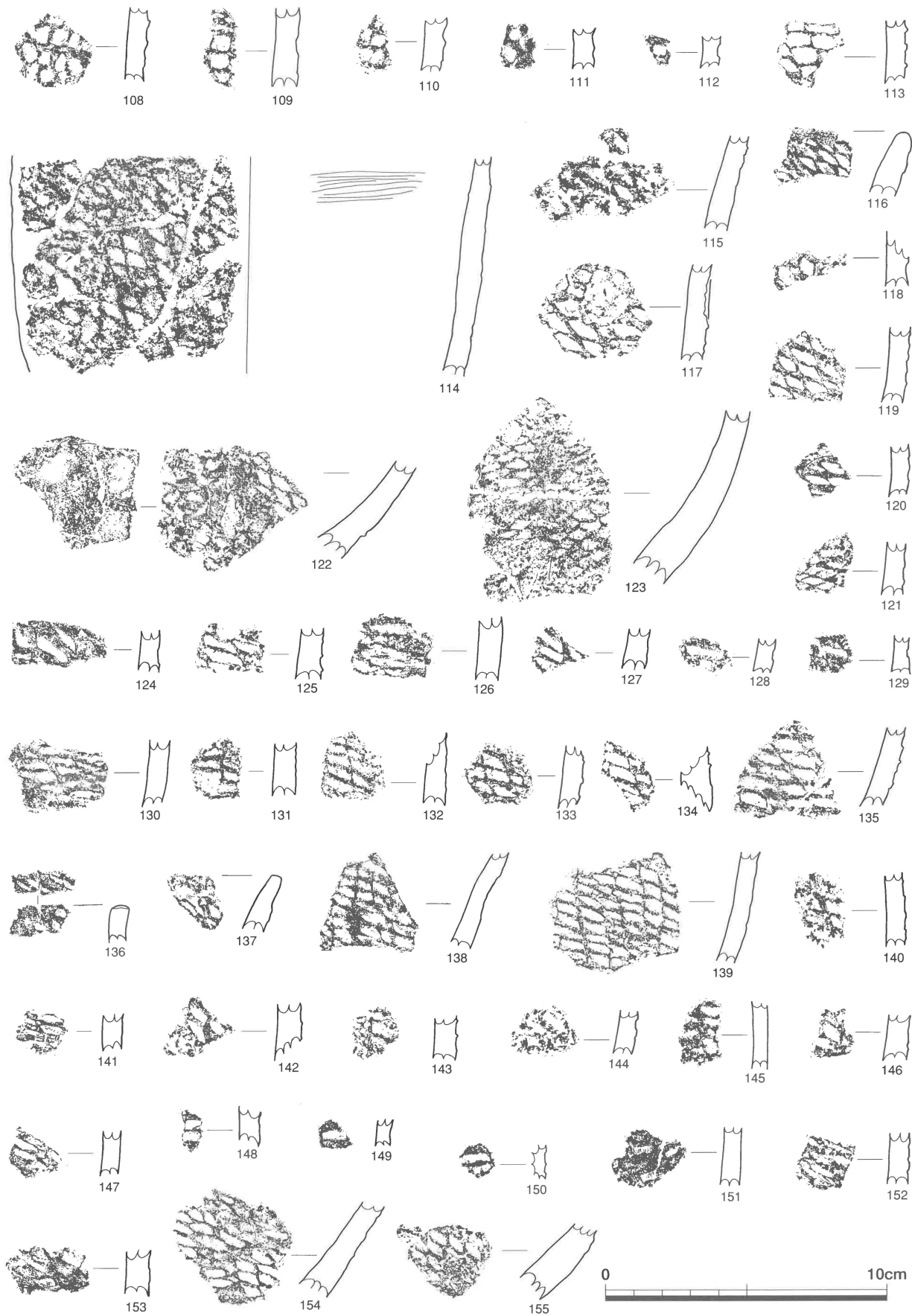
挿図第41 E区出土遺物実測図6 (E-SB16・E-SB17、E-SK8・E-SK15)

E-SB18 (98~107)

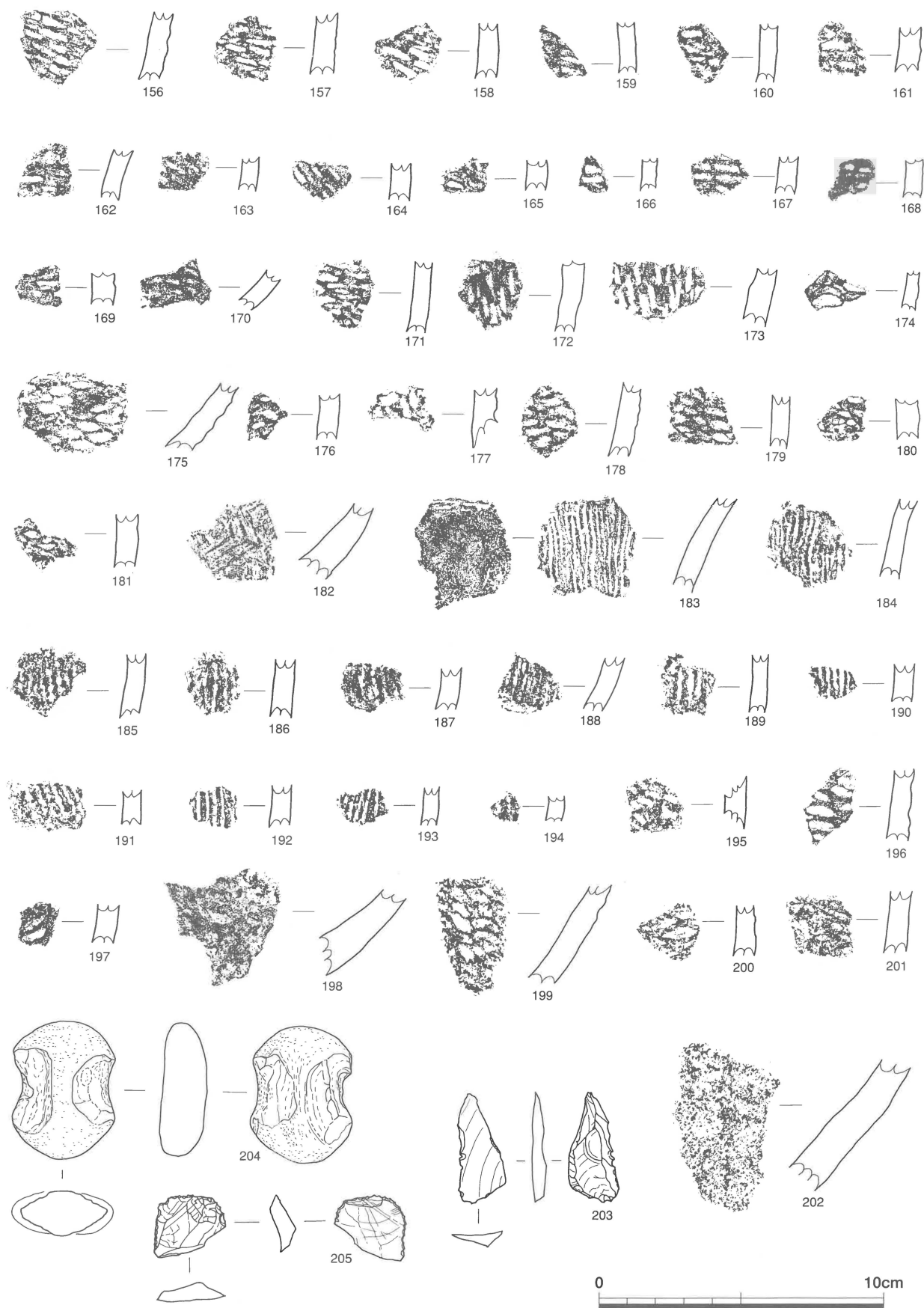


挿図第42 E区出土遺物実測図7 (E-SB18)

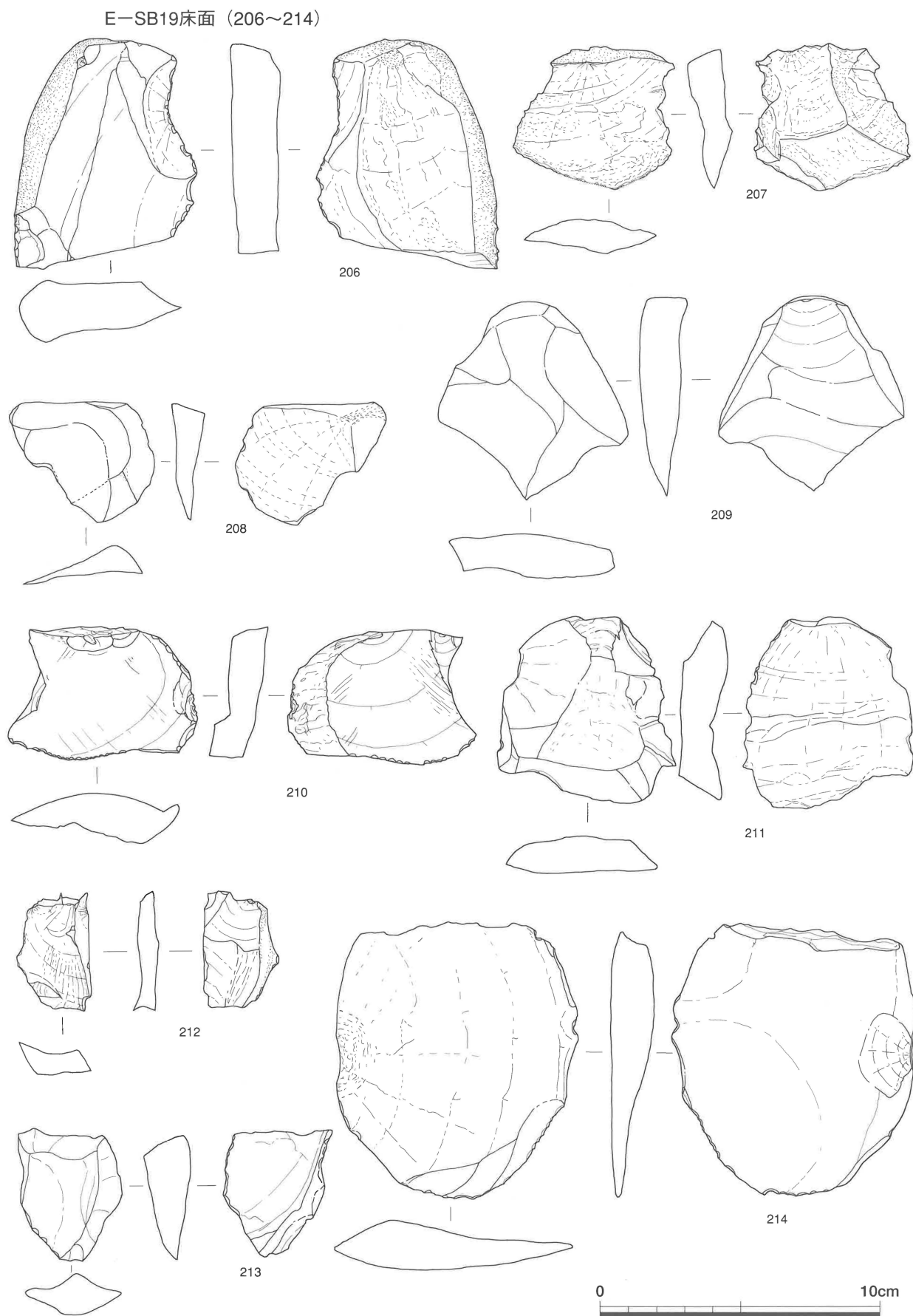
E-SB19 (108~205)



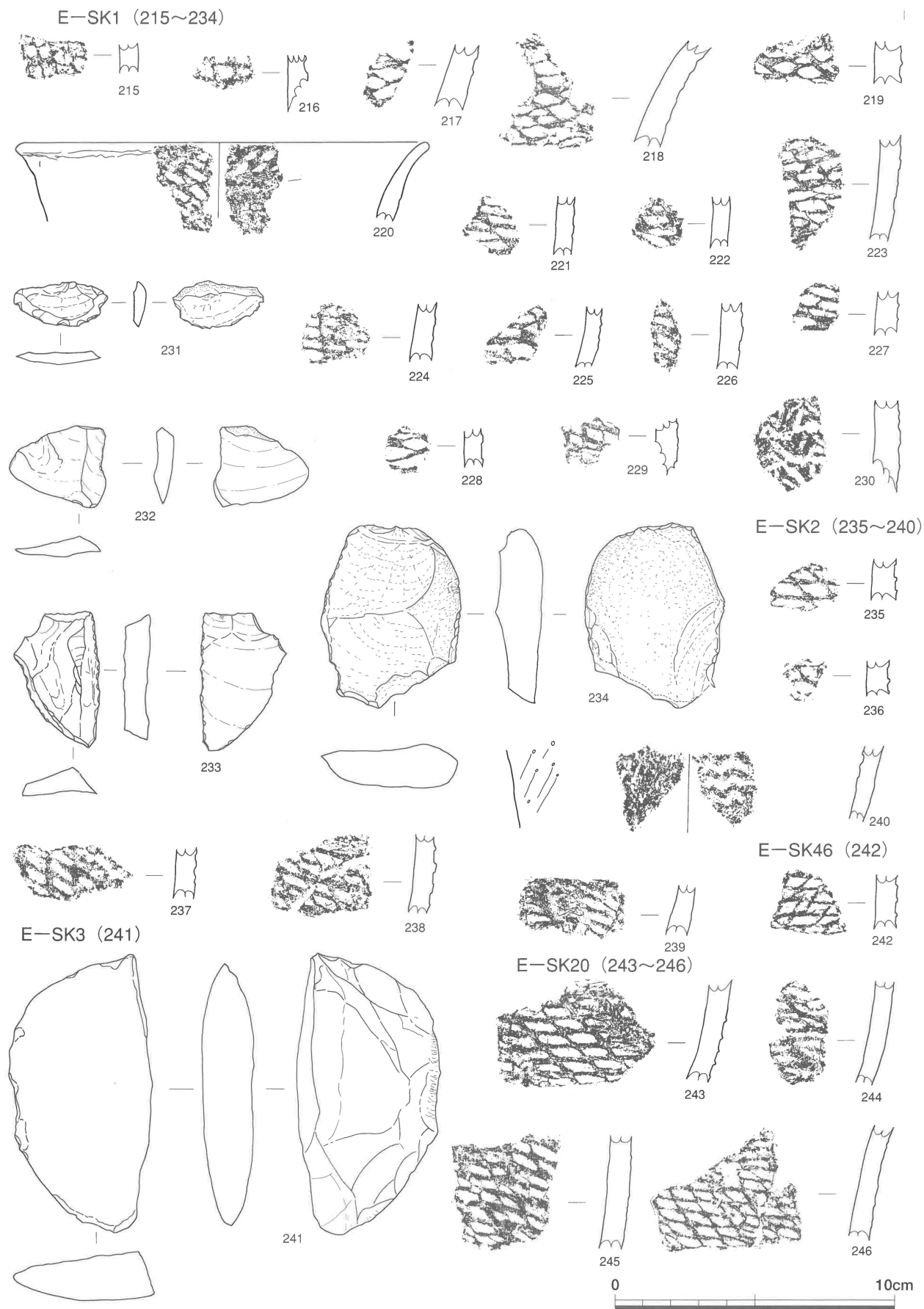
挿図第43 E区出土遺物実測図8 (E-SB19)



挿図第44 E区出土遺物実測図9 (E-SB19)



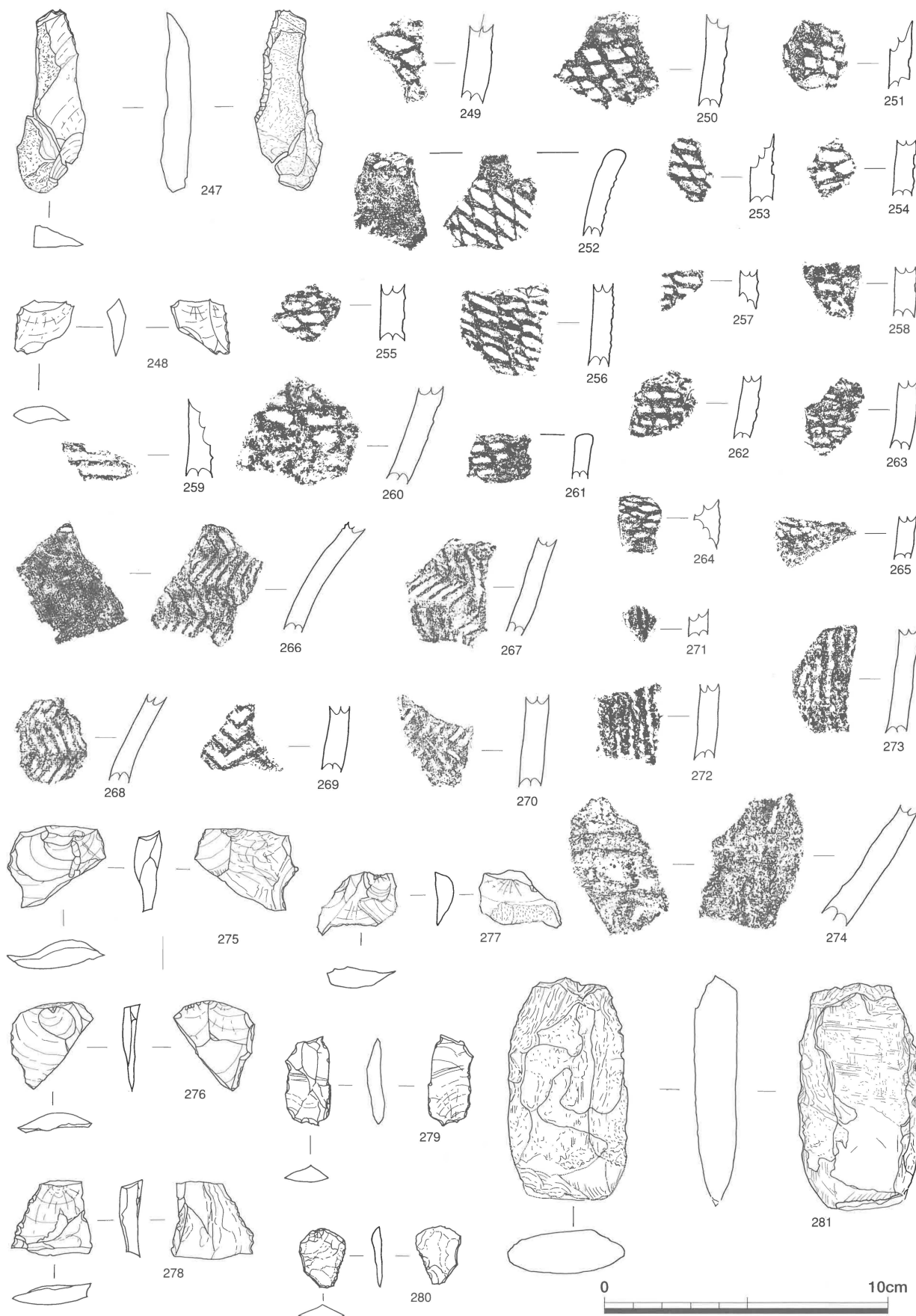
挿図第45 E区出土遺物実測図10 (E-SB19床面)



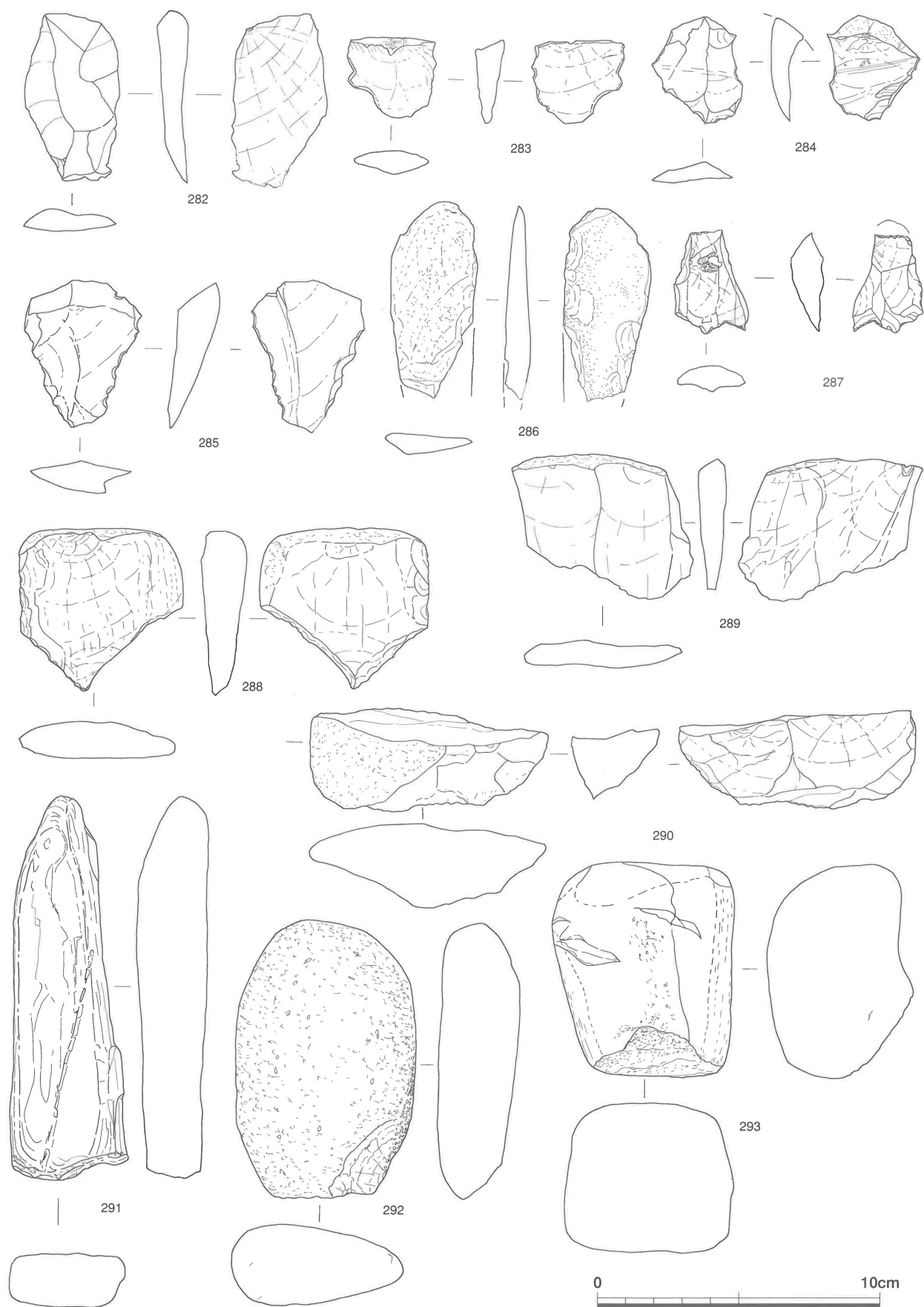
挿図第46 E区出土遺物実測図11 (E-SK1~E-SK3・E-SK20・E-SK46)

東部ピット (247・248)

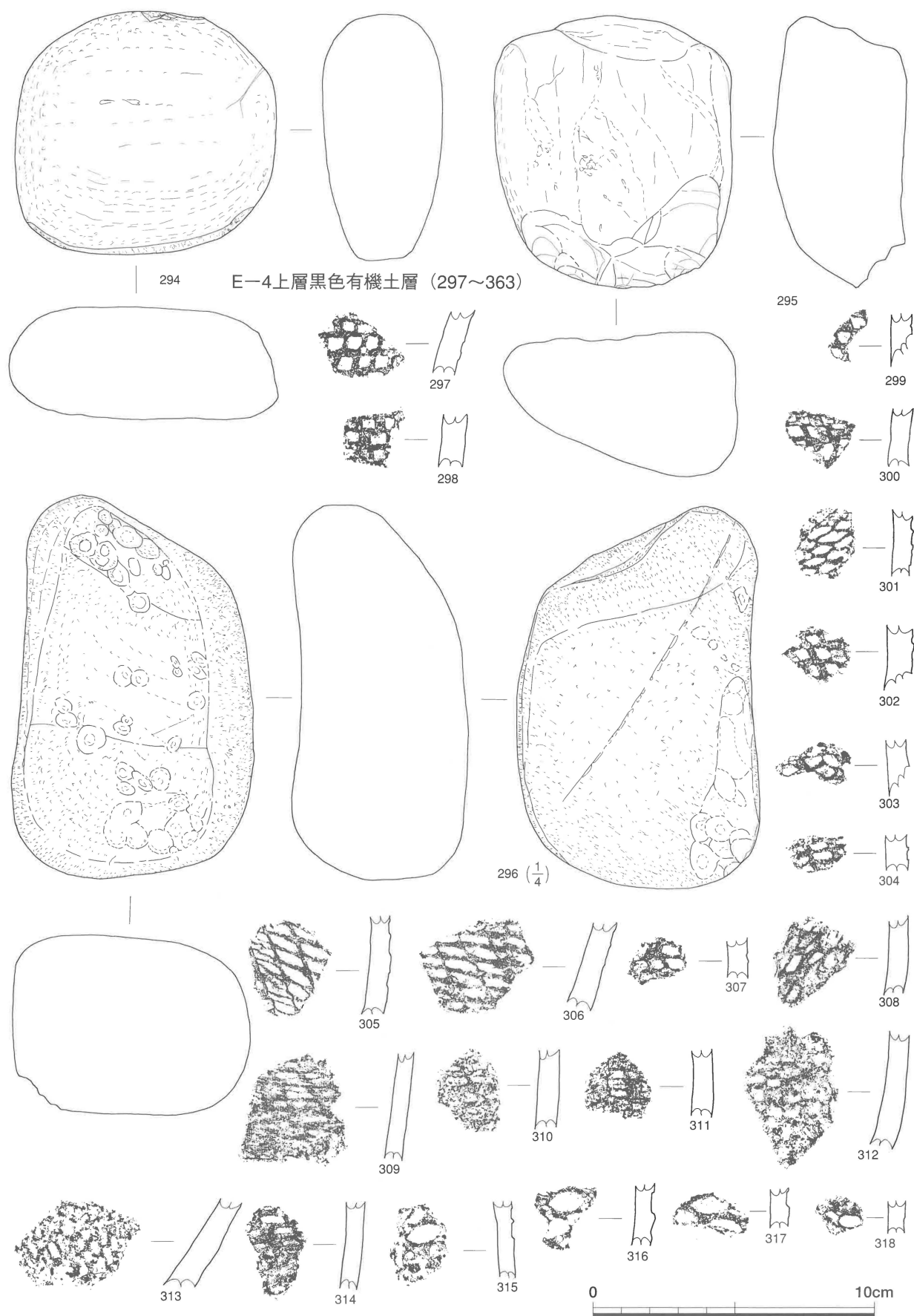
集石内遺構 (249~296)



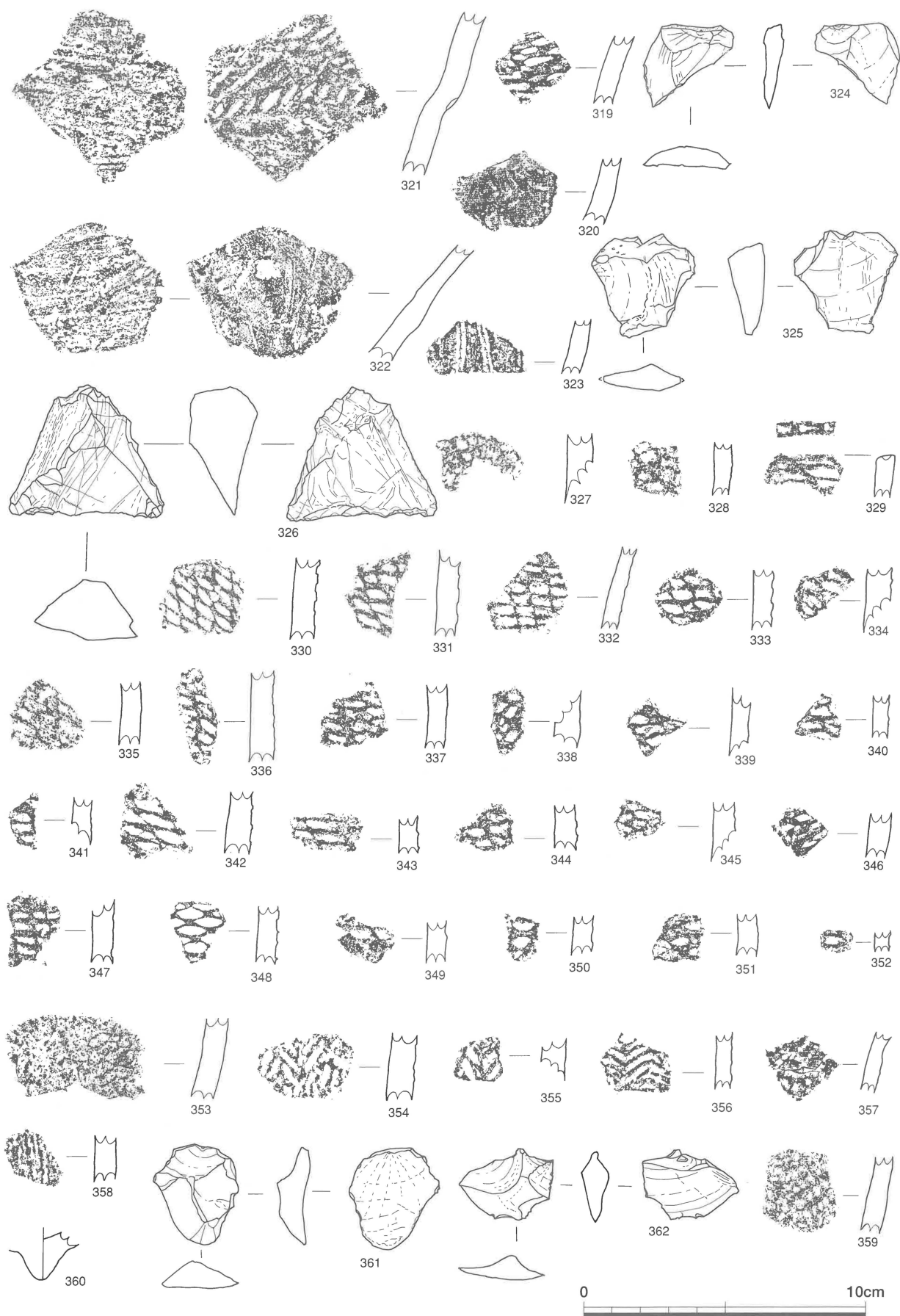
挿図第47 E区出土遺物実測図12 (東部ピット、集石遺構内)



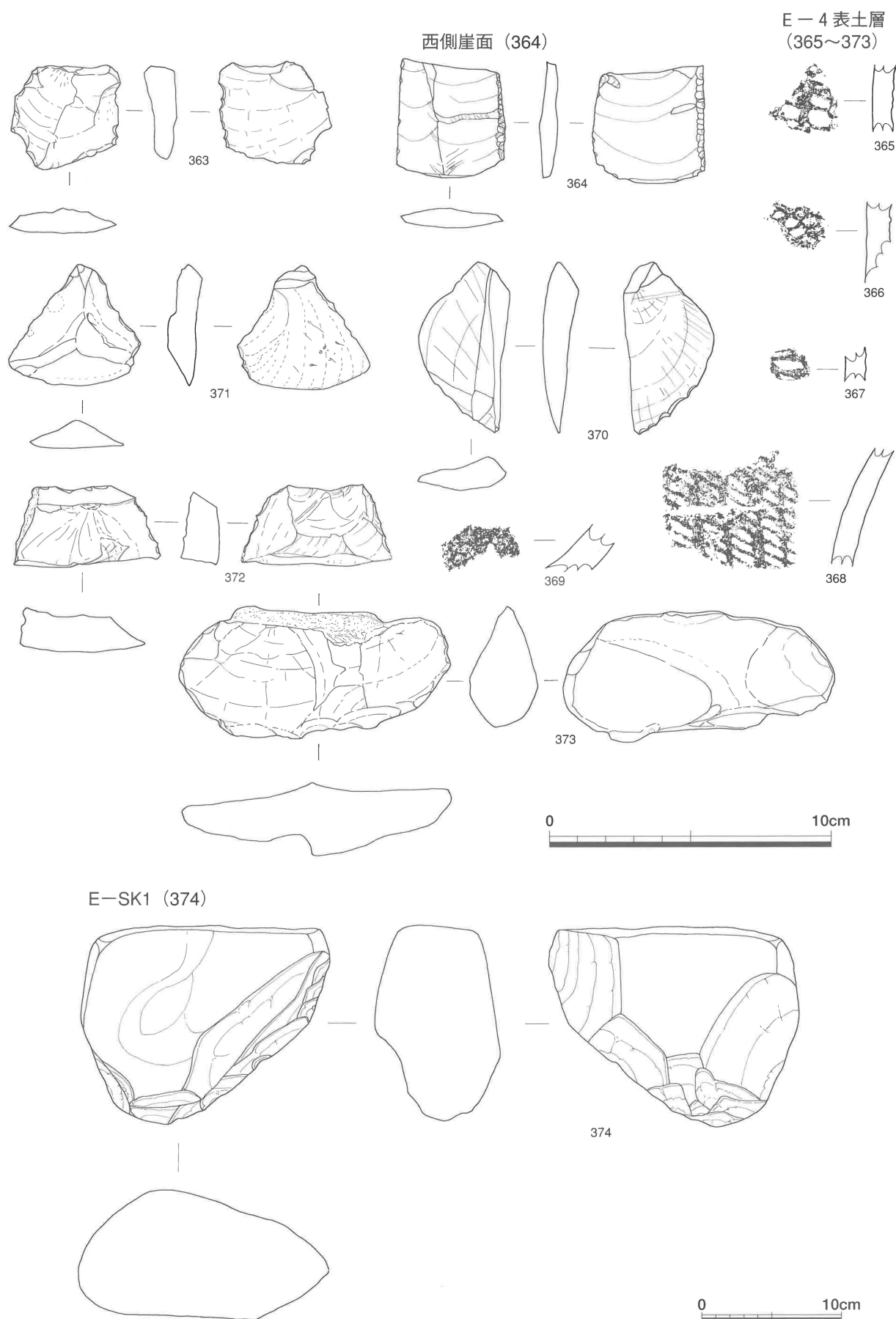
挿図第48 E区出土遺物実測図13（集石遺構内）



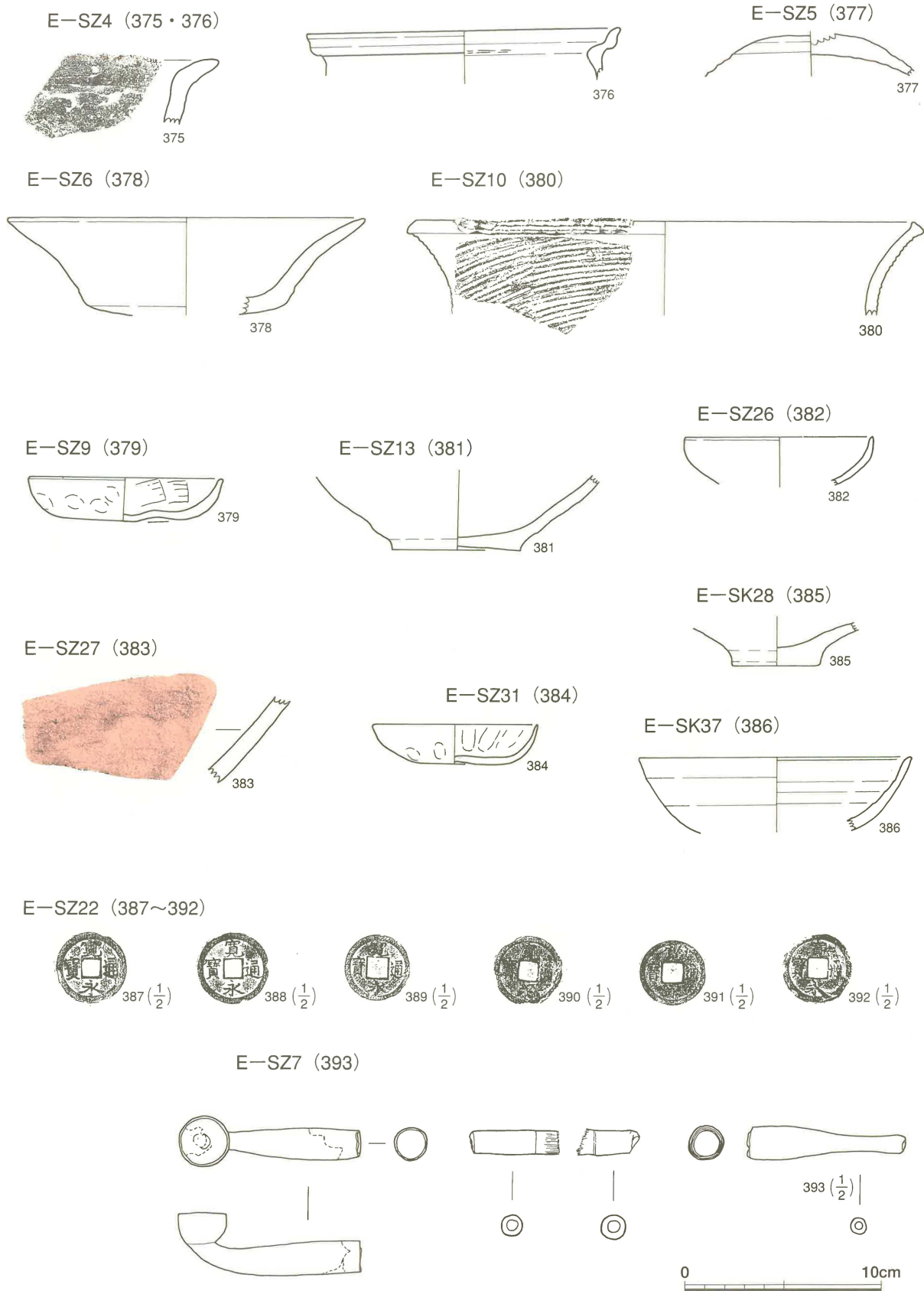
挿図第49 E区出土遺物実測図14 (集石遺構内E-4上層黒色有機土層)



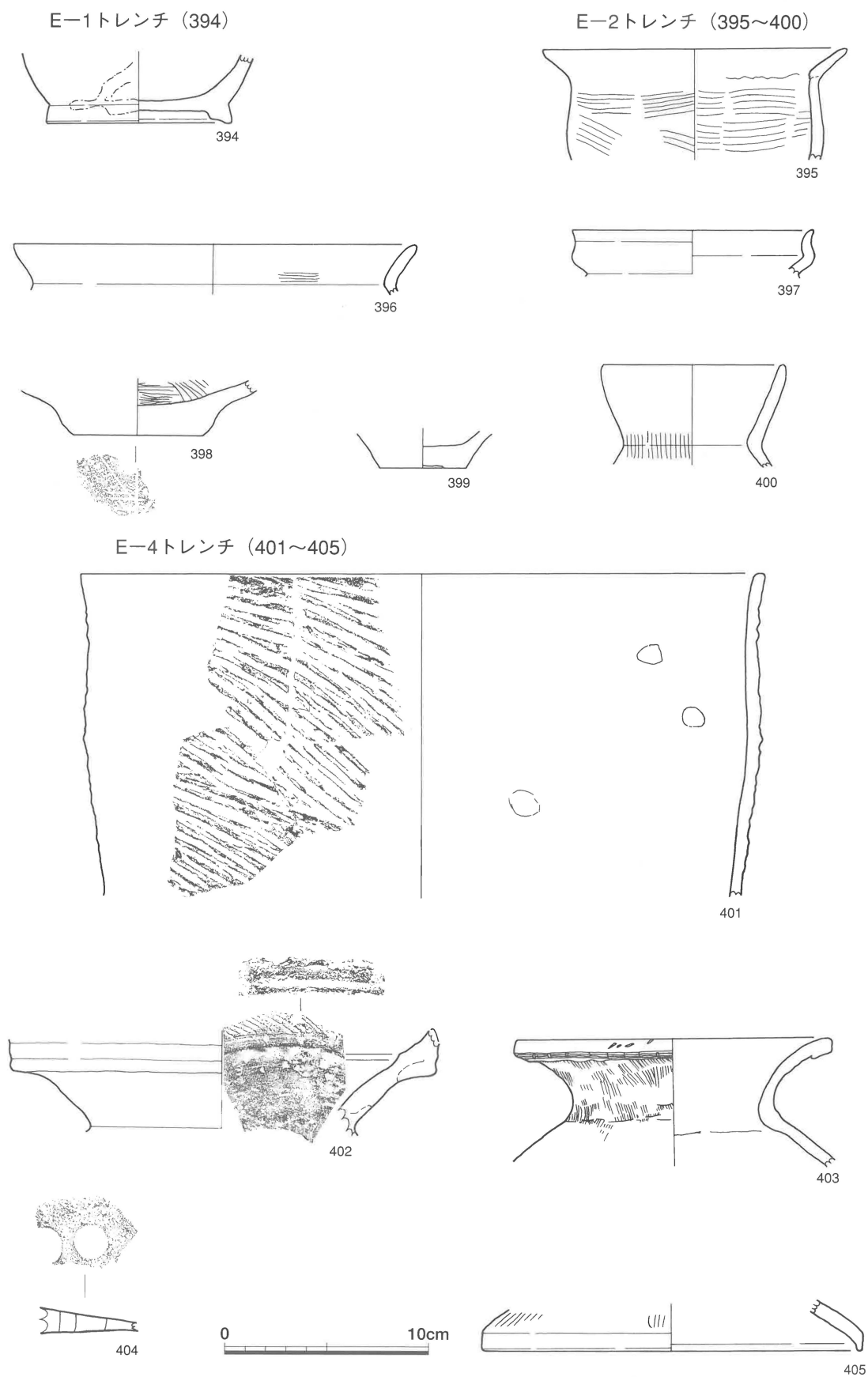
挿図第50 E区出土遺物実測図15 (E-4 上層黒色有機土層)



挿図第51 E区出土遺物実測図16 (E-4 上層黒色有機土層、西側崖面、E-4 表土層、E-SK1)

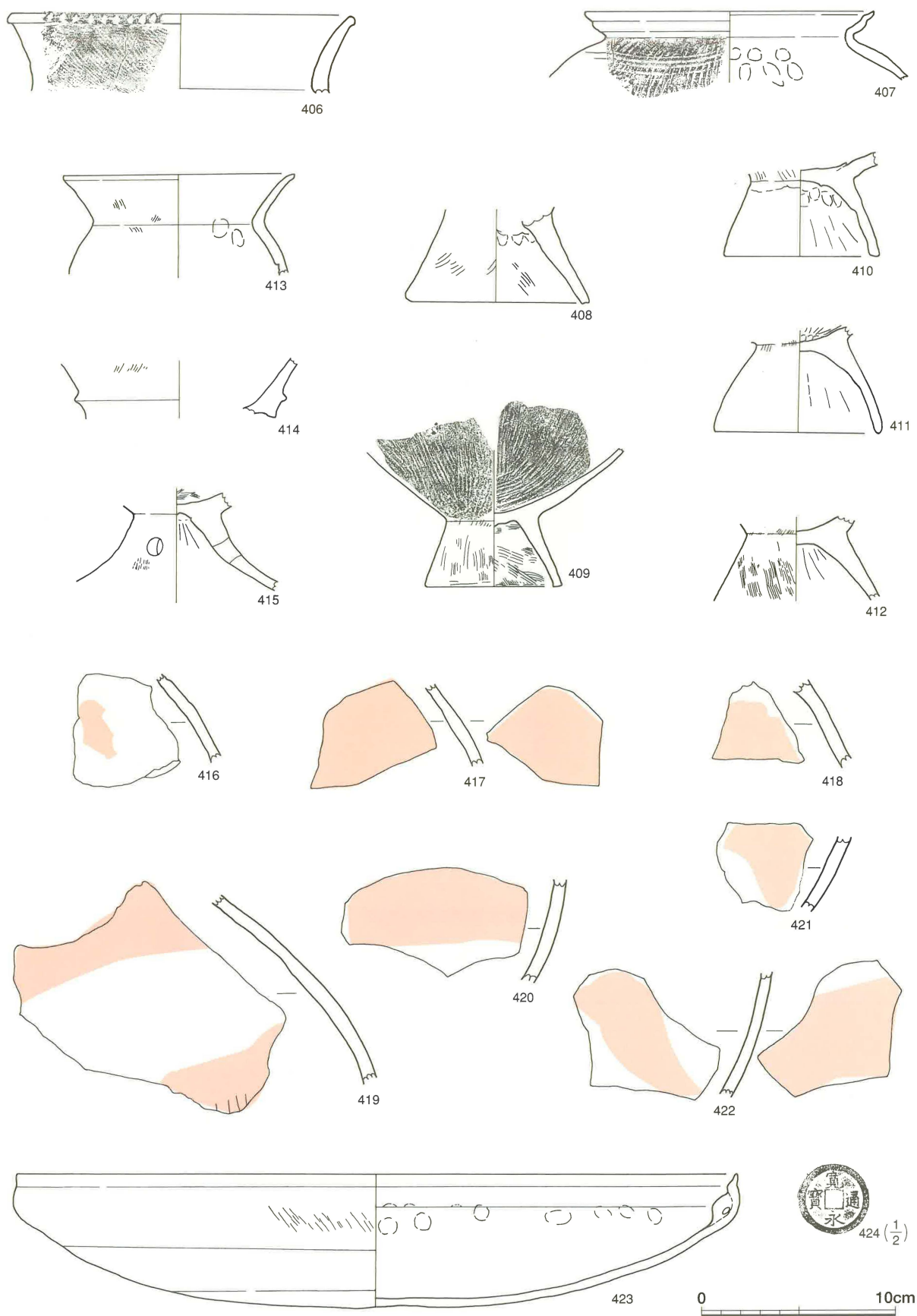


挿図第52 E区出土遺物実測図17 (E-SK28・E-SK37、E-SZ4~E-SZ7・
E-SZ9・E-SZ10・E-SZ13・E-SZ22・E-SZ26・E-SZ27・
E-SZ31)



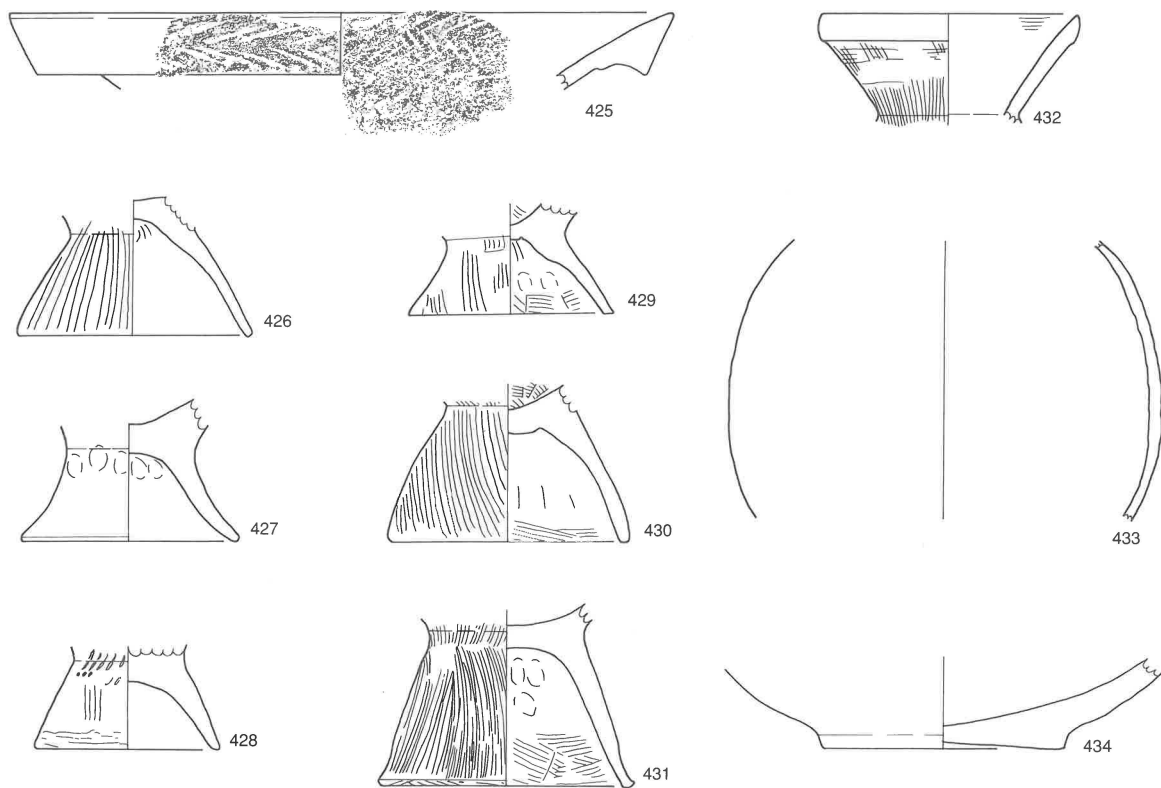
挿図第53 E区出土遺物実測図18 (E-1トレンチ・E-2トレンチ・E-4トレンチ)

E-1・3 黒色有機土層 (406~424)

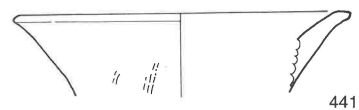


挿図第54 E区出土遺物実測図19 (E-1・3 黒色有機土層)

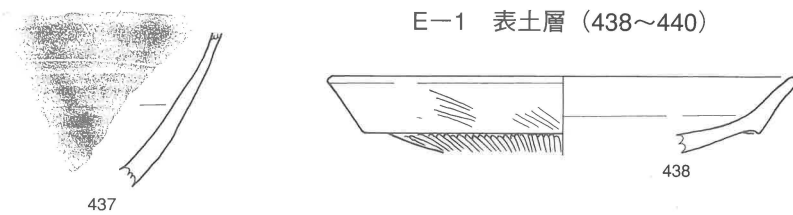
E-2 黒色有機土層 (425~437)



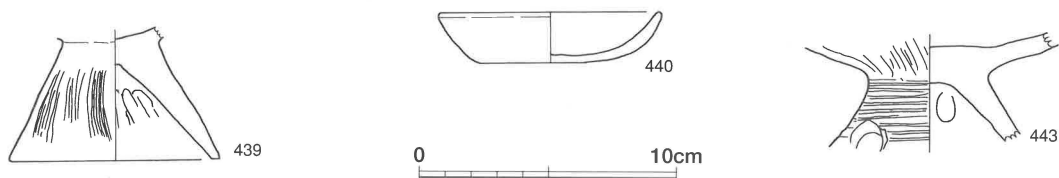
E-3 表土層 (441~442)



E-1 表土層 (438~440)



E-4 表土層 (443)



挿図第55 E区出土遺物実測図20 (E-2 黒色有機土層、E-1~E-4 表土層)